

平成29年度労災疾病臨床研究事業費補助金

「高次脳機能障害者の診断・リハビリ・社会復帰促進パスの策定」分担研究

京都府共通の脳卒中地域連携パス利用者と 高次脳機能障害の実態調査報告書

平成30年（2018年）1月

京都府立医科大学大学院医学研究科神経内科学
京都府リハビリテーション支援センター
武 澤 信 夫

はじめに

京都府では、2005 年に京都府医師会の呼びかけで京都府リハビリテーション協議会が発足し、2008 年度より急性期病院、回復期リハビリテーション（以下、リハ）病院の協力により京都府共通の脳卒中地域連携パスが作成・運用されてきた。2012 年度より、IT を用いた地域連携パスオンラインシステム（京都府 Microsoft SharePoint workspace による地域連携パス情報共有ツール）が構築されてきました。

これまで、脳卒中地域連携パスの「7・1 報告」は、前年の 7 月 1 日から当年の 6 月 30 日までの 1 年間の地域連携パスの利用状況を近畿医務局に報告する資料として作成されてきました。京都府共通の地域連携パスの運用状況は、2010 年の「7.1 報告」で急性期脳卒中診療を担当する医療機関である計画管理病院の総患者数が、2,048 人であったのが、2014 年 7 月 1 日から 2015 年 6 月 30 日の 1 年間の運用実績では、計画管理病院 18 施設への脳卒中入院患者数は 4,214 人と倍増していました。

また、回復期リハビリテーションを必要とする脳卒中地域連携パスの利用者数も 801 人と倍増しましたが、利用率は 19.0%と変化がなく、十分な実態把握ができていませんでした。

現在、京都府脳卒中地域連携パス会議は、大腿骨頸部骨折地域連携パス会議との合同会議で運営され、脳卒中診療の急性期を担当する計画管理病院 18 施設と、回復期リハ病棟を有する回復期の連携病院 45 施設、3 段階目の保健医療機関・施設等約 30 施設の参加により運営されています。尚、北部は丹後・中丹医療圏域で、同じ京都府共通パスを用いて北部地域連携パス会議を運営しています。

また、2010 年 1 月 1 日～12 月 31 日までに、地域連携パスを用いてリハを受けた 439 人のデータでは、233 人、53.1%に高次脳機能障害を発症し、認知症を除くと一人当たり 1.8 種類の高次脳機能障害を合併していました。注意障害・遂行機能障害・記憶障害などの前頭葉の症状と思われる障害は、143 人、32.6%と高率にみられ、失語症は 105 人、23.9%、左無視は 62 名、14.0%にみられました。

現在、2006 年度より開始された高次脳機能障害支援普及事業は、2012 年度より失語症等も対象とすることとなり高次脳機能障害及び関連障害普及支援事業として、全国で取り組まれています。そして、高次脳機能障害支援拠点の相談事業においても、脳卒中を原因とする事例が増加しており、脳卒中地域連携パスを用いて高次脳機能障害の現状を検討したいと思います。

今回、平成28年度労災疾病臨床研究事業費補助金「高次脳機能障害の診断・リハビリ・社会復帰促進パスの策定」（150502、研究代表者 村井俊哉）により、2014年7月1日から2015年6月30日の1年間に運用された地域連携パスを用いて、回復期リハビリテーションを受けた脳卒中患者の現状と高次脳機能障害の実態調査を行ったので報告します。（報告書は、京都府リハビリテーション支援センターのホームページよりダウンロード可能）

2018年 1月

分担研究者

武澤信夫 （京都府立医科大学大学院医学研究科神経内科学／
京都リハビリテーション支援センター）

研究協力者

大戸淳志 （京都府リハビリテーション支援センター／京都府宇治児童相談所京田辺支所）
平野哲雄 （京都府立医科大学附属北部医療センター）
小泉英貴 （京都府心身障害者福祉センター附属リハビリテーション病院）
木村彩香 （京都大原記念病院）
近藤正樹 （京都府立医科大学大学院医学研究科神経内科学）
水野敏樹 （京都府立医科大学大学院医学研究科神経内科学）

目 次

第1章	調査の概要	1
1.	調査の目的	1
2.	調査の実施要領	1
3.	調査票の配付・回収の状況	2
4.	調査項目	3
第2章	調査の結果	11
2-1	基本情報	11
2-2	急性期情報（医師）	14
2-3	急性期情報（リハビリ）	22
2-4	回復期情報（医師）	24
2-5	回復期情報（看護師）	30
2-6	回復期情報（リハビリ）	43
2-7	回復期情報（MSW）	59
第3章	調査結果のまとめ	76
参考資料		82
1.	調査依頼書	82
2.	調査表	88

第1章 調査の概要

1. 調査の目的

現在、京都府脳卒中地域連携パス会議は、大腿骨頸部骨折地域連携パス会議との合同会議で運営され、計画管理病院18施設、回復期リハビリテーションの連携病院45施設、3段階目の保健医療機関・施設等約30施設の参加により運営されている。

2009年7月1日から2010年6月30日の調査では、患者総数が2048名のうち、パス利用者が396名で、パスを用いた検討を行ったが、その後は実施できていない。

また、2014年7月1日から2015年6月30日の1年間の運用実績では、計画管理病院18施設への脳卒中入院患者数は、4,214人で在宅復帰率は61.2%であり、地域連携パスの利用者数は801人、利用率19.0%で、その在宅復帰率48.1%となっている。

この地域連携パスのデータを用いて、治療、リハビリテーション、社会復帰、介護保険の利用、生活期への地域連携、高次脳機能障害への支援等の分析を行い、脳卒中地域連携パスの有用性を明確にし、介護保険の利用や社会復帰を促進する要因の研究を基礎資料を得ることを目的として本調査を実施した。

2. 調査の実施要領

(1) 調査対象

対象者の要件	対象者数
2014年7月1日～2015年6月30日の期間に計画管理病院に入院し、その後、京都府共通の脳卒中地域連携パスにて、回復期リハビリテーション病院に入院・退院した患者	801人

(2) 調査期間

平成28(2016)年11月15日～平成29(2017)年1月31日。

(3) 調査方法

郵送配付・郵送回収。

配付では、送付状（案内文）、回答用Excelファイル（CD-R）、連絡票（回答者との連絡用）とした。

3. 調査票の配付・回収の状況

調査票の配付は、次の32病院であり、回収された病院は21病院、患者数725人であった。

図表 1-3-1 調査対象病院及び回収結果

番 号	病 院 名	回答のあった 患者数（人）
1	社会医療法人愛仁会リハビリテーション病院	19
2	洛和会音羽病院	－
3	洛和会音羽リハビリテーション病院	1
4	京都地域医療学際研究所 がくさい病院	39
5	医療法人康生会 武田病院	79
6	京都大原記念病院	121
7	京都民医連中央病院	－
8	公益社団法人信和会 京都民医連第二病院	63
9	京都南西病院	22
10	博愛会富田病院	2
11	京都博愛会病院	22
12	医療法人社団育生会 久野病院	18
13	十条武田リハビリテーション病院	141
14	医療法人石鎚会 田辺記念病院	63
15	医療法人一仁会 脳神経リハビリ北大路病院	41
16	洛西シミズ病院	8
17	医療法人寿尚会 洛陽病院	－
18	六地藏総合病院	－
19	医療法人愛友会 明石病院	－
20	京都伏見しみず病院	－
21	水無瀬病院	19
22	医療法人啓信会 きづ川病院	4
23	蘇生会総合病院	11
24	社会医療法人岡本病院 京都岡本記念病院	9
25	千春会病院	－
26	医療法人淀さんせん会 金井病院	－
27	医療法人弘仁会 大島病院	13
28	医療法人美杉会 男山病院	－
29	登美ヶ丘リハビリテーション病院	25
30	学研都市病院	5
31	明治国際医療大学附属病院	－
32	医療法人真生会 向日回生病院	－
合 計		725

参考

急性期脳卒中診療を担当する計画管理病院の脳卒中地域連携パス参加医療機関

医仁会武田総合病院	宇治徳洲会病院
済生会京都府病院	京都医療センター
京都桂病院	京都きづ川病院
京都九条病院	京都市立病院
京都第一赤十字病院	京都大学附属病院
京都第二赤十字病院	京都府立医科大学附属病院
京都民医連中央病院	京都山城総合医療センター
公立南丹病院	田辺中央病院
康生会武田病院	第二岡本総合病院
洛和会音羽病院	

京都府南部：19 病院(2015 年 2 月現在)

4. 調査項目

① 基本情報

code	大項目	小項目	内容	条件・注	選択肢
A01	番号		文字・数値	★病院ごとの個人コード等	
A02	年齢		数値		
A03	年代		数値	[A02]をランク分け	(0=10 歳未満, 1=10 代, 2=20 代, 3=30 代, 4=40 代 5=50 代, 6=60 代, 7=70 代, 8=80 代, 9=90 代, 10=100 歳以上)
A04	年代 3 区分		数値	[A03]を集約	(1=1～39 歳, 2=40～64 歳, 3=65 歳以上)
A05	性別		選択肢		(1=男, 2=女, 99=不明)
A06	病名		選択肢		(1=脳梗塞, 2=脳出血, 3=くも膜下出血, 99=不明)
A07	病型		選択肢	[A06] (病名) =1 (脳梗塞) のみ有効	(1=心原性, 2=アテローム, 3=ラクナ, 4=その他, 99=不明)

② 急性期情報（医師シート）

code	大項目	小項目	内容	条件・注	選択肢
B01	急性期入院日		西暦年 月日		
B02	急性期退院日		西暦年 月日		
B03	左右		選択肢		(1=右, 2=左, 3=中央, 4=両側, 99=不明)
B04	大脳につき		選択肢		(1=皮質, 2=皮質下, 3=皮質+皮質下, 4=その他, 99=不明)
B05	血管系	内頸動脈	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B06		前交通動脈	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B07		前大脳動脈	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B08		中大脳動脈	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B09		椎骨脳底動脈	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B10	大脳部位	前頭葉	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B11		頭頂葉	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B12		側頭葉	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B13		後頭葉	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B14		被殻	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B15		視床	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B16		小脳	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B17		中脳	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B18		橋	選択肢		(0=なし, 1=有り)
B19		延髄	選択肢		(0=なし, 1=有り)

③ 急性期情報（リハビリシート）

code	大項目	小項目	内容	条件・注	選択肢
C01	急性期FIM	入院時(運動)	数値		
C02		入院時(認知)	数値		
C03		入院時(合計)	数値	[C01]+[C02] (入院時の急性期 FIM の運動と認知の合計)	
C04		退院時(運動)	数値		
C05		退院時(認知)	数値		
C06		退院時(合計)	数値	[C04]+[C05] (退院時の急性期 FIM の運動と認知の合計)	
C07		改善度	数値	[C06]-[C03] (急性期 FIM の入院時と退院時の差)	
C08	急性期 mRS		数値		

④ 回復期情報（医師シート）

code	大項目	小項目	内容	条件・注	選択肢
D01	回復期入院日		西暦年 月日	（急性期退院日と同日に 設定。異なる場合は西暦 で入力）	
D02	発症～回復期 入院		西暦年 月日	[D01]-[A08]（回復期入院 日と発症日の差）	
D03	回復期退院日		西暦年 月日		
D04	回復期在院日 数		数値	[D03]-[D01]	
D05	退院時 mRS		数値		
D06	mRS 改善度		数値	[D05]-[C08]（急性期mRS の入院時と退院時の差）	
D07	経過中合併症	肺炎	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D08		痙攣発作	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D09		DVT	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D10		消化管出血	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D11		尿路感染	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D12		その他	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D13	リスク因子	骨粗鬆症	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D14		肝機能障害	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D15		呼吸器疾患	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D16		骨折の既往	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D17		神経筋疾患	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D18		腎不全	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D19		認知症	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D20		心房細動	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D21		糖尿病	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D22		脳卒中既往	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D23		心不全	選択肢		(0=なし, 1=有り)
D24		悪性腫瘍	選択肢		(0=なし, 1=有り)

⑤ 回復期情報（看護師シート）

code	大項目	小項目	内容	条件・注	選択肢
E01	栄養管理		選択肢		(1=経口自立, 2=経口介助, 3=経鼻胃管, 4=胃瘻, 5=IVH, 6=末梢輸液, 99=不明)
E02	排便		選択肢		(1=自立, 2=トイレ誘導, 3=ポータブルトイレ, 4=便器, 5=おむつ, 99=不明)
E03	排尿		選択肢		(1=自立, 2=トイレ誘導, 3=ポータブルトイレ, 4=尿器, 5=おむつ, 6=導尿, 7=留置カテ, 99=不明)
E04	清潔		選択肢		(1=自立, 2=浴槽入浴, 3=機械浴, 4=シャワー浴, 6=ベッド上清拭, 99=不明)
E05	行動障害		選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
E06	行動障害内容（ありの方のみ）	幻覚幻聴	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E07		不穏	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E08		昼夜逆転	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E09		暴力	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E10		徘徊	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E11		不潔行為	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E12		興奮	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E13		妄想	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E14		介護への抵抗	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E15		不眠	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E16		転倒転落	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E17		精神症状	選択肢		(0=なし, 1=有り)
E18	看護必要度	入院時	数値		
E19		退院時	数値		
E20		改善度	数値	[E19]-[E18] (看護必要度の入院時と退院時の差)	
E21	日常生活自立度	障害老人	選択肢		(1=自立, 2=J1, 3=J2, 4=A1, 5=A2, 6=B1, 7=B2, 8=C1, 9=C2, 99=不明)
E22		認知症老人	選択肢		(1=自立, 2=Ⅰ, 3=Ⅱa, 4=Ⅱb, 5=Ⅲa, 6=Ⅲb, 7=Ⅳ, 8=Ⅴ, 9=M, 99=不明)
E23		認知症老人 2	数値	[E22]を集約	(1=正常, 2=Ⅰ, 3=Ⅱ～M, 99=不明)

⑥ 回復期情報（リハビリシート）

code	大項目	小項目	内容	条件・注	選択肢
F01	利き手		選択肢		(1=右, 2=左, 99=不明)
F02	麻痺		選択肢		(1=右, 2=左, 3=両側, 99=不明)
F03	BrStage	上肢	選択肢		(1=Ⅰ, 2=Ⅱ, 3=Ⅲ, 4=Ⅳ, 5=Ⅴ, 6=Ⅵ, 99=不明)
F04		手指	選択肢		(1=Ⅰ, 2=Ⅱ, 3=Ⅲ, 4=Ⅳ, 5=Ⅴ, 6=Ⅵ, 99=不明)
F05		下肢	選択肢		(1=Ⅰ, 2=Ⅱ, 3=Ⅲ, 4=Ⅳ, 5=Ⅴ, 6=Ⅵ, 99=不明)
F06	健側 MMT	上肢	選択肢		(0=0, 1=1, 2=2, 3=3, 4=4, 5=5, 99=不明)
F07		手指	選択肢		(0=0, 1=1, 2=2, 3=3, 4=4, 5=5, 99=不明)
F08		下肢	選択肢		(0=0, 1=1, 2=2, 3=3, 4=4, 5=5, 99=不明)
F09	協調運動障害		選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
F10	嚥下障害		選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
F11	構音障害		選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
F12	感覚障害		選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
F13	高次脳機能障害		選択肢	高次脳機能障害内容のいずれかが[1]の場合=[1]	(0=なし, 1=有り)
F14	高次脳機能障害_数		数値	高次機能障害=1 の合計数（合併症）	
F15	高次脳機能障害内容	失語	選択肢		(0=なし, 1=有り)
F16		失行	選択肢		(0=なし, 1=有り)
F17		失認	選択肢		(0=なし, 1=有り)
F18		半側空間無視	選択肢		(0=なし, 1=有り)
F19		前頭葉障害	選択肢		(0=なし, 1=有り)
F20		未確定認知障害	選択肢		(0=なし, 1=有り)
F21		注意障害	選択肢		(0=なし, 1=有り)
F22		記憶障害	選択肢		(0=なし, 1=有り)
F23		情動障害	選択肢		(0=なし, 1=有り)

回復期情報（リハビリシート）（続き）

code	大項目	小項目	内容	条件・注	選択肢
F24	HDSR	初回	数値		
F25		2回目	数値		
F26		HDSR 差	数値	2 回 目 - 初 回 [F25-F24]	
F27	MMSE	初回	数値		
F28		2回目	数値		
F29		MMSE 差	数値	2 回 目 - 初 回 [F28-F27]	
F30	MMSE2	初回(ランク)	計算		(1=正常群 (28 点以上), 2=MCI 群 (23~27 点), 3=dementia 群 (22 点以下), 99=不明)
F31	下肢装具		選択肢		(1=なし, 2=長下肢, 3=短下肢, 99=不明)
F32	回復期 FIM	入院時(運動)	数値		
F33		入院時(認知)	数値		
F34		入院時(合計)	数値	[E33]+[E32] (入院時の回復期 FIM の運動と認知の合計)	
F35		退院時(運動)	数値		
F36		退院時(認知)	数値		
F37		退院時(合計)	数値	[E36]+[E35] (退院時の回復期 FIM の運動と認知の合計)	
F38		改善度	数値	[E37]-[E34] (回復期 FIM の入院時と退院時の差)	

⑦ 回復期情報 (MSWシート)

code	大項目	小項目	内容	条件・注	選択肢
G01	介護保険内容	申請状況	選択肢		(1=認定済, 2=未申請, 3=新規申請中, 4=更新申請中, 5=区分変更申請中, 99=不明)
G02		認定	選択肢	G01 申請状況が「1=認定済」の場合で空白の場合のみ「不明」	(1=要支援 1, 2=要支援 2, 3=要介護 1, 4=要介護 2, 5=要介護 3, 6=要介護 4, 7=要介護 5, 99=不明)
G03		福祉用具	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G04		訪問看護	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G05		訪問診療	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G06		訪問リハビリ	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G07		通所系	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G08		小規模多機能	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G09		他	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G10	障害認定	身体	選択肢		(1=未申請, 2=申請中, 3=手帳有, 99=不明)
G11		視覚	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G12		聴覚	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G13		言語	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G14		肢体	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G15		内部	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G16		精神	選択肢		(1=未申請, 2=申請中, 3=手帳有, 99=不明)
G17		療育	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G18	家族状況	同居者	選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
G19		介護者	選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
G20		昼間	選択肢		(1=独居, 2=介護者あり, 99=不明)
G21	住環境内容	住宅状況	選択肢		(1=持家, 2=賃貸戸建, 3=分譲集合住宅, 4=賃貸集合住宅, 99=不明)
G22		屋外階段	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G23		屋内階段	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G24		家への出入り	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G25		廊下	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G26		浴室	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G27		トイレ	選択肢		(0=なし, 1=有り)
G28		他	選択肢		(0=なし, 1=有り)

回復期情報（MSWシート）（続き）

code	大項目	小項目	内容	条件・注	選択肢
G29	継続的 なりハ	通院	選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
G30		通所	選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
G31		訪問	選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
G32	在宅主 治医		選択肢		(0=なし, 1=有り, 99=不明)
G33	転帰カ テゴリ		選択肢		(1=在宅, 1=老人保健施設, 3= その他の施設, 4=病院, 5=未定, 99=不明)
G34	職場復 帰情報		選択肢		(1=従前より無職, 1=職場復帰 を断念, 3=条件付き職場復帰, 4=職場復帰, 5=転職一般就労, 6=転職福祉就労, 99=不明)
G35	備考		文字	★必要に応じて	

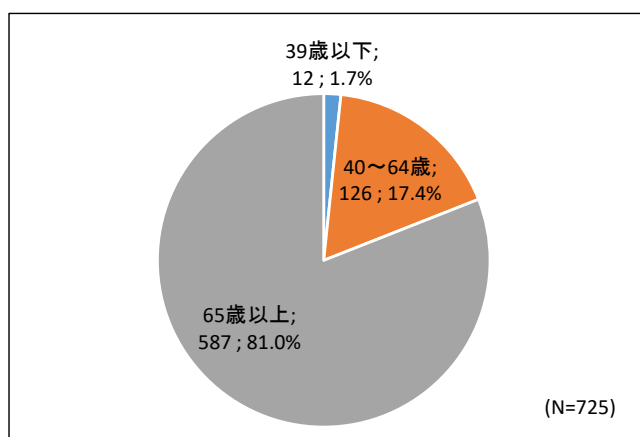
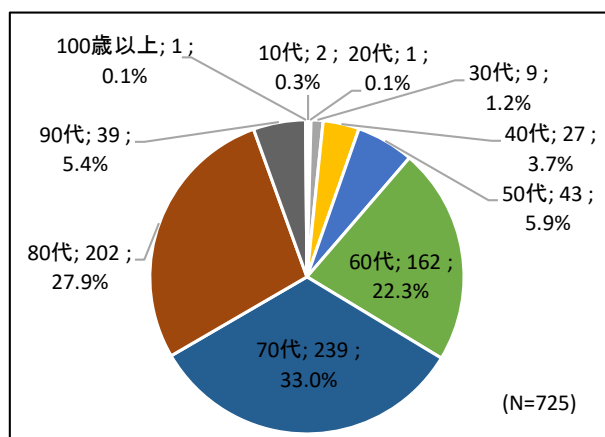
第2章 調査の結果

2-1 基本情報

- (1) 年齢・年代
(2) 性別
(3) 病名、病型（病名が脳梗塞の場合）

(1) 年代

- 70代が33.0%で最も多く、次いで80代(27.9%)、60代(22.3%)となっており、60代以上が88.7%を占めた。
- 年代を40歳、65歳で3区分すると、「65歳以上」が81.0%、40～64歳が17.4%であった。
- 男女別の平均年齢は、女性が77.3歳で男性(69.3歳)より8歳高齢であった。

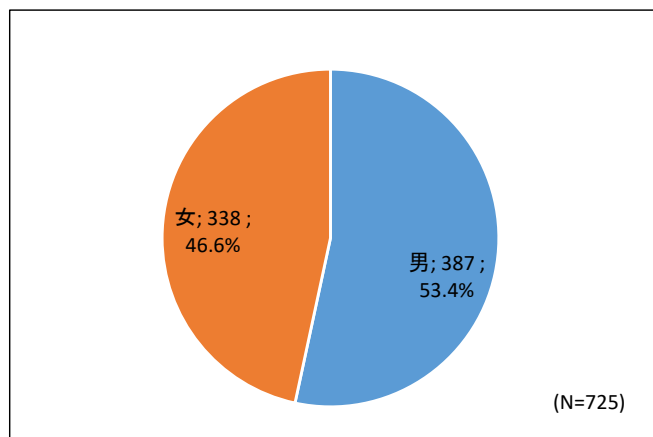


【性別平均年齢等】

性別	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値
男	69.3	387	12.779	15	94
女	77.3	338	10.307	39	102
合計	73.1	725	12.344	15	102

(2) 性別

- 男性が53.4%でやや女性より多かった。
- 「39歳以下」と「40～64歳」では、男性の比率が非常に多く、「65歳以上」では女性の比率が多くなった。



【年代3区分×性別】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
男	11	93	283	387
女	1	33	304	338
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
男	91.7%	73.8%	48.2%	53.4%
女	8.3%	26.2%	51.8%	46.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による性別について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意であった（ $\chi^2=33.098$, $df=1$, $p<0.01$ ）。この結果から、年代2区分に差がないとは言えない。また、結果によると「男性は」は「64歳以下」で、「女性は」は「65歳以上」で有意であった。

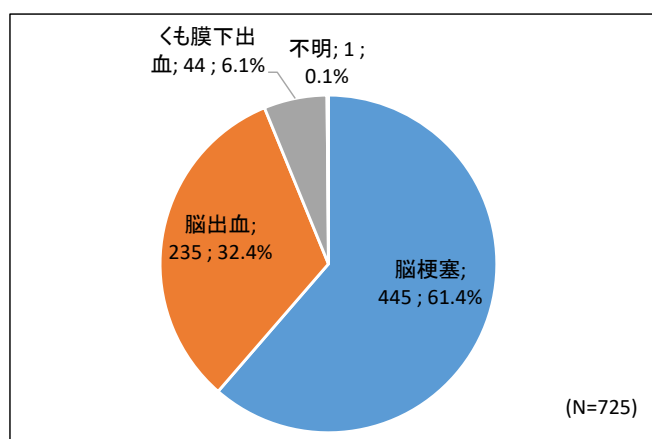
【年代2区分×性別】

		64歳以下	65歳以上	合計			
男	度数	104	283	387	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
	期待度数	73.7	313.3	387.0	Pearson χ^2 乗値	33.098	1
	調整済み残差	5.8	-5.8		尤度比	34.650	1
女	度数	34	304	338	線型と線型による連関	33.052	1
	期待度数	64.3	273.7	338.0	有効なケースの数	725	
	調整済み残差	-5.8	5.8				
合計	度数	138	587	725			
	期待度数	138.0	587.0	725.0			

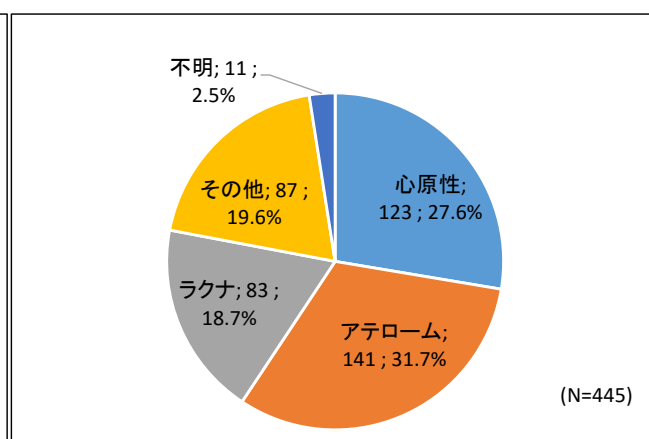
(3) 病名・病型

- 脳梗塞が61.4%で最も多く、次いで、脳出血が32.4%で、くも膜下出血が6.1%であった。
- 脳梗塞の内訳は、アテローム血栓性脳梗塞が31.7%で最も多く、次いで、心原性脳塞栓（27.6%）、ラクナ梗塞（18.7%）となっていた。
- 「39歳以下」と「40～64歳」では、脳出血・くも膜下出血の比率が多くなっていた。

【病名】



【脳梗塞の病型】



【年代3区分×病名】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
脳梗塞	4	60	381	445
脳出血	8	55	172	235
くも膜下出血	0	11	33	44
不明	0	0	1	1
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
脳梗塞	33.3%	47.6%	64.9%	61.4%
脳出血	66.7%	43.7%	29.3%	32.4%
くも膜下出血	0.0%	8.7%	5.6%	6.1%
不明	0.0%	0.0%	0.2%	0.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×病型】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
心原性	0	9	114	123
アテローム	1	20	120	141
ラクナ	0	15	68	83
その他	3	15	69	87
不明	0	1	10	11
合計	4	60	381	445

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
心原性	0.0%	15.0%	29.9%	27.6%
アテローム	25.0%	33.3%	31.5%	31.7%
ラクナ	0.0%	25.0%	17.8%	18.7%
その他	75.0%	25.0%	18.1%	19.6%
不明	0.0%	1.7%	2.6%	2.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による病名について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1％で有意であった（ $\chi^2=16.464$, $df=2$, $p<0.01$ ）。この結果から、年代2区分に差がないとは言えない。また、結果によると「脳梗塞」は「65歳以上」で、「脳出血」は「64歳以下」で有意に発症する傾向がみられた。

【年代2区分×病名】

64歳以下 65歳以上 合計				値 自由度 漸近有意確率 (両側)		
脳梗塞	度数	64	381	445	Pearson χ^2 乗値	16.464 2 0.0003
	期待度数	84.8	360.2	445.0		
	調整済み残差	-4.0	4.0			
脳出血	度数	63	172	235	尤度比	16.072 2 0.0003
	期待度数	44.8	190.2	235.0		
	調整済み残差	3.7	-3.7			
くも膜下出血	度数	11	33	44	線型と線型による連関	13.318 1 0.0003
	期待度数	8.4	35.6	44.0		
	調整済み残差	1.0	-1.0			
合計	度数	138	586	724	有効なケースの数	724
	期待度数	138.0	586.0	724.0		

※病名不明は除いている。

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による病型について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率5％で有意であった（ $\chi^2=8.671$, $df=3$, $p<0.05$ ）。この結果から、年代2区分に差がないとは言えない。また、結果によると「心原性」は「65歳以上」で有意に発症する傾向がみられた。

【年代2区分×病型】

64歳以下 65歳以上 合計				値 自由度 漸近有意確率 (両側)		
心原性	度数	9	114	123	Pearson χ^2 乗値	8.671 3 0.034
	期待度数	17.9	105.1	123.0		
	調整済み残差	-2.7	2.7			
アテローム	度数	21	120	141	尤度比	9.328 3 0.025
	期待度数	20.5	120.5	141.0		
	調整済み残差	0.2	-0.2			
ラクナ	度数	15	68	83	線型と線型による連関	7.974 1 0.005
	期待度数	12.0	71.0	83.0		
	調整済み残差	1.0	-1.0			
その他	度数	18	69	87	有効なケースの数	434
	期待度数	12.6	74.4	87.0		
	調整済み残差	1.8	-1.8			
合計	度数	63	371	434		
	期待度数	63.0	371.0	434.0		

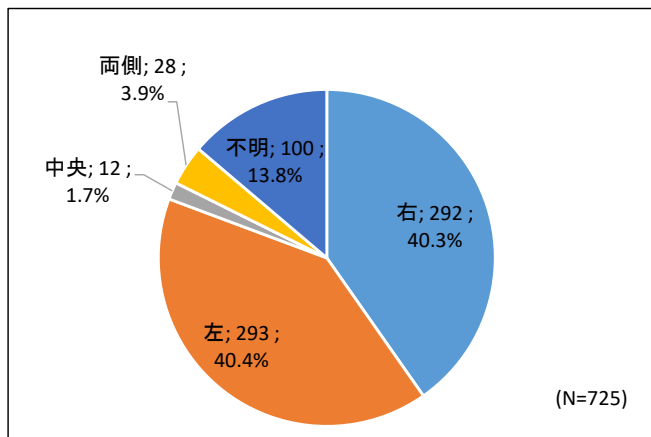
※病型不明は除いている。

2-2 急性期情報（医師）

- (1)（脳梗塞の位置）左右
- (2) 大脳について位置
- (3) 血管系（内頸動脈、前交通動脈、前大脳動脈、中大脳動脈、椎骨脳底動脈）
- (4) 大脳部位（前頭葉、頭頂葉、側頭葉、後頭葉、被殻、視床、小脳、中脳、橋、延髄）

(1)（脳梗塞の位置）左右

- 左右はほぼ同じ割合で、左が40.4%、右が40.3%であった。
- 両側は3.9%、中央は1.7%と少なかった。



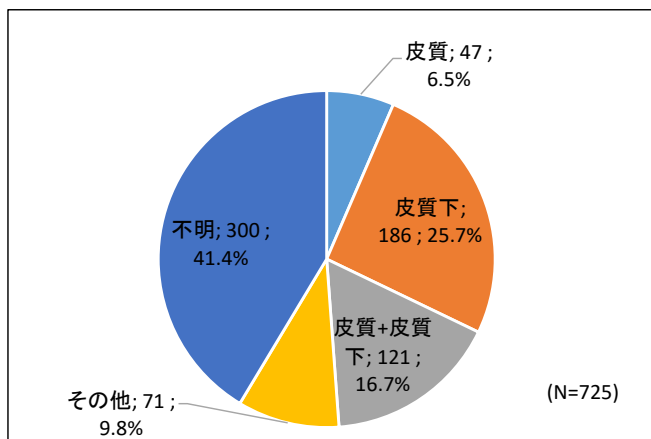
【年代3区分×（脳梗塞の位置）左右】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
右	4	60	228	292
左	5	50	238	293
中央	0	2	10	12
両側	1	3	24	28
不明	2	11	87	100
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
右	33.3%	47.6%	38.8%	40.3%
左	41.7%	39.7%	40.5%	40.4%
中央	0.0%	1.6%	1.7%	1.7%
両側	8.3%	2.4%	4.1%	3.9%
不明	16.7%	8.7%	14.8%	13.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(2) 大脳について位置

- 皮質下が25.7%で最も多く、次いで、皮質+皮質下（16.7%）となっていた。



【年代3区分×大脳について位置】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
皮質	0	4	43	47
皮質下	2	37	147	186
皮質+皮質下	2	15	104	121
その他	2	16	53	71
不明	6	54	240	300
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
皮質	0.0%	3.2%	7.3%	6.5%
皮質下	16.7%	29.4%	25.0%	25.7%
皮質+皮質下	16.7%	11.9%	17.7%	16.7%
その他	16.7%	12.7%	9.0%	9.8%
不明	50.0%	42.9%	40.9%	41.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

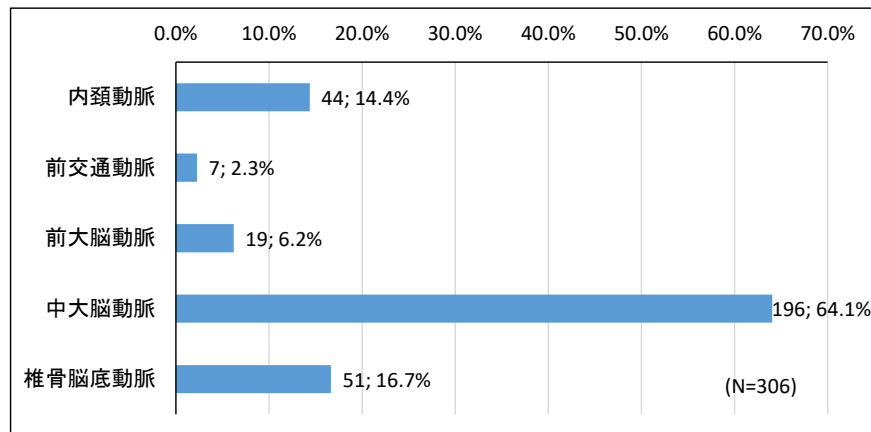
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による大脳について位置の χ^2 検定を行ったところ有意性は得られなかった。

【年代2区分×大脳について位置】

64歳以下 65歳以上 合計							
	度数	4	43	47	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
皮質	期待度数	8.9	38.1	47.0	Pearson χ^2 乗値	7.800	4
	調整済み残差	-1.9	1.9		尤度比	8.498	4
	度数	39	147	186	線型と線型による連関	0.330	1
皮質下	期待度数	35.4	150.6	186.0	有効なケースの数	725	
	調整済み残差	0.8	-0.8				
	度数	17	104	121			
皮質+皮質下	期待度数	23.0	98.0	121.0			
	調整済み残差	-1.5	1.5				
	度数	18	53	71			
その他	期待度数	13.5	57.5	71.0			
	調整済み残差	1.4	-1.4				
	度数	60	240	300			
不明	期待度数	57.1	242.9	300.0			
	調整済み残差	0.6	-0.6				
	度数	138	587	725			
合計	期待度数	138.0	587.0	725.0			
	調整済み残差						

(3) 血管系（内頸動脈、前交通動脈、前大脳動脈、中大脳動脈、椎骨脳底動脈）

- 血管系のいずれかに「あり」と回答があったのは306件で、この中では、中大脳動脈が64.1%と他に比べて特に多くなっていた。「39歳以下」の若年者では、症例数が少ないが椎骨脳底動脈系の病変の比率が多かった。また、「40～64歳」の壮年者でも「65歳以上」に比べると椎骨脳底動脈系の比率が多かった。



【年代3区分×血管系】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
内頸動脈	1	7	36	44
前交通動脈	0	2	5	7
前大脳動脈	0	4	15	19
中大脳動脈	2	30	164	196
椎骨脳底動脈	2	10	39	51
(人数)	5	48	253	306

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
内頸動脈	20.0%	14.6%	14.2%	14.4%
前交通動脈	0.0%	4.2%	2.0%	2.3%
前大脳動脈	0.0%	8.3%	5.9%	6.2%
中大脳動脈	40.0%	62.5%	64.8%	64.1%
椎骨脳底動脈	40.0%	20.8%	15.4%	16.7%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による血管系の個別について、 χ^2 検定を行ったところ、いずれも有意性は得られなかった。

【年代2区分×血管系（内頸動脈）】

64歳以下 65歳以上 合計				値 自由度 漸近有意確率 (両側)								
なし	度数	118	481	599	Pearson χ^2 乗値	0.060	1	0.807				
	期待度数	117.4	481.6	599.0					尤度比	0.061	1	0.805
	調整済み残差	0.2	-0.2									
あり	度数	8	36	44	線型と線型による連関	0.060	1	0.807				
	期待度数	8.6	35.4	44.0					有効なケースの数	643		
	調整済み残差	-0.2	0.2									
合計	度数	126	517	643								
	期待度数	126.0	517.0	643.0								

【年代 2 区分×血管系（前交通動脈）】

		64歳以下	65歳以上	合計				
なし	度数	124	509	633	値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
	期待度数	124.6	508.4	633.0	Pearson χ^2 乗値	0.353	1	0.552
	調整済み残差	-0.6	0.6		尤度比	0.321	1	0.571
あり	度数	2	5	7	線型と線型による連関	0.353	1	0.553
	期待度数	1.4	5.6	7.0	有効なケースの数	640		
	調整済み残差	0.6	-0.6					
合計	度数	126	514	640				
	期待度数	126.0	514.0	640.0				

【年代 2 区分×血管系（前大脳動脈）】

		64歳以下	65歳以上	合計				
なし	度数	122	500	622	値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
	期待度数	122.3	499.7	622.0	Pearson χ^2 乗値	0.024	1	0.876
	調整済み残差	-0.2	0.2		尤度比	0.024	1	0.878
あり	度数	4	15	19	線型と線型による連関	0.024	1	0.877
	期待度数	3.7	15.3	19.0	有効なケースの数	641		
	調整済み残差	0.2	-0.2					
合計	度数	126	515	641				
	期待度数	126.0	515.0	641.0				

【年代 2 区分×血管系（中大脳動脈）】

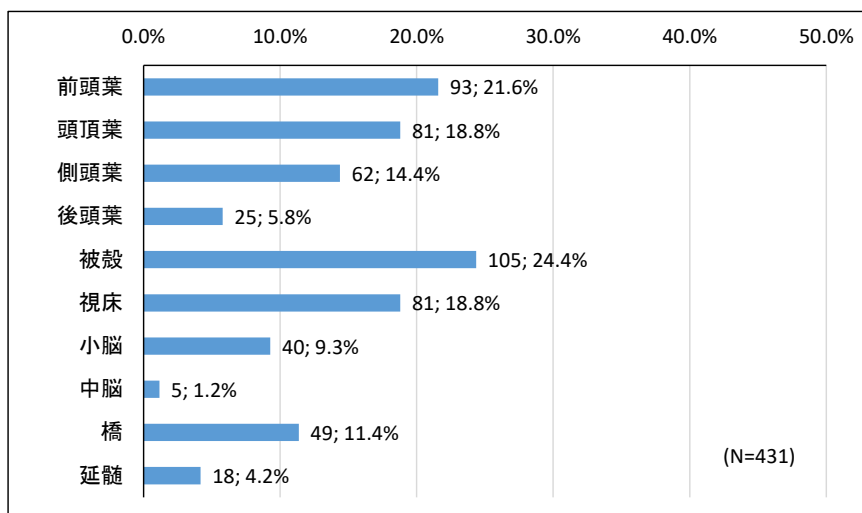
		64歳以下	65歳以上	合計				
なし	度数	95	351	446	値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
	期待度数	88.2	357.8	446.0	Pearson χ^2 乗値	2.123	1	0.145
	調整済み残差	1.5	-1.5		尤度比	2.182	1	0.140
あり	度数	32	164	196	線型と線型による連関	2.120	1	0.145
	期待度数	38.8	157.2	196.0	有効なケースの数	642		
	調整済み残差	-1.5	1.5					
合計	度数	127	515	642				
	期待度数	127.0	515.0	642.0				

【年代 2 区分×血管系（椎骨脳底動脈）】

		64歳以下	65歳以上	合計				
なし	度数	114	475	589	値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
	期待度数	116.0	473.0	589.0	Pearson χ^2 乗値	0.517	1	0.472
	調整済み残差	-0.7	0.7		尤度比	0.496	1	0.481
あり	度数	12	39	51	線型と線型による連関	0.517	1	0.472
	期待度数	10.0	41.0	51.0	有効なケースの数	640		
	調整済み残差	0.7	-0.7					
合計	度数	126	514	640				
	期待度数	126.0	514.0	640.0				

(4) 大脳部位（前頭葉、頭頂葉、側頭葉、後頭葉、被殻、視床、小脳、中脳、橋、延髄）

- 大脳部位のいずれかに「あり」と回答があったのは431件で、この中では、被殻が24.4%で最も多く、次いで、前頭葉（21.6%）、頭頂葉、視床（各18.8%）、中脳・橋・延髄の脳幹（16.8%）などとなっていた。
- また、年齢区分でみると、「40～64歳」では被殻（46.2%）、視床（23.1%）が多く、「65歳以上」では、前頭葉（24.3%）、頭頂葉（20.8%）、被殻（19.1%）が多かった。



【年代3区分×大脳部位】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
前頭葉	2	7	84	93
頭頂葉	1	8	72	81
側頭葉	0	4	58	62
後頭葉	1	1	23	25
被殻	3	36	66	105
視床	1	18	62	81
小脳	1	7	32	40
中脳	0	2	3	5
橋	0	2	47	49
延髄	1	6	11	18
(人数)	7	78	346	431

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
前頭葉	28.6%	9.0%	24.3%	21.6%
頭頂葉	14.3%	10.3%	20.8%	18.8%
側頭葉	0.0%	5.1%	16.8%	14.4%
後頭葉	14.3%	1.3%	6.6%	5.8%
被殻	42.9%	46.2%	19.1%	24.4%
視床	14.3%	23.1%	17.9%	18.8%
小脳	14.3%	9.0%	9.2%	9.3%
中脳	0.0%	2.6%	0.9%	1.2%
橋	0.0%	2.6%	13.6%	11.4%
延髄	14.3%	7.7%	3.2%	4.2%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による大脳部位の前頭葉について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意であった（ $\chi^2=6.824$, $df=1$, $p<0.01$ ）。この結果から、65歳以上で有意に多かった。
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による大脳部位の頭頂葉について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率5%で有意であった（ $\chi^2=4.261$, $df=1$, $p<0.05$ ）。この結果から、65歳以上で有意に多かった。
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による大脳部位の側頭葉について、 χ^2 検定を行ったところ

有意確率1%で有意であった ($\chi^2=7.579$, $df=1$, $p<0.01$)。この結果から、65歳以上で有意に多かった。

- 年代2区分 (64歳以下、65歳以上) による大脳部位の被殻について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意であった ($\chi^2=24.053$, $df=1$, $p<0.01$)。この結果から、64歳以下で有意に多かった。
- 年代2区分 (64歳以下、65歳以上) による大脳部位の橋について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意であった ($\chi^2=8.150$, $df=1$, $p<0.01$)。この結果から、65歳以上で有意に多かった。
- 年代2区分 (64歳以下、65歳以上) による大脳部位の延髄について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率5%で有意であった ($\chi^2=4.319$, $df=1$, $p<0.05$)。この結果から、64歳以下で有意に多かった。
- 年代2区分 (64歳以下、65歳以上) では、前頭葉、頭頂葉、側頭葉、橋で65歳以上が有意に多く、被核、延髄で64歳以下が有意に多かった。
- これら以外では、年代2区分 (64歳以下、65歳以上) による大脳部位の後頭葉、視床、小脳、中脳について、 χ^2 検定を行ったところ有意性は得られなかった。

【年代2区分×大脳部位 (前頭葉)】

	64歳以下	65歳以上	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	117	432	549			
	期待度数	107.7	441.3	549.0	Pearson χ^2 乗値	6.824	1
	調整済み残差	2.6	-2.6		尤度比	7.846	1
あり	度数	9	84	93	線型と線型による連関	6.813	1
	期待度数	18.3	74.7	93.0	有効なケースの数	642	
	調整済み残差	-2.6	2.6				
合計	度数	126	516	642			
	期待度数	126.0	516.0	642.0			

【年代2区分×大脳部位 (頭頂葉)】

	64歳以下	65歳以上	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	117	444	561			
	期待度数	110.1	450.9	561.0	Pearson χ^2 乗値	4.261	1
	調整済み残差	2.1	-2.1		尤度比	4.789	1
あり	度数	9	72	81	線型と線型による連関	4.254	1
	期待度数	15.9	65.1	81.0	有効なケースの数	642	
	調整済み残差	-2.1	2.1				
合計	度数	126	516	642			
	期待度数	126.0	516.0	642.0			

【年代2区分×大脳部位 (側頭葉)】

	64歳以下	65歳以上	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	122	457	579			
	期待度数	113.8	465.2	579.0	Pearson χ^2 乗値	7.579	1
	調整済み残差	2.8	-2.8		尤度比	9.459	1
あり	度数	4	58	62	線型と線型による連関	7.567	1
	期待度数	12.2	49.8	62.0	有効なケースの数	641	
	調整済み残差	-2.8	2.8				
合計	度数	126	515	641			
	期待度数	126.0	515.0	641.0			

【年代2区分×大脳部位（後頭葉）】

		64歳以下	65歳以上	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	124	491	615				
	期待度数	121.1	493.9	615.0	Pearson χ^2 乗値	2.248	1	0.134
	調整済み残差	1.5	-1.5		尤度比	2.735	1	0.098
	度数	2	23	25	線型と線型による連関	2.244	1	0.134
あり	期待度数	4.9	20.1	25.0	有効なケースの数	640		
	調整済み残差	-1.5	1.5					
	合計	度数	126	514	640			
	期待度数	126.0	514.0	640.0				

【年代2区分×大脳部位（被殻）】

		64歳以下	65歳以上	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	88	451	539				
	期待度数	106.3	432.7	539.0	Pearson χ^2 乗値	24.053	1	<0.001
	調整済み残差	-4.9	4.9		尤度比	21.198	1	<0.001
	度数	39	66	105	線型と線型による連関	24.016	1	<0.001
あり	期待度数	20.7	84.3	105.0	有効なケースの数	644		
	調整済み残差	4.9	-4.9					
	合計	127	517	644				
合計	期待度数	127.0	517.0	644.0				

【年代2区分×大脳部位（視床）】

		64歳以下	65歳以上	合計				
		度数	108	453	561	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	期待度数	111.0	450.0	561.0	Pearson χ^2 乗値	0.789	1	0.374
	調整済み残差	-0.9	0.9		尤度比	0.760	1	0.383
	度数	19	62	81	線型と線型による連関	0.788	1	0.375
あり	期待度数	16.0	65.0	81.0	有効なケースの数	642		
	調整済み残差	0.9	-0.9					
	度数	127	515	642				
合計	期待度数	127.0	515.0	642.0				

【年代2区分×大脳部位（小脳）】

		64歳以下	65歳以上	合計				
	度数	118	482	600		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	期待度数	118.1	481.9	600.0	Pearson χ^2 乗値	0.003	1	0.959
	調整済み残差	-0.1	0.1		尤度比	0.003	1	0.959
	度数	8	32	40	線型と線型による連関	0.003	1	0.959
あり	期待度数	7.9	32.1	40.0	有効なケースの数	640		
	調整済み残差	0.1	-0.1					
	度数	126	514	640				
合計	期待度数	126.0	514.0	640.0				

【年代2区分×大脳部位（中脳）】

		64歳以下	65歳以上	合計				
		度数	125	511	636	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	期待度数	126.0	510.0	636.0	Pearson χ^2 乗値	1.293	1	0.256
	調整済み残差	-1.1	1.1		尤度比	1.080	1	0.299
	度数	2	3	5	線型と線型による連関	1.291	1	0.256
あり	期待度数	1.0	4.0	5.0	有効なケースの数	641		
	調整済み残差	1.1	-1.1					
	度数	127	514	641				
合計	期待度数	127.0	514.0	641.0				

【年代 2 区分×大脳部位（橋）】

64歳以下 65歳以上 合計				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	124	468	592		
	期待度数	116.4	475.6	592.0	Pearson χ^2 乗値	8.150 1 0.004
	調整済み残差	2.9	-2.9		尤度比	10.981 1 0.001
あり	度数	2	47	49	線型と線型による連関	8.137 1 0.004
	期待度数	9.6	39.4	49.0	有効なケースの数	641
	調整済み残差	-2.9	2.9			
合計	度数	126	515	641		
	期待度数	126.0	515.0	641.0		

【年代 2 区分×大脳部位（延髄）】

64歳以下 65歳以上 合計				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	119	503	622		
	期待度数	122.5	499.5	622.0	Pearson χ^2 乗値	4.319 1 0.038
	調整済み残差	-2.1	2.1		尤度比	3.641 1 0.056
あり	度数	7	11	18	線型と線型による連関	4.312 1 0.038
	期待度数	3.5	14.5	18.0	有効なケースの数	640
	調整済み残差	2.1	-2.1			
合計	度数	126	514	640		
	期待度数	126.0	514.0	640.0		

2-3 急性期情報（リハビリ）

- (1) 急性期 FIM（入院時、退院時の運動項目、認知項目、合計の値）
 (2) 急性期 FIM（改善度）

(1) 急性期FIM（入院時、退院時の運動項目、認知項目、合計の値）

- 急性期FIM（Functional Independence Measure）の運動項目、認知項目、これらの合計の入院時と退院時の平均値に差がみられるかについて t 検定（対応のあるデータ）を実施した結果、全年齢、40歳～64歳、65歳以上で、運動項目、認知項目、合計で 1 %水準の有意差がみられ（ $p < 0.01$ ）、入院時より退院時の平均値が有意に大きかった。
- 一方、39歳以下では、5 %水準でも有意差がみられないため、入院時と退院時の平均値に差があるとは言えなかったが、サンプル数が少ない点も要因と考えられた。

【急性期FIM 年齢区分：全体】

全体	FIM	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
運動項目	入院時	25.44	456	18.195	22.593	455	<0.001
	退院時	48.02	456	26.556			
認知項目	入院時	18.01	456	10.874	13.726	455	<0.001
	退院時	22.30	456	10.467			
合計	入院時	43.45	456	25.934	23.360	455	<0.001
	退院時	70.32	456	34.607			

【急性期FIM 年齢区分：39歳以下】

全体	FIM	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
運動項目	入院時	44.67	6	35.444	2.519	5	0.053
	退院時	56.17	6	33.594			
認知項目	入院時	17.00	6	13.282	1.734	5	0.143
	退院時	21.67	6	10.386			
合計	入院時	61.67	6	48.685	2.476	5	0.056
	退院時	77.83	6	43.023			

【急性期FIM 年齢区分：40歳～64歳】

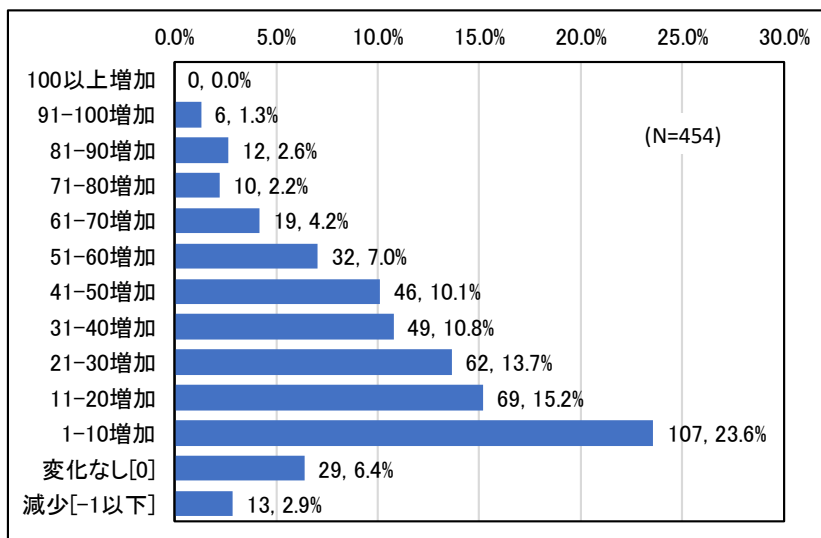
全体	FIM	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
運動項目	入院時	25.92	77	19.400	11.330	76	<0.001
	退院時	55.52	77	27.290			
認知項目	入院時	19.22	77	11.635	7.854	76	<0.001
	退院時	25.13	77	10.114			
合計	入院時	45.14	77	27.589	11.763	76	<0.001
	退院時	80.65	77	34.839			

【急性期FIM 年齢区分：65歳以上】

全体	FIM	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
運動項目	入院時	25.03	373	17.463	19.749	372	<0.001
	退院時	46.35	373	26.072			
認知項目	入院時	17.78	373	10.688	11.456	372	<0.001
	退院時	21.73	373	10.471			
合計	入院時	42.81	373	25.079	20.411	372	<0.001
	退院時	68.07	373	34.116			

(2) 急性期FIMの改善度

- 急性期FIMの運動項目、認知項目の合計の改善度は、増加の割合が90.7%とほとんどが改善していた。改善度を10区分でみると、「1～10増加」群が、23.6%と最も多く、次いで、「11～20増加」が15.2%であった。変化なしは6.4%、改善していないが2.9%であった。

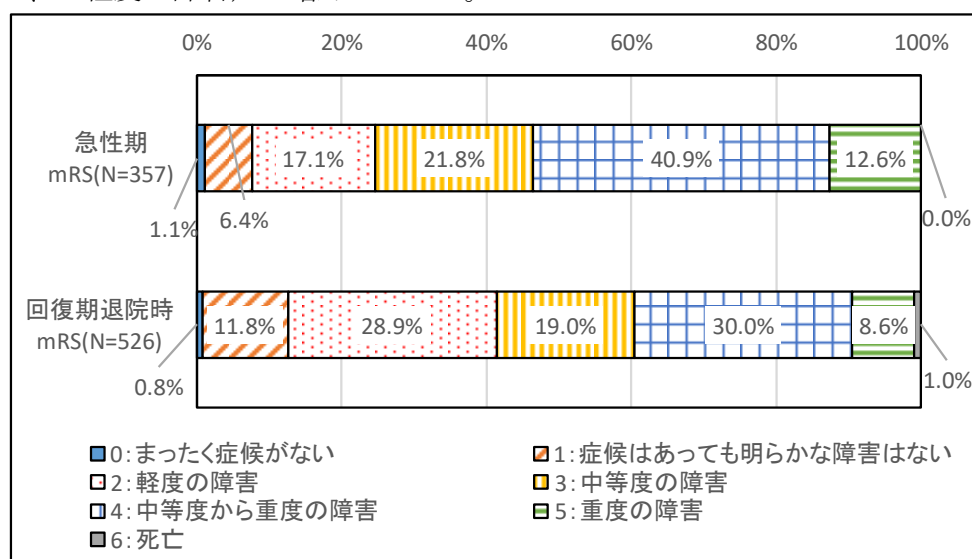


2-4 回復期情報（医師）

- (1) 急性期 mRS、回復期退院時 mRS の比較
- (2) mRS 改善度
- (3) 経過中合併症（肺炎、痙攣発作、DVT、消化管出血、尿路感染、その他）
- (4) リスク因子（骨粗鬆症、肝機能障害、呼吸器疾患、骨折の既往、神経筋疾患、腎不全、認知症、心房細動、糖尿病、脳卒中既往、心不全、悪性腫瘍）

(1) 急性期mRS、回復期退院時mRSの比較

- mRS (modified Rankin Scale) は、0：全く症候がない、1：症候があっても明らかな障害はない（日常の勤めや活動は行える）、2：軽度の障害（発症以前の活動がすべて行えるわけではないが、自分の身の回りのことは介助なしに行える）、3：中等度の障害（何らかの介助を必要とするが、歩行は介助なしに行える）、4：中等度から重度の障害（歩行や身体的要求には介助が必要である）、5：重度の障害（寝たきり、失禁状態、常に介助と見守りを必要とする）、6：死亡と分類されている。
- mRS (modified Rankin Scale) では、回復期退院時には、重い障害（3:中等度の障害、4:中等度から重度の障害、5:重度の障害）の割合は減少し、軽い障害（1:症候はあっても明らかな障害はない、2:軽度の障害）が増加していた。



- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による急性期mRSについて、 χ^2 検定を行ったところ有意性は得られなかった。

【年代2区分×急性期mRS】

		64歳以下	65歳以上	合計				
0:まったく症候がない	度数	0	4	4	値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
	期待度数	0.6	3.4	4.0	Pearson χ^2 乗値	1.069	5	0.957
	調整済み残差	-0.9	0.9		尤度比	1.705	5	0.888
1:症候はあっても明らかな障害はない	度数	3	20	23	線型と線型による連関	0.441	1	0.507
	期待度数	3.7	19.3	23.0	有効なケースの数	357		
	調整済み残差	-0.4	0.4					
2:軽度の障害	度数	10	51	61				
	期待度数	9.7	51.3	61.0				
	調整済み残差	0.1	-0.1					
3:中等度の障害	度数	12	66	78				
	期待度数	12.5	65.5	78.0				
	調整済み残差	-0.2	0.2					
4:中等度から重度の障害	度数	24	122	146				
	期待度数	23.3	122.7	146.0				
	調整済み残差	0.2	-0.2					
5:重度の障害	度数	8	37	45				
	期待度数	7.2	37.8	45.0				
	調整済み残差	0.4	-0.4					
合計	度数	57	300	357				
	期待度数	57.0	300.0	357.0				

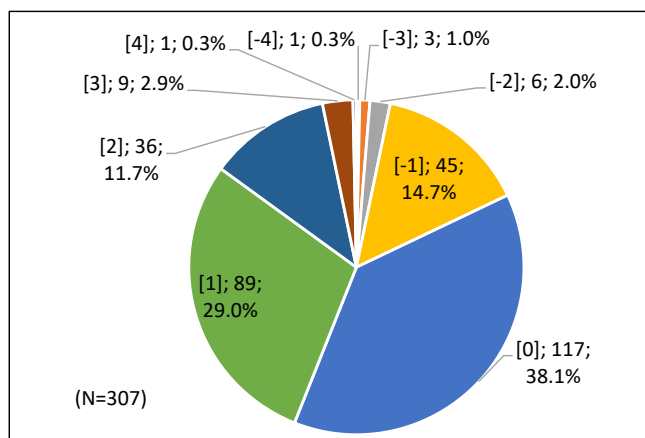
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による回復期退院時mRSについて、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意であった（ $\chi^2=19.536$, df=6, p<0.01）。この結果から、年代2区分に差がないとは言えない。また、結果によると回復期退院時mRSでは、「2:軽度の障害」は「64歳以下」で有意に多く、「5:重度の障害」は「65歳以上」で有意に多かった。

【年代2区分×回復期退院時mRS】

		64歳以下	65歳以上	合計				
0:まったく症候がない	度数	1	3	4	値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
	期待度数	0.8	3.2	4.0	Pearson χ^2 乗値	19.536	6	0.003
	調整済み残差	0.3	-0.3		尤度比	21.252	6	0.002
1:症候はあっても明らかな障害はない	度数	16	46	62	線型と線型による連関	15.368	1	0.0001
	期待度数	11.9	50.1	62.0	有効なケースの数	526		
	調整済み残差	1.4	-1.4					
2:軽度の障害	度数	40	112	152				
	期待度数	29.2	122.8	152.0				
	調整済み残差	2.6	-2.6					
3:中等度の障害	度数	23	77	100				
	期待度数	19.2	80.8	100.0				
	調整済み残差	1.1	-1.1					
4:中等度から重度の障害	度数	17	141	158				
	期待度数	30.3	127.7	158.0				
	調整済み残差	-3.2	3.2					
5:重度の障害	度数	3	42	45				
	期待度数	8.6	36.4	45.0				
	調整済み残差	-2.2	2.2					
6:死亡	度数	1	4	5				
	期待度数	1.0	4.0	5.0				
	調整済み残差	0.0	0.0					
合計	度数	101	425	526				
	期待度数	101.0	425.0	526.0				

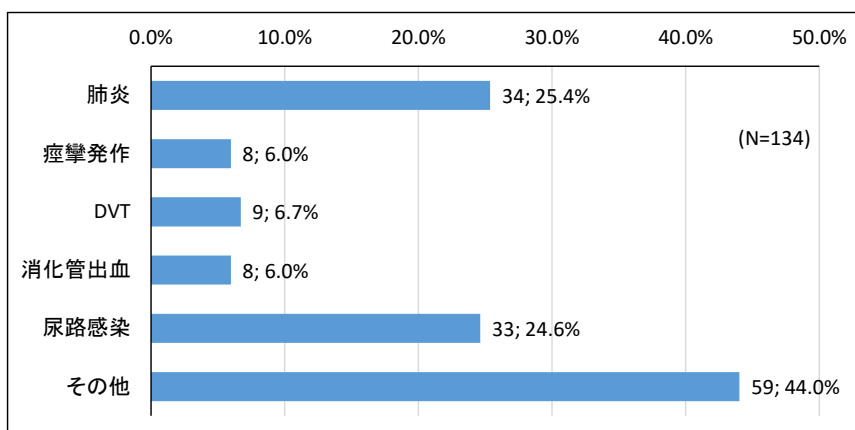
(2) 急性期から回復期退院時のmRSの改善度

- 急性期から回復期退院時のmRSの改善度は、改善（値が[1]～[4]改善）した割合は、44.0%、変化なしが38.1%、低下（値が、[-1]～[-4]の低下）した割合が18.0%であった。



(3) 経過中合併症（肺炎、痙攣発作、DVT、消化管出血、尿路感染、その他）

- 経過中の合併症では、全体の725名のうち134名（18.5%）に認め、「39歳以下」にはみられなかったが、「40～64歳」では126名のうち18名（14.3%）、「65歳以上」では587名のうち116名（19.8%）に認めた。
- 経過中合併症の134名の内訳では、肺炎34名、尿路感染33名、DVT9名、痙攣発作8名、消化管出血8名で、その他が59名となっていた。年齢区分では、「40～64歳」では尿路感染（11.1%）が最も多く、「65歳以上」では、肺炎（28.4%）、尿路感染（26.7%）が多かった。



【年代3区分×経過中合併症】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
肺炎	0	1	33	34
痙攣発作	0	1	7	8
DVT	0	1	8	9
消化管出血	0	0	8	8
尿路感染	0	2	31	33
その他	0	13	46	59
(人数)	0	18	116	134

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
肺炎	-	5.6%	28.4%	25.4%
痙攣発作	-	5.6%	6.0%	6.0%
DVT	-	5.6%	6.9%	6.7%
消化管出血	-	0.0%	6.9%	6.0%
尿路感染	-	11.1%	26.7%	24.6%
その他	-	72.2%	39.7%	44.0%

- 経過中合併症の「肺炎」では、有意確率5%で有意 ($\chi^2=6.224$, $df=1$, $p<0.05$) であった。この結果から、「65歳以上」では「肺炎」を合併症として発症する傾向を有意に認めた。
- 経過中合併症の「尿路感染」では、有意確率5%で有意 ($\chi^2=3.963$, $df=1$, $p<0.05$) であった。この結果から、「65歳以上」では「尿路感染」を合併症として発症する傾向を有意に認めた。
- これら以外では、年代による有意差はみられなかった。

【経過中合併症の症状別にみた年代との関係】

経過中合併症 肺炎

	64歳以下	65歳以上	合計
なし	度数 124	486	610
	期待度数 118.4	491.6	610.0
	調整済み残差 2.5	-2.5	
あり	度数 1	33	34
	期待度数 6.6	27.4	34.0
	調整済み残差 -2.5	2.5	
合計	度数 125	519	644
	期待度数 125.0	519.0	644.0

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson χ^2 乗値	6.224	1	0.013
尤度比	8.823	1	0.003
線型と線型による連関	6.214	1	0.013
有効なケースの数	644		

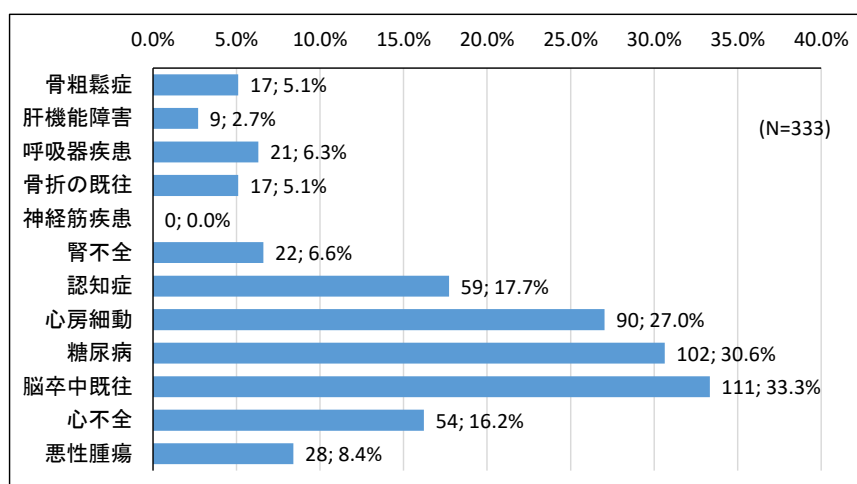
経過中合併症 尿路感染

	64歳以下	65歳以上	合計
なし	度数 123	488	611
	期待度数 118.6	492.4	611.0
	調整済み残差 2.0	-2.0	
あり	度数 2	31	33
	期待度数 6.4	26.6	33.0
	調整済み残差 -2.0	2.0	
合計	度数 125	519	644
	期待度数 125.0	519.0	644.0

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson χ^2 乗値	3.963	1	0.047
尤度比	5.048	1	0.025
線型と線型による連関	3.956	1	0.047
有効なケースの数	644		

(4) リスク因子（骨粗鬆症、肝機能障害、呼吸器疾患、骨折の既往、神経筋疾患、腎不全、認知症、心房細動、糖尿病、脳卒中既往、心不全、悪性腫瘍）

- 全体の725名のうち、333名（45.9%）に何らかのリスク因子をもっていたが、全体に対して脳卒中既往が111名（15.3%）と最も多く、次いで糖尿病102名（14.1%）、心房細動90名（12.4%）、認知症59名（8.1%）などであった。
- そして、「39歳以下」では症例数が少ないが腎不全1名、糖尿病1名で、「40～64歳」では糖尿病15名、脳卒中既往10名、心房細動6名などで、「65歳以上」では脳卒中既往101名、糖尿病86名、心房細動84名などとなっていた。
- また、注目すべき一つに、悪性腫瘍が28名で全体の725名の3.9%にみられ、「40～64歳」では126名のうち5名（4.0%）、「65歳以上」では587名のうち23名（3.9%）にみられていた。



【年代3区分×リスク因子】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
骨粗鬆症	0	1	16	17	骨粗鬆症	0.0%	2.9%	5.4%	5.1%
肝機能障害	0	2	7	9	肝機能障害	0.0%	5.9%	2.4%	2.7%
呼吸器疾患	0	1	20	21	呼吸器疾患	0.0%	2.9%	6.7%	6.3%
骨折の既往	0	0	17	17	骨折の既往	0.0%	0.0%	5.7%	5.1%
腎不全	1	1	20	22	腎不全	50.0%	2.9%	6.7%	6.6%
認知症	0	1	58	59	認知症	0.0%	2.9%	19.5%	17.7%
心房細動	0	6	84	90	心房細動	0.0%	17.6%	28.3%	27.0%
糖尿病	1	15	86	102	糖尿病	50.0%	44.1%	29.0%	30.6%
脳卒中既往	0	10	101	111	脳卒中既往	0.0%	29.4%	34.0%	33.3%
心不全	0	3	51	54	心不全	0.0%	8.8%	17.2%	16.2%
悪性腫瘍	0	5	23	28	悪性腫瘍	0.0%	14.7%	7.7%	8.4%
(人数)	2	34	297	333					

- リスク因子の「骨折の既往」では、有意確率5%で有意 ($\chi^2=4.205$, $df=1$, $p<0.05$) であった。この結果から「65歳以上」では「骨折の既往」を持っている傾向が読み取れる。
- リスク因子の「認知症」では、有意確率1%で有意 ($\chi^2=13.131$, $df=1$, $p<0.01$) であった。この結果から「65歳以上」では「認知症」を持っている傾向が読み取れる。
- リスク因子の「心房細動」では、有意確率1%で有意 ($\chi^2=10.962$, $df=1$, $p<0.01$) であった。この結果から「65歳以上」では「心房細動」を持っている傾向が読み取れる。
- リスク因子の「脳卒中既往」では、有意確率1%で有意 ($\chi^2=9.424$, $df=1$, $p<0.01$) であった。この結果から「65歳以上」では「脳卒中既往」を持っている傾向が読み取れる。
- これら以外では、年代による有意差はみられなかった。

【リスク因子の症状別にみた年代との関係】

リスク因子 骨折の既往

64歳以下 65歳以上 合計				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	123	494			
	期待度数	119.7	497.3	Pearson χ^2 乗値	4.205	1
	調整済み残差	2.1	-2.1	尤度比	7.445	1
あり	度数	0	17	線型と線型による連関	4.198	1
	期待度数	3.3	13.7	有効なケースの数	634	0.040
	調整済み残差	-2.1	2.1			
合計	度数	123	511			
	期待度数	123.0	511.0			

リスク因子 認知症

64歳以下 65歳以上 合計				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	123	454			
	期待度数	112.5	464.5	Pearson χ^2 乗値	13.131	1
	調整済み残差	3.6	-3.6	尤度比	19.480	1
あり	度数	1	58	線型と線型による連関	13.110	1
	期待度数	11.5	47.5	有効なケースの数	636	<0.001
	調整済み残差	-3.6	3.6			<0.001
合計	度数	124	512			
	期待度数	124.0	512.0			

リスク因子 心房細動

64歳以下 65歳以上 合計				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	117	425			
	期待度数	105.5	436.5	Pearson χ^2 乗値	10.962	1
	調整済み残差	3.3	-3.3	尤度比	13.436	1
あり	度数	6	84	線型と線型による連関	10.944	1
	期待度数	17.5	72.5	有効なケースの数	632	0.001
	調整済み残差	-3.3	3.3			0.000
合計	度数	123	509			0.001
	期待度数	123.0	509.0			

リスク因子 脳卒中既往

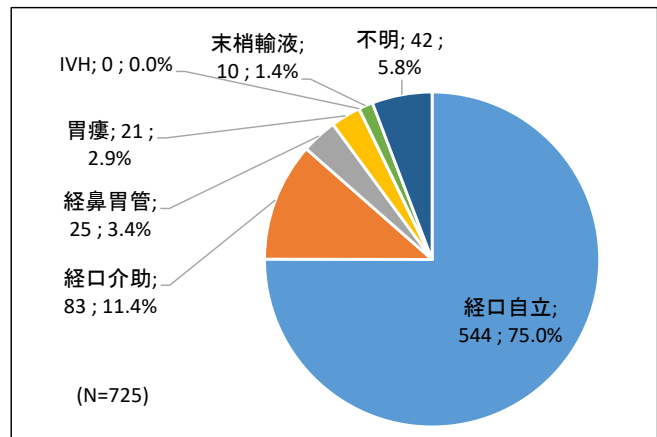
64歳以下 65歳以上 合計				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	114	411			
	期待度数	102.4	422.6	Pearson χ^2 乗値	9.424	1
	調整済み残差	3.1	-3.1	尤度比	10.897	1
あり	度数	10	101	線型と線型による連関	9.409	1
	期待度数	21.6	89.4	有効なケースの数	636	0.002
	調整済み残差	-3.1	3.1			0.001
合計	度数	124	512			0.002
	期待度数	124.0	512.0			

2-5 回復期情報（看護師）

- (1) 栄養管理
- (2) 排便
- (3) 排尿
- (4) 清潔
- (5) 行動障害
- (6) 行動障害内容（行動障害「あり」の場合：幻覚幻聴、不穏、昼夜逆転、暴力、徘徊、不潔行為、興奮、妄想、介護への抵抗、不眠、転倒転落、精神症状）
- (7) 看護必要度（入院時、退院時、改善度）
- (8) 日常生活自立度（障害老人、認知症老人）

(1) 栄養管理

- 経口自立が75.0%を占めていた。次いで多いのは、経口介助（11.4%）であった。
- また、胃瘻（2.9%）と経鼻胃管（3.4%）がみられていた。
- 経口自立について、「40～64歳」では84.9%であったが、「65歳以上」では72.4%と少なかった。



【年代3区分×栄養管理】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
経口自立	12	107	425	544	経口自立	100.0%	84.9%	72.4%	75.0%
経口介助	0	6	77	83	経口介助	0.0%	4.8%	13.1%	11.4%
経鼻胃管	0	2	23	25	経鼻胃管	0.0%	1.6%	3.9%	3.4%
胃瘻	0	4	17	21	胃瘻	0.0%	3.2%	2.9%	2.9%
末梢輸液	0	0	10	10	末梢輸液	0.0%	0.0%	1.7%	1.4%
不明	0	7	35	42	不明	0.0%	5.6%	6.0%	5.8%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

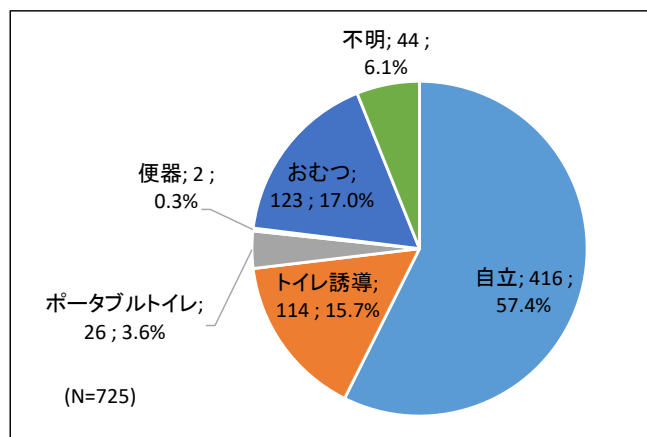
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「栄養管理」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率5%で有意（ $\chi^2=14.833$, $df=5$, $p<0.05$ ）であった。この結果から、「経口自立」は「64歳以下」で、「経口介助」は「65歳以上」で有意に多かった。

【栄養管理と年代との関係】

栄養管理								
	64歳以下	65歳以上	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
経口自立	119	425	544	Pearson χ^2 乗値	14.833	5	0.011	
期待度数	103.5	440.5	544.0	尤度比	18.882	5	0.002	
調整済み残差	3.4	-3.4		線型と線型による連関	0.257	1	0.613	
経口介助	6	77	83	有効なケースの数	725			
期待度数	15.8	67.2	83.0					
調整済み残差	-2.9	2.9						
経鼻胃管	2	23	25					
期待度数	4.8	20.2	25.0					
調整済み残差	-1.4	1.4						
胃瘻	4	17	21					
期待度数	4.0	17.0	21.0					
調整済み残差	0.0	0.0						
末梢輸液	0	10	10					
期待度数	1.9	8.1	10.0					
調整済み残差	-1.5	1.5						
不明	7	35	42					
期待度数	8.0	34.0	42.0					
調整済み残差	-0.4	0.4						
合計	138	587	725					
期待度数	138.0	587.0	725.0					

(2) 排便

- 自立が57.4%で半数以上を占めていた。次いで、おむつ（17.0%）、トイレ誘導（15.7%）であった。
- 排便の自立については、「40～64歳」では73.8%であったが、「65歳以上」では53.5%と少なかった。



【年代3区分×排便】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
自立	9	93	314	416	自立	75.0%	73.8%	53.5%	57.4%
トイレ誘導	3	12	99	114	トイレ誘導	25.0%	9.5%	16.9%	15.7%
ポータブルトイレ	0	2	24	26	ポータブルトイレ	0.0%	1.6%	4.1%	3.6%
便器	0	0	2	2	便器	0.0%	0.0%	0.3%	0.3%
おむつ	0	12	111	123	おむつ	0.0%	9.5%	18.9%	17.0%
不明	0	7	37	44	不明	0.0%	5.6%	6.3%	6.1%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

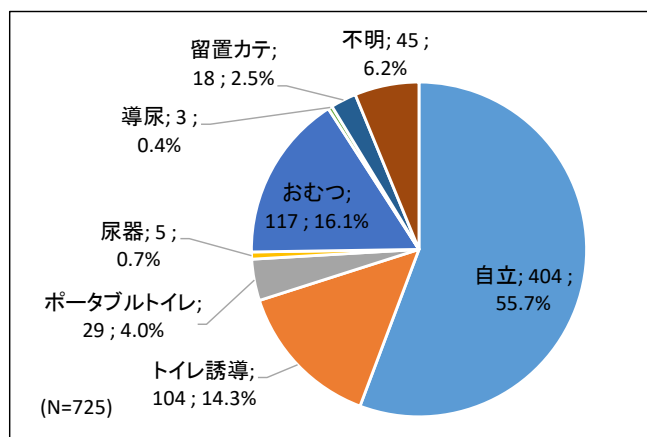
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「排便」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=20.465$, $df=5$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「自立」は「64歳以下」で、「おむつ」は「65歳以上」で有意に多かった。

排便				
	64歳以下	65歳以上	合計	
自立	度数	102	314	416
	期待度数	79.2	336.8	416.0
	調整済み残差	4.4	-4.4	
トイレ誘導	度数	15	99	114
	期待度数	21.7	92.3	114.0
	調整済み残差	-1.7	1.7	
ポータブルトイレ	度数	2	24	26
	期待度数	4.9	21.1	26.0
	調整済み残差	-1.5	1.5	
便器	度数	0	2	2
	期待度数	0.4	1.6	2.0
	調整済み残差	-0.7	0.7	
おむつ	度数	12	111	123
	期待度数	23.4	99.6	123.0
	調整済み残差	-2.9	2.9	
不明	度数	7	37	44
	期待度数	8.4	35.6	44.0
	調整済み残差	-0.5	0.5	
合計	度数	138	587	725
	期待度数	138.0	587.0	725.0

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson χ^2 乗値	20.465	5	0.001
尤度比	22.249	5	0.000
線型と線型による連関	0.625	1	0.429
有効なケースの数	725		

(3) 排尿

- 自立が55.7%で半数以上を占めていた。
次いで、おむつ（16.1%）、トイレ誘導（14.3%）であった。
- 自立について、「40～64歳」では71.4%で、「65歳以上」では52.0%と少なかった。



【年代3区分×排尿】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
自立	9	90	305	404	自立	75.0%	71.4%	52.0%	55.7%
トイレ誘導	3	14	87	104	トイレ誘導	25.0%	11.1%	14.8%	14.3%
ポータブルトイレ	0	2	27	29	ポータブルトイレ	0.0%	1.6%	4.6%	4.0%
尿器	0	1	4	5	尿器	0.0%	0.8%	0.7%	0.7%
おむつ	0	9	108	117	おむつ	0.0%	7.1%	18.4%	16.1%
導尿	0	1	2	3	導尿	0.0%	0.8%	0.3%	0.4%
留置カテ	0	1	17	18	留置カテ	0.0%	0.8%	2.9%	2.5%
不明	0	8	37	45	不明	0.0%	6.3%	6.3%	6.2%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「排尿」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=23.441$, $df=7$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「自立」は「64歳以下」で、「おむつ」は「65歳以上」で有意に多かった。

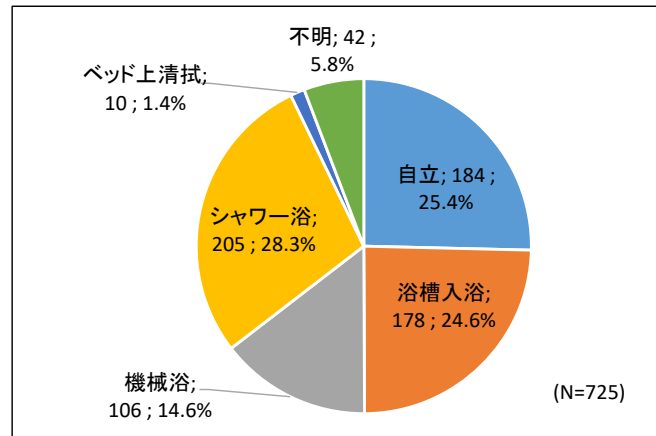
排尿

	64歳以下	65歳以上	合計
自立	99	305	404
期待度数	76.9	327.1	404.0
調整済み残差	4.2	-4.2	
トイレ誘導	17	87	104
期待度数	19.8	84.2	104.0
調整済み残差	-0.8	0.8	
ポータブルトイレ	2	27	29
期待度数	5.5	23.5	29.0
調整済み残差	-1.7	1.7	
尿器	1	4	5
期待度数	1.0	4.0	5.0
調整済み残差	0.1	-0.1	
おむつ	9	108	117
期待度数	22.3	94.7	117.0
調整済み残差	-3.4	3.4	
導尿	1	2	3
期待度数	0.6	2.4	3.0
調整済み残差	0.6	-0.6	
留置カテ	1	17	18
期待度数	3.4	14.6	18.0
調整済み残差	-1.5	1.5	
不明	8	37	45
期待度数	8.6	36.4	45.0
調整済み残差	-0.2	0.2	
合計	138	587	725
期待度数	138.0	587.0	725.0

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson χ^2 乗値	23.441	7	0.001
尤度比	26.511	7	0.000
線型と線型による連関	0.278	1	0.598
有効なケースの数	725		

(4) 清潔

- シャワー浴が28.3%で最も多く、次いで、自立（25.4%）、浴槽入浴（24.6%）、機械浴（14.6%）などとなっていた。
- 入浴自立について、「40～64歳」では39.7%で、「65歳以上」では22.1%と少なかった。



【年代3区分×清潔】

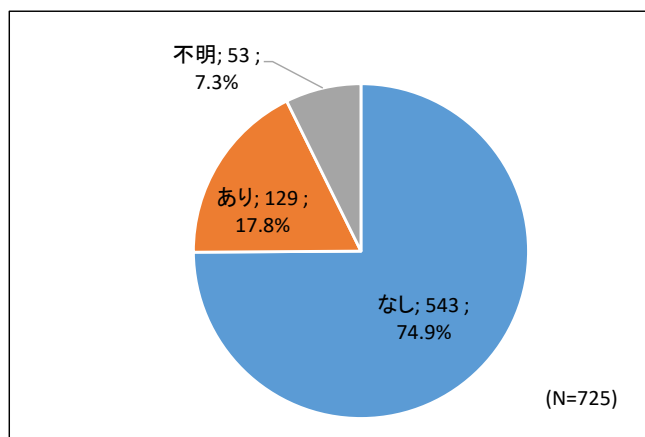
回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
自立	4	50	130	184	自立	33.3%	39.7%	22.1%	25.4%
浴槽入浴	4	32	142	178	浴槽入浴	33.3%	25.4%	24.2%	24.6%
機械浴	0	10	96	106	機械浴	0.0%	7.9%	16.4%	14.6%
シャワー浴	4	26	175	205	シャワー浴	33.3%	20.6%	29.8%	28.3%
ベッド上清拭	0	1	9	10	ベッド上清拭	0.0%	0.8%	1.5%	1.4%
不明	0	7	35	42	不明	0.0%	5.6%	6.0%	5.8%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「清潔」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=22.460$, $df=5$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「自立」は「64歳以下」で、「機械浴」は「65歳以上」で有意に多かった。

清潔								
		64歳以下	65歳以上	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
自立	度数	54	130	184				
	期待度数	35.0	149.0	184.0	Pearson χ^2 乗値	22.460	5	<0.001
	調整済み残差	4.1	-4.1		尤度比	22.495	5	<0.001
浴槽入浴	度数	36	142	178	線型と線型による連関	0.376	1	0.540
	期待度数	33.9	144.1	178.0	有効なケースの数	725		
	調整済み残差	0.5	-0.5					
機械浴	度数	10	96	106				
	期待度数	20.2	85.8	106.0				
	調整済み残差	-2.7	2.7					
シャワー 浴	度数	30	175	205				
	期待度数	39.0	166.0	205.0				
	調整済み残差	-1.9	1.9					
ベッド上 清拭	度数	1	9	10				
	期待度数	1.9	8.1	10.0				
	調整済み残差	-0.7	0.7					
不明	度数	7	35	42				
	期待度数	8.0	34.0	42.0				
	調整済み残差	-0.4	0.4					
合計	度数	138	587	725				
	期待度数	138.0	587.0	725.0				

(5) 行動障害

- 行動障害なしが74.9%を占めていた。行動障害ありは、17.8%であった。
- 行動障害ありについては、「40～64歳」では8.7%であったが、「65歳以上」では、20.1%に認めた。



【年代3区分×行動障害】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
なし	12	106	425	543	なし	100.0%	84.1%	72.4%	74.9%
あり	0	11	118	129	あり	0.0%	8.7%	20.1%	17.8%
不明	0	9	44	53	不明	0.0%	7.1%	7.5%	7.3%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「行動障害」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=11.716$, $df=1$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「行動障害あり」は「65歳以上」で有意、「行動障害なし」は「64歳以下」で有意に多かった。

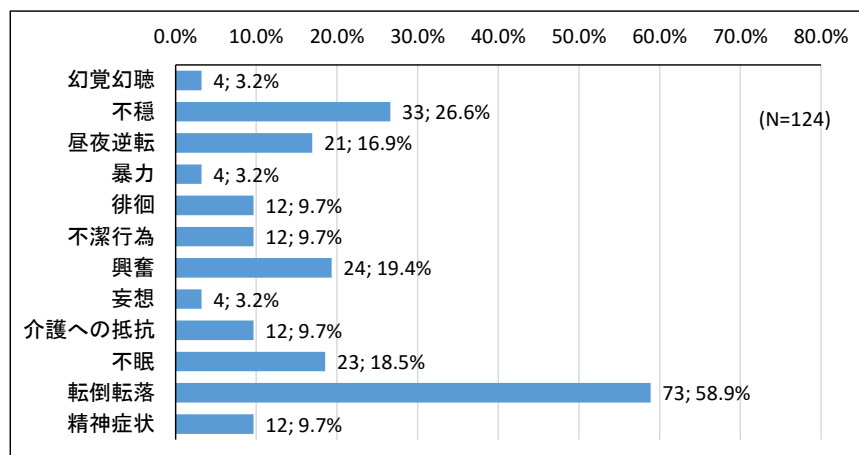
行動障害

	64歳以下	65歳以上	合計
なし	118	425	543
期待度数	104.2	438.8	543.0
調整済み残差	3.4	-3.4	
あり	11	118	129
期待度数	24.8	104.2	129.0
調整済み残差	-3.4	3.4	
合計	129	543	672
期待度数	129.0	543.0	672.0

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson χ^2 乗値	11.716	1	0.001
尤度比	13.595	1	0.000
線型と線型による連関	11.699	1	0.001
有効なケースの数	672		

(6) 行動障害内容（行動障害「あり」の場合：幻覚幻聴、不穏、昼夜逆転、暴力、徘徊、不潔行為、興奮、妄想、介護への抵抗、不眠、転倒転落、精神症状）

- 全体の725名の内、転倒転落が73名（10.1%）、不穏33名（4.6%）、興奮24名（3.3%）、不眠23名（3.2%）、昼夜逆転21名（2.9%）などとなっていた。そして、幻覚妄想4名、妄想4名、精神症状12名でみると、精神症状が2.8%にみられていた。
- また、行動障害を有する患者（N=124）の内では、転倒転落が特に多く58.9%あり、次いで、不穏（26.6%）、興奮（19.4%）、不眠（18.5%）などとなっていた。



【年代3区分×行動障害の内容】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
幻覚幻聴	0	0	4	4	幻覚幻聴	—	0.0%	3.5%	3.2%
不穏	0	2	31	33	不穏	—	18.2%	27.4%	26.6%
昼夜逆転	0	1	20	21	昼夜逆転	—	9.1%	17.7%	16.9%
暴力	0	0	4	4	暴力	—	0.0%	3.5%	3.2%
徘徊	0	0	12	12	徘徊	—	0.0%	10.6%	9.7%
不潔行為	0	1	11	12	不潔行為	—	9.1%	9.7%	9.7%
興奮	0	3	21	24	興奮	—	27.3%	18.6%	19.4%
妄想	0	0	4	4	妄想	—	0.0%	3.5%	3.2%
介護への抵抗	0	0	12	12	介護への抵抗	—	0.0%	10.6%	9.7%
不眠	0	1	22	23	不眠	—	9.1%	19.5%	18.5%
転倒転落	0	9	64	73	転倒転落	—	81.8%	56.6%	58.9%
精神症状	0	1	11	12	精神症状	—	9.1%	9.7%	9.7%
(人数)	0	11	113	124					

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による行動障害の「不穏」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率5%で有意（ $\chi^2=4.726$, $df=1$, $p<0.05$ ）であった。この結果から、行動障害の「不穏」は「65歳以上」で有意に多かった。
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による行動障害の「不眠」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率5%で有意（ $\chi^2=4.230$, $df=1$, $p<0.05$ ）であった。この結果から、行動障害の「不眠」は「65歳以上」で有意に多かった。
- その他の症状では、年代による有意差はみられなかった。

行動障害 不穏

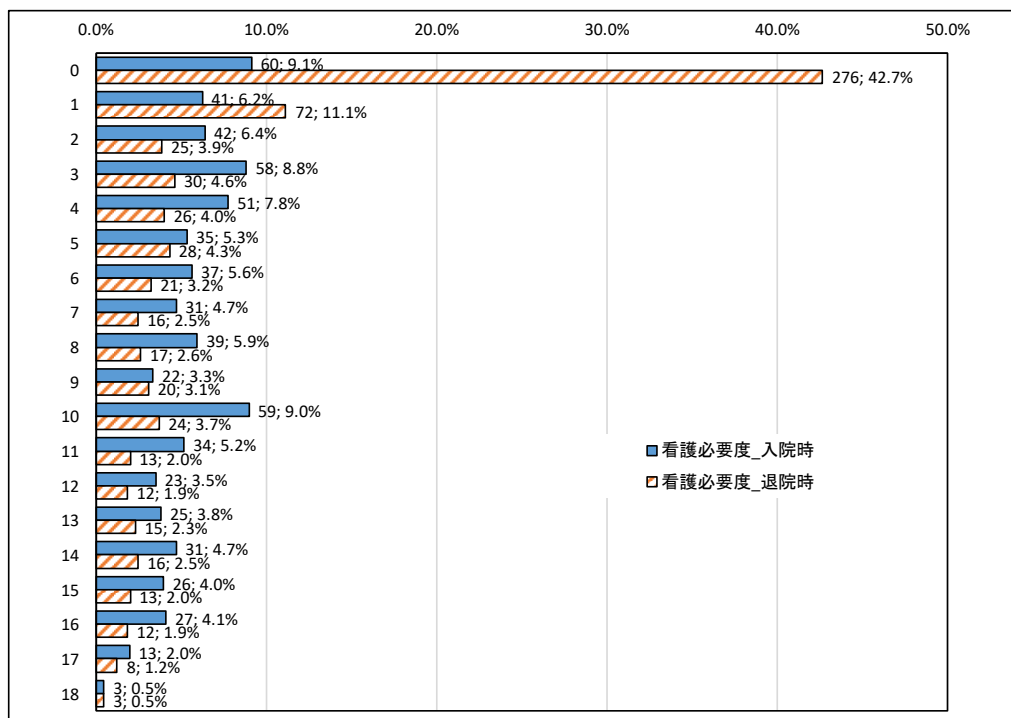
				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
64歳以下 65歳以上 合計						
なし	度数	120	470	590		
	期待度数	115.0	475.0	590.0	Pearson χ^2 乗値	4.726 1 0.030
	調整済み残差	2.2	-2.2		尤度比	6.103 1 0.013
あり	度数	2	34	36	線型と線型による連関	4.718 1 0.030
	期待度数	7.0	29.0	36.0	有効なケースの数	626
	調整済み残差	-2.2	2.2			
合計	度数	122	504	626		
	期待度数	122.0	504.0	626.0		

行動障害 不眠

				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
64歳以下 65歳以上 合計						
なし	度数	121	479	600		
	期待度数	116.9	483.1	600.0	Pearson χ^2 乗値	4.230 1 0.040
	調整済み残差	2.1	-2.1		尤度比	5.806 1 0.016
あり	度数	1	25	26	線型と線型による連関	4.224 1 0.040
	期待度数	5.1	20.9	26.0	有効なケースの数	626
	調整済み残差	-2.1	2.1			
合計	度数	122	504	626		
	期待度数	122.0	504.0	626.0		

(7) 看護必要度（入院時、退院時）

- 回復期リハ病院にて、看護必要度は、「0」の割合が入院時9.1%から退院時42.7%を占めており、大きく改善していた。



- 入院時・退院時の看護必要度の平均値を年代別にみると、すべての年代で、大きく改善している。
- 年代3区分及び合計について、看護必要度の入院時と退院時の平均値の t 検定（対応のあるデータについて）を実施した結果、すべてにおいて1%水準で有意差がみられた（ $p < 0.01$ ）、入院時より退院時の看護必要度の平均値が有意に小さいことが示された。

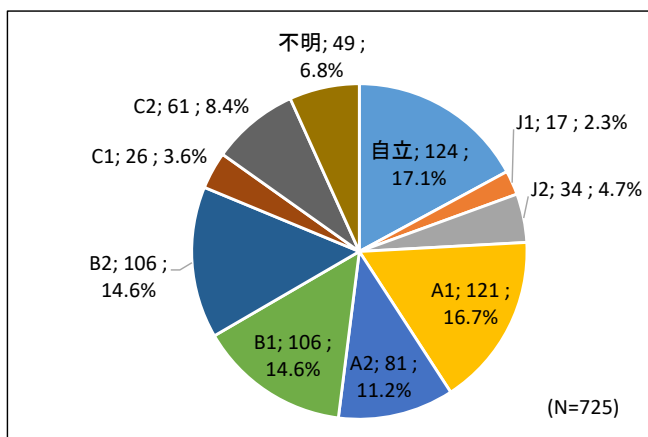
【年代3区分×看護必要度（入院時・退院時）】

	区分	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
39歳以下	入院時	5.08	12	5.071	3.654	11	0.004
	退院時	0.92	12	2.314			
40～64歳	入院時	5.99	111	4.955	11.202	110	<0.001
	退院時	2.18	111	3.793			
65歳以上	入院時	7.50	521	4.973	21.226	520	<0.001
	退院時	4.34	521	5.231			
合計	入院時	7.20	644	5.005	24.233	643	<0.001
	退院時	3.90	644	5.051			

(8) 障害高齢者の日常生活自立度及び認知症高齢者の日常生活自立度

- 障害高齢者の日常生活自立度では、自立が17.1%と多く、次いで、A 1 (16.7%)、B 1 (14.6%)、B 2 (14.6%) となっている。
- また、生活自立が「寝たきり」とされるランク B (29.2%)、ランク C (12.0) で合計では42.2%となった。
- 生活自立が「寝たきり」のランク B とランク C の合計について、「40～74歳」が25.4%で、「65歳以上」が45.4%と多かった。

【日常生活自立度：障害老人】



【年代3区分×日常生活自立度：障害老人】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
自立	3	40	81	124
J1	1	5	11	17
J2	2	5	27	34
A1	4	19	98	121
A2	1	14	66	81
B1	1	16	89	106
B2	0	12	94	106
C1	0	1	25	26
C2	0	3	58	61
不明	0	11	38	49
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
自立	25.0%	31.7%	13.8%	17.1%
J1	8.3%	4.0%	1.9%	2.3%
J2	16.7%	4.0%	4.6%	4.7%
A1	33.3%	15.1%	16.7%	16.7%
A2	8.3%	11.1%	11.2%	11.2%
B1	8.3%	12.7%	15.2%	14.6%
B2	0.0%	9.5%	16.0%	14.6%
C1	0.0%	0.8%	4.3%	3.6%
C2	0.0%	2.4%	9.9%	8.4%
不明	0.0%	8.7%	6.5%	6.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

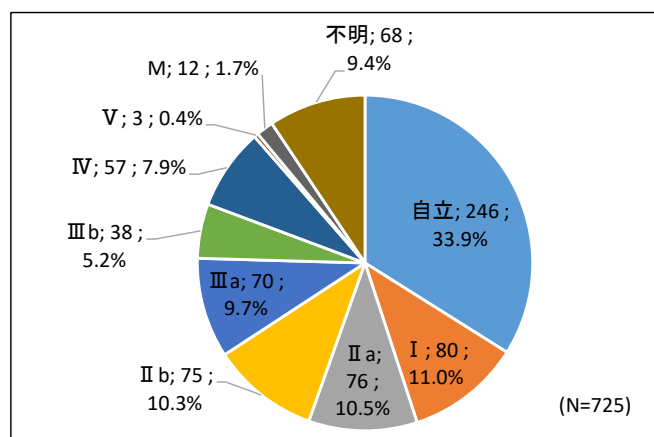
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「日常生活自立度（障害老人）」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=39.533$, $df=9$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「自立」は「64歳以下」で有意、「B2、C1、C2」は「65歳以上」で有意に多かった。

日常生活自立度_障害老人

				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
64歳以下 65歳以上 合計						
自立	度数	43	81	124		
	期待度数	23.6	100.4	124.0		
	調整済み残差	4.9	-4.9			
J1	度数	6	11	17		
	期待度数	3.2	13.8	17.0		
	調整済み残差	1.7	-1.7			
J2	度数	7	27	34		
	期待度数	6.5	27.5	34.0		
	調整済み残差	0.2	-0.2			
A1	度数	23	98	121		
	期待度数	23.0	98.0	121.0		
	調整済み残差	0.0	0.0			
A2	度数	15	66	81		
	期待度数	15.4	65.6	81.0		
	調整済み残差	-0.1	0.1			
B1	度数	17	89	106		
	期待度数	20.2	85.8	106.0		
	調整済み残差	-0.9	0.9			
B2	度数	12	94	106		
	期待度数	20.2	85.8	106.0		
	調整済み残差	-2.2	2.2			
C1	度数	1	25	26		
	期待度数	4.9	21.1	26.0		
	調整済み残差	-2.0	2.0			
C2	度数	3	58	61		
	期待度数	11.6	49.4	61.0		
	調整済み残差	-2.9	2.9			
不明	度数	11	38	49		
	期待度数	9.3	39.7	49.0		
	調整済み残差	0.6	-0.6			
合計	度数	138	587	725		
	期待度数	138.0	587.0	725.0		

- 認知症高齢者の日常生活自立度では、自立が33.9%と特に多く、次いで、Ⅰ（11.0%）、Ⅱ a（10.5%）、Ⅱ b（10.3%）、Ⅲ a（9.7%）となっている。
- 自立については、「40～64歳」が56.3%で、「65歳以上」では28.3%と少なかった。
- 見守りもしくは介護が必要とされるⅡ～Mの症例は、45.7%であった。「40～64歳」では23.1%であったが、「65歳以上」では51.1%と多かった。

【日常生活自立度：認知症老人】



【年代3区分×日常生活自立度：認知症老人】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
自立	9	71	166	246
Ⅰ	1	9	70	80
Ⅱ a	0	7	69	76
Ⅱ b	1	6	68	75
Ⅲ a	0	10	60	70
Ⅲ b	0	0	38	38
Ⅳ	1	5	51	57
Ⅴ	0	0	3	3
M	0	1	11	12
不明	0	17	51	68
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
自立	75.0%	56.3%	28.3%	33.9%
Ⅰ	8.3%	7.1%	11.9%	11.0%
Ⅱ a	0.0%	5.6%	11.8%	10.5%
Ⅱ b	8.3%	4.8%	11.6%	10.3%
Ⅲ a	0.0%	7.9%	10.2%	9.7%
Ⅲ b	0.0%	0.0%	6.5%	5.2%
Ⅳ	8.3%	4.0%	8.7%	7.9%
Ⅴ	0.0%	0.0%	0.5%	0.4%
M	0.0%	0.8%	1.9%	1.7%
不明	0.0%	13.5%	8.7%	9.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「日常生活自立度（認知症老人）」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=56.388$, $df=9$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「自立」は「64歳以下」で有意に多く、「Ⅱa、Ⅱb、Ⅲb」は「65歳以上」で有意に多かった。

日常生活自立度 認知症老人

				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
自立	度数	80	166	246		
	期待度数	46.8	199.2	246.0	Pearson χ^2 乗値	56.388
	調整済み残差	6.6	-6.6		尤度比	62.758
Ⅰ	度数	10	70	80		
	期待度数	15.2	64.8	80.0	線型と線型による連関	0.785
	調整済み残差	-1.6	1.6		有効なケースの数	725
Ⅱa	度数	7	69	76		
	期待度数	14.5	61.5	76.0		
	調整済み残差	-2.3	2.3			
Ⅱb	度数	7	68	75		
	期待度数	14.3	60.7	75.0		
	調整済み残差	-2.3	2.3			
Ⅲa	度数	10	60	70		
	期待度数	13.3	56.7	70.0		
	調整済み残差	-1.1	1.1			
Ⅲb	度数	0	38	38		
	期待度数	7.2	30.8	38.0		
	調整済み残差	-3.1	3.1			
Ⅳ	度数	6	51	57		
	期待度数	10.8	46.2	57.0		
	調整済み残差	-1.7	1.7			
Ⅴ	度数	0	3	3		
	期待度数	0.6	2.4	3.0		
	調整済み残差	-0.8	0.8			
Ⅲ	度数	1	11	12		
	期待度数	2.3	9.7	12.0		
	調整済み残差	-1.0	1.0			
不明	度数	17	51	68		
	期待度数	12.9	55.1	68.0		
	調整済み残差	1.3	-1.3			
合計	度数	138	587	725		
	期待度数	138.0	587.0	725.0		

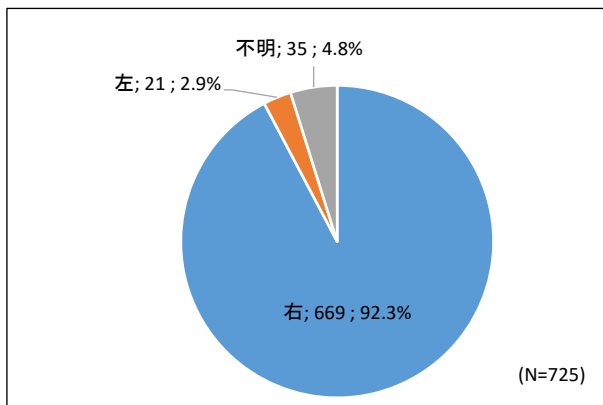
2-6 回復期情報（リハビリ）

- (1) 利き手と麻痺
- (2) BrStage（上肢、手指、下肢）
- (3) 健側 MMT（上肢、手指、下肢）
- (4) 協調運動障害、嚥下障害、構音障害、感覚障害
- (5) 高次脳機能障害の有無と種類数
- (6) 高次脳機能障害の内容
- (7) HDSR
- (8) MMSE
- (9) 下肢装具
- (10) 回復期 FIM（入院時、退院時の運動項目、認知項目、合計の値）
- (11) 回復期 FIM（改善度）

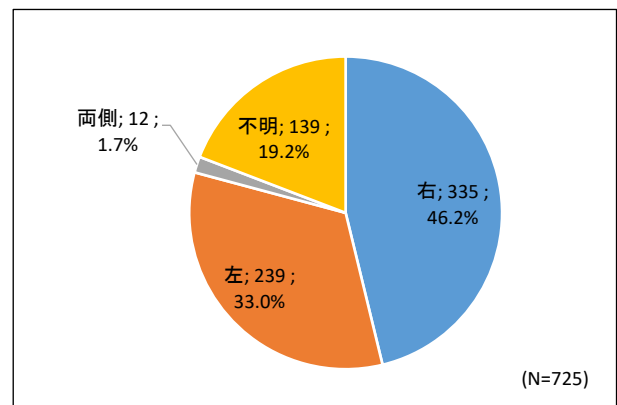
(1) 利き手と麻痺

- 利き手は、右が92.3%を占めていた。
- 麻痺では、右が46.2%、左が33.0%となっていた。

【利き手】



【麻痺】



【年代3区分×利き手】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
右	11	115	543	669
左	1	5	15	21
不明	0	6	29	35
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
右	91.7%	91.3%	92.5%	92.3%
左	8.3%	4.0%	2.6%	2.9%
不明	0.0%	4.8%	4.9%	4.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

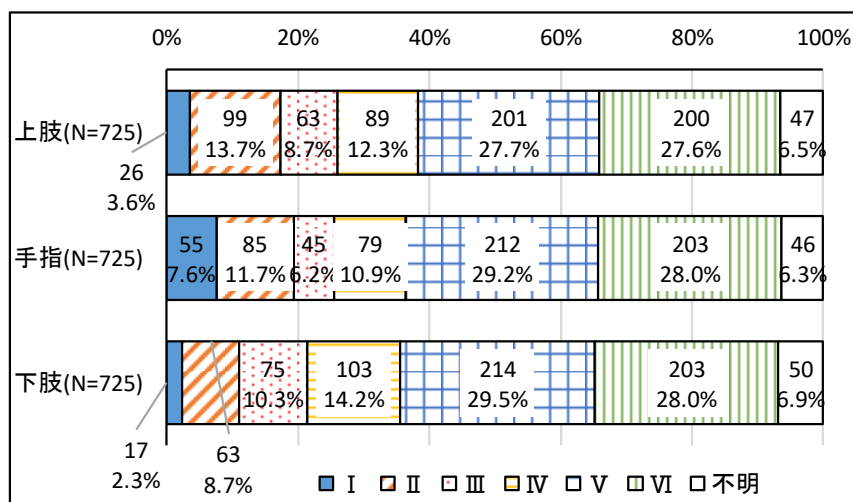
【年代3区分×麻痺】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
右	5	58	272	335
左	3	44	192	239
両側	1	2	9	12
不明	3	22	114	139
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
右	41.7%	46.0%	46.3%	46.2%
左	25.0%	34.9%	32.7%	33.0%
両側	8.3%	1.6%	1.5%	1.7%
不明	25.0%	17.5%	19.4%	19.2%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(2) Brunnstrom Stage（上肢、手指、下肢）

- 上肢、手指、下肢ともほぼ同様の傾向にあり、Vが27.7%～29.5%、VIが27.6%～28.0と多い。
- Brunnstrom stage I～IIの重度例は、上肢で17.3%、手指で19.3%、下肢で11.0%であった。
- Brunnstrom stage IIIの中等度例は、上肢で8.7%、手指で6.2%、下肢で10.3%であった。
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「Brunnstrom stage（上肢、手指、下肢）」について、 χ^2 検定を行ったところいずれも有意性はみられなかった。従って、「Brunnstrom stage（上肢、手指、下肢）」についての年代による明確な差異は認められない。



【年代3区分×Brunnstrom Stage（上肢）】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
I	0	5	21	26	I	0.0%	4.0%	3.6%	3.6%
II	0	18	81	99	II	0.0%	14.3%	13.8%	13.7%
III	2	13	48	63	III	16.7%	10.3%	8.2%	8.7%
IV	2	14	73	89	IV	16.7%	11.1%	12.4%	12.3%
V	3	28	170	201	V	25.0%	22.2%	29.0%	27.7%
VI	5	38	157	200	VI	41.7%	30.2%	26.7%	27.6%
不明	0	10	37	47	不明	0.0%	7.9%	6.3%	6.5%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×Brunnstrom Stage（手指）】

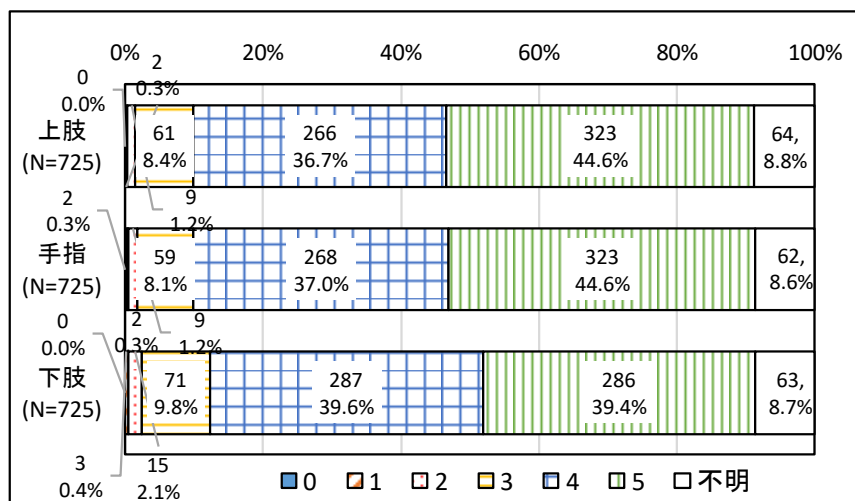
回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
I	0	7	48	55	I	0.0%	5.6%	8.2%	7.6%
II	1	18	66	85	II	8.3%	14.3%	11.2%	11.7%
III	2	10	33	45	III	16.7%	7.9%	5.6%	6.2%
IV	2	15	62	79	IV	16.7%	11.9%	10.6%	10.9%
V	2	27	183	212	V	16.7%	21.4%	31.2%	29.2%
VI	5	39	159	203	VI	41.7%	31.0%	27.1%	28.0%
不明	0	10	36	46	不明	0.0%	7.9%	6.1%	6.3%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×Brunnstrom Stage（下肢）】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
I	0	2	15	17	I	0.0%	1.6%	2.6%	2.3%
II	0	9	54	63	II	0.0%	7.1%	9.2%	8.7%
III	1	17	57	75	III	8.3%	13.5%	9.7%	10.3%
IV	2	20	81	103	IV	16.7%	15.9%	13.8%	14.2%
V	4	26	184	214	V	33.3%	20.6%	31.3%	29.5%
VI	5	43	155	203	VI	41.7%	34.1%	26.4%	28.0%
不明	0	9	41	50	不明	0.0%	7.1%	7.0%	6.9%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(3) 健側徒手筋力テストMMT（上肢、手指、下肢）

- 健側MMTは、上肢、手指、下肢ともに5が39.4%～44.6%で最も多く、次いで、4が36.7%～39.6%である。
- 健側MMT 0～3については、上肢で9.9%、手指で9.9%、下肢で12.3%で、廃用症候群の関与が強く疑われる。また、健側MMT 4については、上肢36.7%、手指37.0%。下肢39.6%で廃用症候群の関与が否定できない。



【年代3区分×健側徒手筋力テスト MMT（上肢）】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
0	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
1	0	1	1	2	1	0.0%	0.8%	0.2%	0.3%
2	0	0	9	9	2	0.0%	0.0%	1.5%	1.2%
3	0	5	56	61	3	0.0%	4.0%	9.5%	8.4%
4	3	28	235	266	4	25.0%	22.2%	40.0%	36.7%
5	8	77	238	323	5	66.7%	61.1%	40.5%	44.6%
不明	1	15	48	64	不明	8.3%	11.9%	8.2%	8.8%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×健側徒手筋力テスト MMT（手指）】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
0	0	0	2	2	0	0.0%	0.0%	0.3%	0.3%
1	0	1	1	2	1	0.0%	0.8%	0.2%	0.3%
2	0	0	9	9	2	0.0%	0.0%	1.5%	1.2%
3	1	7	51	59	3	8.3%	5.6%	8.7%	8.1%
4	2	25	241	268	4	16.7%	19.8%	41.1%	37.0%
5	8	79	236	323	5	66.7%	62.7%	40.2%	44.6%
不明	1	14	47	62	不明	8.3%	11.1%	8.0%	8.6%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×健側徒手筋力テスト MMT（下肢）】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
0	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
1	0	1	2	3	1	0.0%	0.8%	0.3%	0.4%
2	0	1	14	15	2	0.0%	0.8%	2.4%	2.1%
3	0	7	64	71	3	0.0%	5.6%	10.9%	9.8%
4	3	23	261	287	4	25.0%	18.3%	44.5%	39.6%
5	8	81	197	286	5	66.7%	64.3%	33.6%	39.4%
不明	1	13	49	63	不明	8.3%	10.3%	8.3%	8.7%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「健側徒手筋力テストMMT（上肢）」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=30.000$, df=5, $p<0.01$ ）であった。
- この結果から、「上肢」の「3、4」では「65歳以上」で有意に多く、「上肢」の「5」では「64歳以下」で有意に多かった。

健側MMT_上肢

				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
	64歳以下	65歳以上	合計			
1	度数	1	1	2		
	期待度数	0.4	1.6	2.0		
	調整済み残差	1.1	-1.1			
2	度数	0	9	9		
	期待度数	1.7	7.3	9.0		
	調整済み残差	-1.5	1.5			
3	度数	5	56	61		
	期待度数	11.6	49.4	61.0		
	調整済み残差	-2.3	2.3			
4	度数	31	235	266		
	期待度数	50.6	215.4	266.0		
	調整済み残差	-3.9	3.9			
5	度数	85	238	323		
	期待度数	61.5	261.5	323.0		
	調整済み残差	4.5	-4.5			
不明	度数	16	48	64		
	期待度数	12.2	51.8	64.0		
	調整済み残差	1.3	-1.3			
合計	度数	138	587	725		
	期待度数	138.0	587.0	725.0		

Pearson χ^2 乗値	30.000	5	<0.001
尤度比	32.584	5	<0.001
線型と線型による連関	1.927	1	0.165
有効なケースの数	725		

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「健側徒手筋力テストMMT（手指）」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=33.091$, df=6, $p<0.01$ ）であった。
- この結果から、「手指」の「4」では「65歳以上」で有意に多く、「手指」の「5」では「64歳以下」で有意に多かった。

健側MMT_手指

				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
	64歳以下	65歳以上	合計			
0	度数	0	2	2		
	期待度数	0.4	1.6	2.0		
	調整済み残差	-0.7	0.7			
1	度数	1	1	2		
	期待度数	0.4	1.6	2.0		
	調整済み残差	1.1	-1.1			
2	度数	0	9	9		
	期待度数	1.7	7.3	9.0		
	調整済み残差	-1.5	1.5			
3	度数	8	51	59		
	期待度数	11.2	47.8	59.0		
	調整済み残差	-1.1	1.1			
4	度数	27	241	268		
	期待度数	51.0	217.0	268.0		
	調整済み残差	-4.7	4.7			
5	度数	87	236	323		
	期待度数	61.5	261.5	323.0		
	調整済み残差	4.9	-4.9			
不明	度数	15	47	62		
	期待度数	11.8	50.2	62.0		
	調整済み残差	1.1	-1.1			
合計	度数	138	587	725		
	期待度数	138.0	587.0	725.0		

Pearson χ^2 乗値	33.091	6	<0.001
尤度比	36.045	6	<0.001
線型と線型による連関	1.437	1	0.231
有効なケースの数	725		

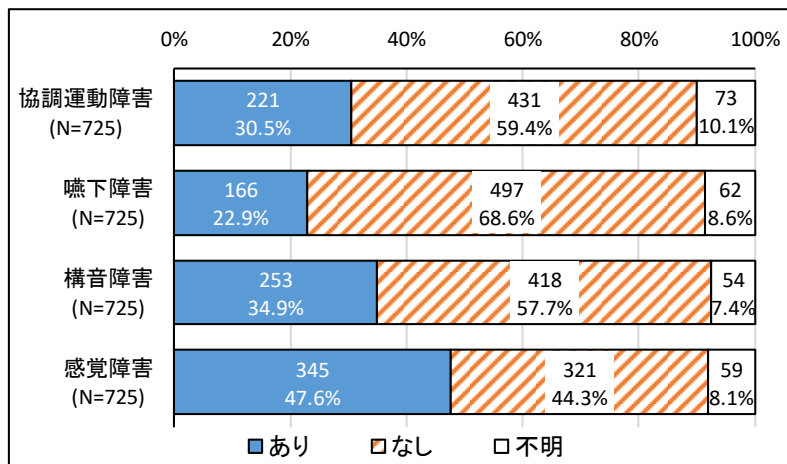
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「健側徒手筋力テストMMT（下肢）」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=51.812$, $df=5$, $p<0.01$ ）であった。
- この結果から、「下肢」の「3、4」では「65歳以上」で有意に多く、「下肢」の「5」では「64歳以下」で有意に多かった。

健側MMT_下肢

		64歳以下	65歳以上	合計				
		度数	1	2	3	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
1	期待度数	0.6	2.4	3.0	Pearson χ^2 乗値	51.812	5	<0.001
	調整済み残差	0.6	-0.6		尤度比	53.007	5	<0.001
	度数	1	14	15	線型と線型による連関	0.688	1	0.407
2	期待度数	2.9	12.1	15.0	有効なケースの数	725		
	調整済み残差	-1.2	1.2					
	度数	7	64	71				
3	期待度数	13.5	57.5	71.0				
	調整済み残差	-2.1	2.1					
	度数	26	261	287				
4	期待度数	54.6	232.4	287.0				
	調整済み残差	-5.5	5.5					
	度数	89	197	286				
5	期待度数	54.4	231.6	286.0				
	調整済み残差	6.7	-6.7					
	度数	14	49	63				
不明	期待度数	12.0	51.0	63.0				
	調整済み残差	0.7	-0.7					
	度数	138	587	725				
合計	期待度数	138.0	587.0	725.0				
	調整済み残差							

(4) 協調運動障害、嚥下障害、構音障害、感覚障害

- ・ 協調運動障害が「あり」が30.5%で、「65歳以上」では30.8%と多かった。
- ・ 嚥下障害が「あり」が22.9%で、「65歳以上」で25.6%と多かった。
- ・ 構音障害が「あり」が34.9%で、「65歳以上」で36.6%と多かった。
- ・ 感覚障害が「あり」が47.6%で、「40～64歳」で55.6%と多かった。



【年代3区分×協調運動障害】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	4	36	181	221
なし	6	75	350	431
不明	2	15	56	73
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	33.3%	28.6%	30.8%	30.5%
なし	50.0%	59.5%	59.6%	59.4%
不明	16.7%	11.9%	9.5%	10.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×嚥下障害】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	0	16	150	166
なし	10	100	387	497
不明	2	10	50	62
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	0.0%	12.7%	25.6%	22.9%
なし	83.3%	79.4%	65.9%	68.6%
不明	16.7%	7.9%	8.5%	8.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×構音障害】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	2	36	215	253
なし	8	80	330	418
不明	2	10	42	54
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	16.7%	28.6%	36.6%	34.9%
なし	66.7%	63.5%	56.2%	57.7%
不明	16.7%	7.9%	7.2%	7.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×感覚障害】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	10	70	265	345
なし	1	47	273	321
不明	1	9	49	59
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	83.3%	55.6%	45.1%	47.6%
なし	8.3%	37.3%	46.5%	44.3%
不明	8.3%	7.1%	8.3%	8.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「協調運動障害」について、 χ^2 検定を行ったところ、年代による有意差はみられなかった。
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「嚥下障害」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=12.620$, $df=1$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「嚥下障害あり」は「65歳以上」で有意に起きていることが読み取れる。
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「構音障害」について、 χ^2 検定を行ったところ、年代による有意差はみられなかった。
- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「感覚障害」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=7.264$, $df=1$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「感覚障害あり」は「64歳以下」で有意に多かったことが読み取れる。

協調運動障害

		64歳以下	65歳以上	合計			
なし	度数	81	350	431		値	自由度
	期待度数	80.0	351.0	431.0			
	調整済み残差	0.2	-0.2				
あり	度数	40	181	221	Pearson χ^2 乗値	0.047	1
	期待度数	41.0	180.0	221.0			
	調整済み残差	-0.2	0.2				
合計	度数	121	531	652	尤度比	0.047	1
	期待度数	121.0	531.0	652.0			
					線型と線型による連関	0.046	1
					有効なケースの数	652	0.829

嚥下障害

		64歳以下	65歳以上	合計			
なし	度数	110	387	497		値	自由度
	期待度数	94.5	402.5	497.0			
	調整済み残差	3.6	-3.6				
あり	度数	16	150	166	Pearson χ^2 乗値	12.620	1
	期待度数	31.5	134.5	166.0			
	調整済み残差	-3.6	3.6				
合計	度数	126	537	663	尤度比	14.140	1
	期待度数	126.0	537.0	663.0			
					線型と線型による連関	12.601	1
					有効なケースの数	663	<0.001

構音障害

		64歳以下	65歳以上	合計			
なし	度数	88	330	418		値	自由度
	期待度数	78.5	339.5	418.0			
	調整済み残差	1.9	-1.9				
あり	度数	38	215	253	Pearson χ^2 乗値	3.761	1
	期待度数	47.5	205.5	253.0			
	調整済み残差	-1.9	1.9				
合計	度数	126	545	671	尤度比	3.854	1
	期待度数	126.0	545.0	671.0			
					線型と線型による連関	3.755	1
					有効なケースの数	671	0.052

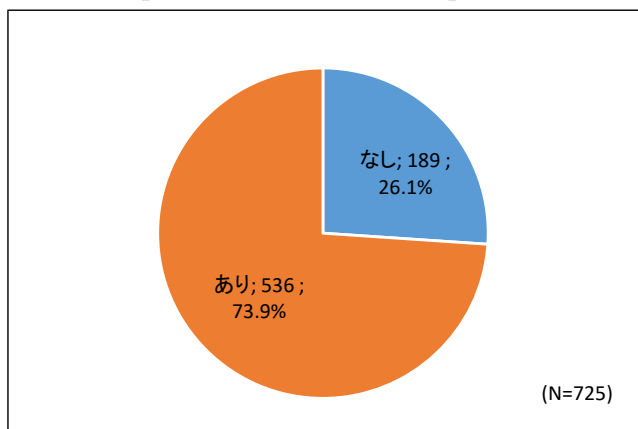
感覚障害

		64歳以下	65歳以上	合計			
なし	度数	48	273	321		値	自由度
	期待度数	61.7	259.3	321.0			
	調整済み残差	-2.7	2.7				
あり	度数	80	265	345	Pearson χ^2 乗値	7.264	1
	期待度数	66.3	278.7	345.0			
	調整済み残差	2.7	-2.7				
合計	度数	128	538	666	尤度比	7.339	1
	期待度数	128.0	538.0	666.0			
					線型と線型による連関	7.253	1
					有効なケースの数	666	0.007

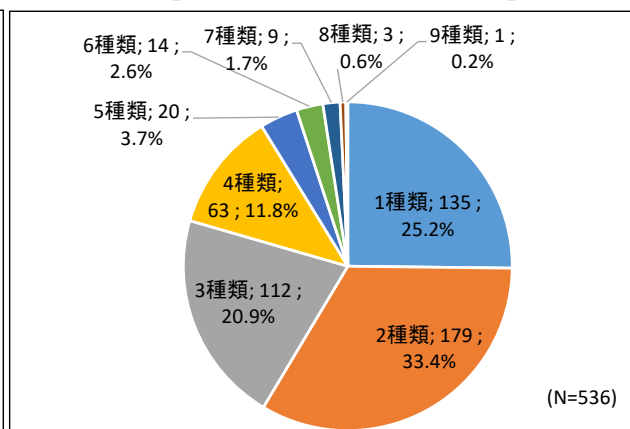
(5) 高次脳機能障害の有無と発症数

- 高次脳機能障害は、回答数725名中、「あり」は536名で、73.9%であった。
- 高次脳機能障害「あり」の内訳を発症数でみると、2種類が33.4%で最も多く、次いで、1種類（25.2%）、3種類（20.9%）、4種類（11.8%）となっていた。また、5種類以上を合併していた症例は、8.8%であった。
- 年齢区分では、症例数が少ないが「39歳以下」では3種類が50%と多く、「40～64歳」では2種類が35.6%と多く、「65歳以上」では2種類が33.0%と多かった。
- 5種類以上を合併している症例は、「40～64歳」では6.8%で、「65歳以上」では9.3%と多かった。

【高次脳機能障害の有無】



【高次脳機能障害の発症数】



【年代3区分×高次脳機能障害の有無】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	6	87	443	536
なし	6	39	144	189
合計	12	126	587	725
比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	50.0%	69.0%	75.5%	73.9%
なし	50.0%	31.0%	24.5%	26.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×高次脳機能障害の発症数】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
1種類	1	26	108	135	1種類	16.7%	29.9%	24.4%	25.2%
2種類	2	31	146	179	2種類	33.3%	35.6%	33.0%	33.4%
3種類	3	14	95	112	3種類	50.0%	16.1%	21.4%	20.9%
4種類	0	10	53	63	4種類	0.0%	11.5%	12.0%	11.8%
5種類	0	1	19	20	5種類	0.0%	1.1%	4.3%	3.7%
6種類	0	2	12	14	6種類	0.0%	2.3%	2.7%	2.6%
7種類	0	2	7	9	7種類	0.0%	2.3%	1.6%	1.7%
8種類	0	1	2	3	8種類	0.0%	1.1%	0.5%	0.6%
9種類	0	0	1	1	9種類	0.0%	0.0%	0.2%	0.2%
合計	6	87	443	536	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「高次脳機能障害の有無」について、 χ^2 検定を行ったところ、「65歳以上」の方が「高次脳機能障害あり」の傾向はみられるが、年代による有意差はなかった。

高次脳機能障害

64歳以下 65歳以上 合計				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	45	144	189		
	期待度数	36.0	153.0	189.0	Pearson χ^2 乗値	3.782
	調整済み残差	1.9	-1.9		尤度比	3.648
あり	度数	93	443	536	線型と線型による連関	3.777
	期待度数	102.0	434.0	536.0	有効なケースの数	725
	調整済み残差	-1.9	1.9			
合計	度数	138	587	725		
	期待度数	138.0	587.0	725.0		

【年代2区分×高次脳機能障害の発症数】

回答数	64歳以下	65歳以上	合計	比率	64歳以下	65歳以上	合計
1種類	27	108	135	1種類	29.0%	24.4%	25.2%
2種類	33	146	179	2種類	35.5%	33.0%	33.4%
3種類	17	95	112	3種類	18.3%	21.4%	20.9%
4種類	10	53	63	4種類	10.8%	12.0%	11.8%
5種類	1	19	20	5種類	1.1%	4.3%	3.7%
6種類	2	12	14	6種類	2.2%	2.7%	2.6%
7種類	2	7	9	7種類	2.2%	1.6%	1.7%
8種類	1	2	3	8種類	1.1%	0.5%	0.6%
9種類	0	1	1	9種類	0.0%	0.2%	0.2%
合計	93	443	536	合計	100.0%	100.0%	100.0%

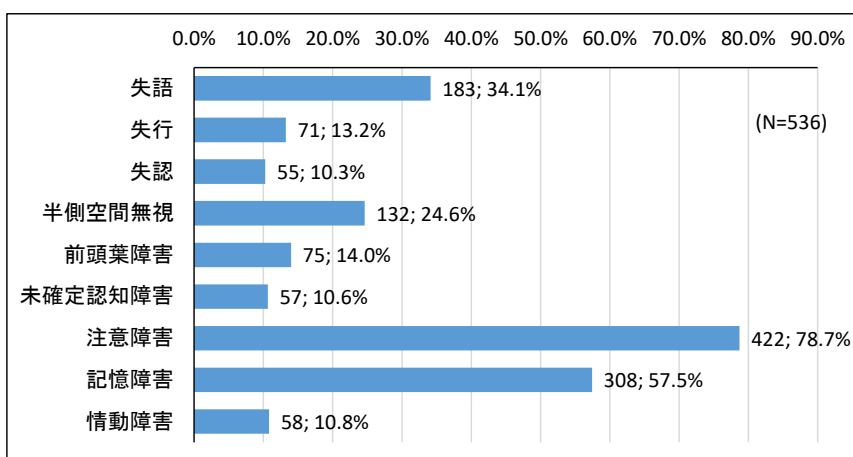
- 高次脳機能障害の数は、64歳以下では平均1.62、65歳以上では平均1.94であった。
- これらの平均値に差がみられるかについて t 検定（対応のないデータ）を実施した結果、有意差がみられた（ $t=2.042$, $df=723$, $p<0.05$ ）。この結果をみると、65歳以上の方が有意に高次脳機能障害を多く持っていることと解釈される。

【高次脳機能障害の数の年代2区分の平均値の比較及び差の検定】

年代2区分	平均値	N	標準偏差	等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定		
				F値	有意確率	t値	自由度	有意確率(両側)
64歳以下	1.62	138	1.645	0.000	0.987	2.042	723	0.042
65歳以上	1.94	587	1.677					

(6) 高次脳機能障害の内容

- 全体の725名のうちでは、注意障害を422名（58.2%）、記憶障害が308名（42.3%）、失語183名（25.2%）、半側空間無視132名（18.2%）に認めた。
- 高次脳機能障害の内容では、注意障害が78.7%で最も多く、次いで、記憶障害（57.5%）となつて、これらの割合が特に高かった。その他では、失語（34.1%）、半側空間無視（24.6%）などとなっていた。各年代区分で、同じ順位であった。
- 失語症例が183名で、右片麻痺（335名）に伴っていたとすると、54.6%に認めることになった。
- また、半側視空間無視が132名で、左片麻痺（239名）に伴っていたとすると、55.2%に認めることになった。



【年代3区分×高次脳機能障害の内容】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
失語	2	32	149	183	失語	33.3%	36.8%	33.6%	34.1%
失行	0	9	62	71	失行	0.0%	10.3%	14.0%	13.2%
失認	0	8	47	55	失認	0.0%	9.2%	10.6%	10.3%
半側空間無視	2	22	108	132	半側空間無視	33.3%	25.3%	24.4%	24.6%
前頭葉障害	0	11	64	75	前頭葉障害	0.0%	12.6%	14.4%	14.0%
未確定認知障害	0	8	49	57	未確定認知障害	0.0%	9.2%	11.1%	10.6%
注意障害	4	68	350	422	注意障害	66.7%	78.2%	79.0%	78.7%
記憶障害	5	44	259	308	記憶障害	83.3%	50.6%	58.5%	57.5%
情動障害	1	7	50	58	情動障害	16.7%	8.0%	11.3%	10.8%
(人数)	6	87	443	536					

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「高次脳機能障害の内容」それぞれについて、 χ^2 検定を行ったところ、いずれの内容においても年代2区分による有意差は得られなかった。

【年代2区分×高次脳機能障害の内容】

回答数	64歳以下	65歳以上	合計	比率	64歳以下	65歳以上	合計
失語	34	149	183	失語	36.6%	33.6%	34.1%
失行	9	62	71	失行	9.7%	14.0%	13.2%
失認	8	47	55	失認	8.6%	10.6%	10.3%
半側空間無視	24	108	132	半側空間無視	25.8%	24.4%	24.6%
前頭葉障害	11	64	75	前頭葉障害	11.8%	14.4%	14.0%
未確定認知障害	8	49	57	未確定認知障害	8.6%	11.1%	10.6%
注意障害	72	350	422	注意障害	77.4%	79.0%	78.7%
記憶障害	49	259	308	記憶障害	52.7%	58.5%	57.5%
情動障害	8	50	58	情動障害	8.6%	11.3%	10.8%
(人数)	93	443	536				

(7) HDSR（長谷川式簡易知能評価スケール改訂版）

① 初回、2回目のいずれかで検査が実施された症例のHDSRについて

- 初回、2回目とも検査が実施されたデータを対象とした場合、対象数が少なくなる場合があるため、初回と2回目のいずれかで検査が実施されたデータを対象とした検定をおこなった。このため対象のデータは、初回と2回目では対応がない（独立した）として扱っている。
- HDSRの初回と2回目の平均値に差がみられるかについてt検定（対応のないデータ）を実施した結果、日常生活自立度（認知症高齢者）の正常群では、1%水準の有意差がみられ（ $p<0.01$ ）、初回より2回目の平均値が大きく、改善していた。また、区分Ⅰ群では、初回と2回目との差は、 $P=0.050$ で有意な傾向を認めた。

しかし、全体、区分Ⅱ～Ⅳのいずれ群も有意な結果は得られなかった。

【認知症高齢者の日常生活自立度の区分によるHDSRの初回と2回目の平均値の比較】

日常生活自立度 (認知症老人)	HDSR	平均	N	標準偏差	等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定		
					F値	有意確率	t値	自由度	有意確率(両側)
全体	初回	20.09	476	8.589	0.223	0.637	1.032	701	0.302
	2回目	20.81	227	8.849					
正常	初回	25.75	159	5.136	4.042	0.046	2.635	163.899	0.009
	2回目	27.37	65	3.689					
Ⅰ	初回	21.24	62	7.330	1.314	0.255	1.983	93	0.050
	2回目	24.24	33	6.398					
Ⅱ～Ⅳ	初回	15.63	214	8.529	0.014	0.905	0.655	323	0.513
	2回目	16.29	111	8.678					

注1：対応のない（独立した）データによるt検定

注2：「等分散性のためのLevene検定」の有意確率が0.05より小さい場合（ $p<0.05$ ）、分散が異なると判断されるためWelch検定をおこなっている。

② 初回、2回目とも検査が実施された症例のHDSRについて

- 対象数は少なくなったが、初回、2回目ともに検査が実施されたHDSRの初回と2回目の平均値に差がみられるかについてt検定（対応のあるデータ）を実施した結果、認知症高齢者の日常生活自立度の全体、正常、区分Ⅰ、区分Ⅱ～Ⅳのいずれの区分でも、1%水準の有意差がみられ（ $p<0.01$ ）、初回より2回目の平均値が大きく有意に改善していた。

【認知症高齢者の日常生活自立度の区分によるHDSRの初回と2回目の比較】

日常生活自立度 (認知症老人)	HDSR	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
全体	初回	19.13	211	7.884	8.117	210	<0.001
	2回目	21.85	211	7.777			
正常	初回	24.84	64	5.449	4.147	63	<0.001
	2回目	27.38	64	3.718			
Ⅰ	初回	20.47	32	7.130	5.021	31	<0.001
	2回目	25.00	32	4.765			
Ⅱ～Ⅳ	初回	15.43	100	7.364	4.423	99	<0.001
	2回目	17.50	100	7.839			

注：対応のあるデータによるt検定

(8) MMSE (Mini Mental State Examination)

① ●初回、2回目のいずれかで検査が実施された症例のMMSEについて

- 初回、2回目とも検査が実施されたデータを対象とした場合、対象数が少なくなる場合があるため、初回と2回目のいずれかで検査が実施されたデータを対象とした検定をおこなった。このため対象のデータは、初回と2回目では対応がない（独立した）として扱っている。
- 初回のMMSE値の正常群（28点以上）、MCI群（23～27点）、dementia群（22点以下）に3区分し、MMSEの初回と2回目の平均値に差がみられるかについてt検定（対応のないデータ）を実施した結果、MCI群（23～27点）では1%水準で有意差がみられた（ $p<0.01$ ）。

一方、全体、正常群（28点以上）、dementia群（22点以下）では、有意差はみられないためMMSEの初回と2回目の平均値に差があるとは言えなかった。

【初回のMMSEによる3区分によるMMSEの初回と2回目の平均値の比較】

初回のMMSEランク	MMSE	平均	N	標準偏差	等分散性のための		2つの母平均の差の検定		
					F値	有意確率	t値	自由度	有意確率(両側)
全体	初回	22.63	236	7.058	1.008	0.316	0.187	312	0.851
	2回目	22.81	78	7.636					
正常群 (28点以上)	初回	29.18	76	0.828	26.769	0.000	1.221	19.153	0.237
	2回目	27.35	20	6.706					
MCI群 (23～27点)	初回	25.14	69	1.375	14.777	0.000	3.692	20.872	0.001
	2回目	27.42	19	2.589					
dementia群 (22点以下)	初回	15.77	88	4.973	6.696	0.011	1.811	53.602	0.076
	2回目	18.05	38	7.040					

注1：対応のない（独立した）データによるt検定

注2：「等分散性のためのLevene検定」の有意確率が0.05より小さい場合（ $p<0.05$ ）、分散が異なると判断されるためWelch検定をおこなっている。

② ●初回、2回目とも検査が実施された症例のMMSEについて

- 初回のMMSE値の正常群（28点以上）、MCI群（23～27点）、dementia群（22点以下）で、MMSEの初回と2回目の平均値に差がみられるかについてt検定（対応のあるデータ）を実施した結果、MCI群（23～27点）では1%水準で有意差がみられ（ $p<0.01$ ）、dementia群（22点以下）においても1%水準で有意差がみられ、それぞれ初回より2回目の平均値が大きく、改善していた。

一方、正常群（28点以上）では、有意差はみられないためMMSEの初回と2回目の平均値に差があるとは言えなかった。

【初回MMSEの3区分によるMMSEの初回と2回目の平均値の比較】

初回のMMSEランク	MMSE	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
正常群 (28点以上)	初回	29.15	20	0.745	1.206	19	0.243
	2回目	27.35	20	6.706			
MCI群 (23～27点)	初回	24.84	19	1.167	4.110	18	0.001
	2回目	27.42	19	2.589			
dementia群 (22点以下)	初回	14.74	38	4.763	2.914	37	0.006
	2回目	18.05	38	7.040			

注：対応のあるデータによるt検定

- また、認知症高齢者の日常生活自立度の区分によるMMSEの初回と2回目の平均値に差がみられるかについてt検定（対応のあるデータ）を実施した結果、日常生活自立度（認知症高齢者）の全体と区分Ⅰでは、5%水準の有意差がみられ（ $p<0.05$ ）、初回より2回目の平均値が有意に大きく、改善していた。

一方、正常、区分Ⅱ～Ⅲでは、有意差はみられないためMMSEの初回と2回目の平均値に差があるとは言えなかった。

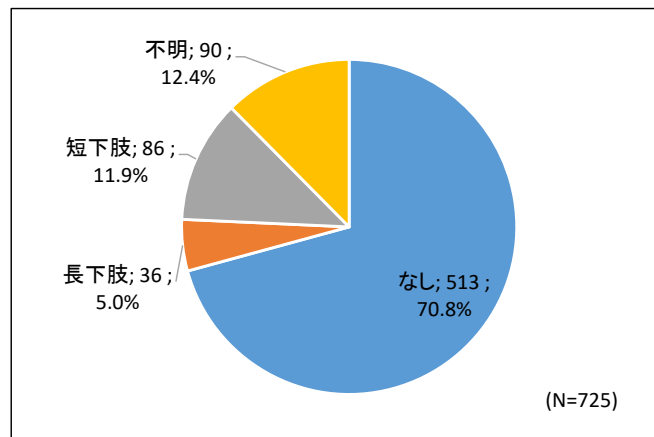
【MMSEの初回と2回目の平均値の差：日常生活自立度（認知症老人）の区分別】

日常生活自立度 (認知症老人)	MMSE	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
全体	初回	20.97	77	7.231	2.457	76	0.016
	2回目	22.78	77	7.682			
正常	初回	24.19	32	6.572	0.837	31	0.409
	2回目	25.31	32	7.502			
Ⅰ	初回	21.29	14	5.823	2.754	13	0.016
	2回目	24.29	14	5.810			
Ⅱ～Ⅲ	初回	17.13	30	6.837	1.767	29	0.088
	2回目	19.13	30	7.459			

注：対応のあるデータによるt検定

(9) 下肢装具

- 下肢装具は、「なし」が70.8%を占めているが、短下肢装具が11.9%、長下肢装具が5.0%の割合でみられた。
- 短下肢装具は、「40～64歳」で22.2%に使用されていたが、「65歳以上」では9.0%であった。
- 長下肢装具は、「40～64歳」で5.6%に使用され、「65歳以上」で4.9%に使用されていた。
- 下肢のBrunnstrom stageⅠ～Ⅱの重度障害が80名（11.0%）いるが、長下肢装具の使用者は36名（5.0%）であった。
- 下肢のBrunnstrom stageⅢの中等度障害が103名（14.2%）いるが、短下肢装具の使用者は86名（11.6%）であった。



【年代3区分×下肢装具】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
なし	4	76	433	513	なし	33.3%	60.3%	73.8%	70.8%
長下肢	0	7	29	36	長下肢	0.0%	5.6%	4.9%	5.0%
短下肢	5	28	53	86	短下肢	41.7%	22.2%	9.0%	11.9%
不明	3	15	72	90	不明	25.0%	11.9%	12.3%	12.4%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「下肢装具」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=24.864$, $df=3$, $p<0.01$ ）で、64歳以下が多かった。

【年代2区分×下肢装具】

64歳以下 65歳以上 合計				値	自由度	漸近有意確率 (両側)		
なし	度数	80	433	513				
	期待度数	97.6	415.4	513.0	Pearson χ^2 乗値	24.864	3	<0.001
	調整済み残差	-3.7	3.7		尤度比	21.541	3	<0.001
長下肢	度数	7	29	36	線型と線型による連関	0.121	1	0.728
	期待度数	6.9	29.1	36.0	有効なケースの数	725		
	調整済み残差	0.1	-0.1					
短下肢	度数	33	53	86				
	期待度数	16.4	69.6	86.0				
	調整済み残差	4.9	-4.9					
不明	度数	18	72	90				
	期待度数	17.1	72.9	90.0				
	調整済み残差	0.2	-0.2					
合計	度数	138	587	725				
	期待度数	138.0	587.0	725.0				

(10) 回復期FIM（入院時、退院時の運動項目、認知項目、合計の値）

- 回復期FIMの運動項目、認知項目、これらの合計の入院時と退院時の平均値に差がみられるかについて t 検定（対応のあるデータ）を実施した結果、全年齢、39歳以下、40歳～64歳、65歳以上のいずれの区分でも 1 %水準の有意差がみられ ($p < 0.01$)、入院時より退院時の平均値が大きく、有意に改善していた。
- いわゆるFIM利得（退院時FIM－入院時FIM）についてみると、全体では平均退院時FIM83.95点で、平均入院時FIM65.66点で、約18.3点のFIM利得がみられた。
- 年区分によるFIM利得の相違は、「39歳以下」ではFIM利得約26.2（114.25－88.08）、「40～64歳」ではFIM効果約19.8（96.89－77.06）、「65歳以上」ではFIM利得約17.8（80.56－62.76）と、高齢ほど低下していた。

【回復期FIM 年齢区分：全体】

全体	FIM	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
運動項目	入院時	47.88	690	25.138	27.229	689	<0.001
	退院時	63.61	690	26.512			
認知項目	入院時	20.67	690	9.239	21.101	689	<0.001
	退院時	24.46	690	8.881			
合計	入院時	65.66	725	34.655	24.868	724	<0.001
	退院時	83.95	725	38.154			

【回復期FIM 年齢区分：39歳以下】

全体	FIM	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
運動項目	入院時	63.25	12	23.199	4.325	11	0.001
	退院時	84.83	12	7.837			
認知項目	入院時	24.83	12	9.350	3.223	11	0.008
	退院時	29.42	12	5.712			
合計	入院時	88.08	12	31.219	4.325	11	0.001
	退院時	114.25	12	12.122			

【回復期FIM 年齢区分：40歳～64歳】

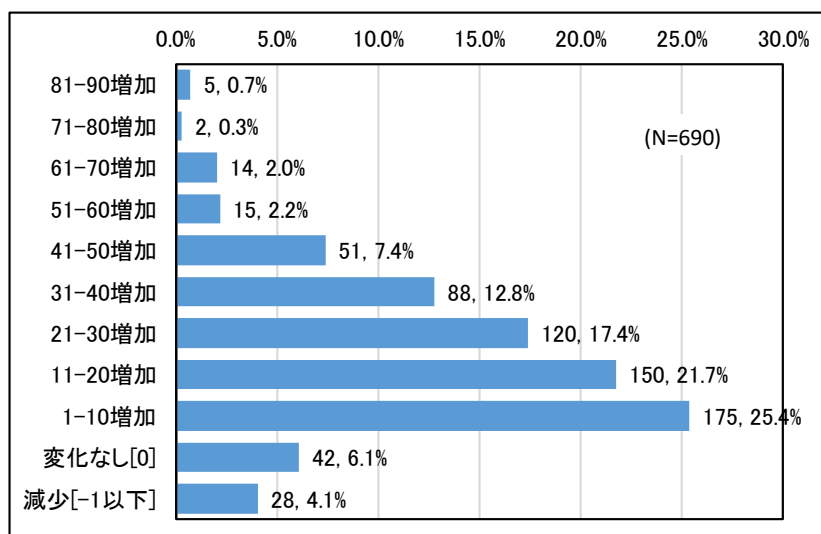
全体	FIM	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
運動項目	入院時	57.24	118	25.368	11.990	117	<0.001
	退院時	74.82	118	21.599			
認知項目	入院時	24.04	118	8.922	11.057	117	<0.001
	退院時	28.64	118	7.517			
合計	入院時	77.06	126	36.891	9.744	125	<0.001
	退院時	96.89	126	37.062			

【回復期FIM 年齢区分：65歳以上】

全体	FIM	平均	N	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
運動項目	入院時	45.58	560	24.592	24.103	559	<0.001
	退院時	60.80	560	26.895			
認知項目	入院時	19.87	560	9.133	17.972	559	<0.001
	退院時	23.47	560	8.919			
合計	入院時	62.76	587	33.594	22.634	586	<0.001
	退院時	80.56	587	37.901			

(11) 回復期FIMの改善度（FIM利得）

- 回復期FIMの運動項目、認知項目の合計の改善度は、増加の割合が89.9%とほとんどが改善している。改善度を10区分でみると、「1～10増加」群が、25.4%と最も多く、次いで、「11～20増加」が21.7%であった。変化なしは6.1%、改善していないが4.1%である。



2-7 回復期情報（MSW）

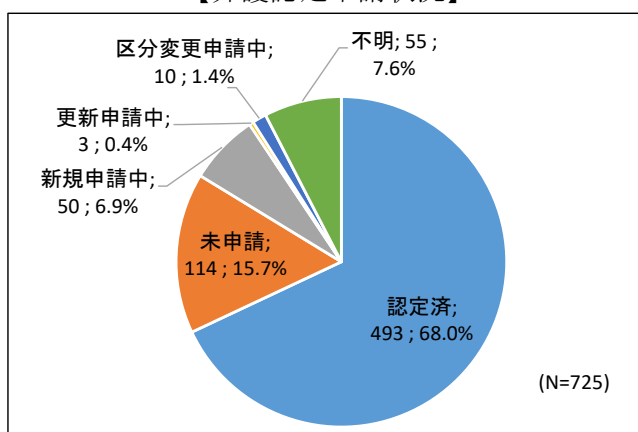
- (1) 介護保険内容（申請状況、認定、福祉用具、訪問看護、訪問診療、訪問リハビリ、通所系、小規模多機能、他）
- (2) 障害認定（身体、視覚、聴覚、言語、肢体、内部、精神、療育）
- (3) 家族状況（同居者、介護者、昼間）
- (4) 住環境内容（住宅状況、屋外階段、屋内階段、家への出入り、廊下、浴室、トイレ、他）
- (5) 継続的なリハ（通院、通所、訪問）
- (6) 在宅主治医
- (7) 転帰カテゴリ
- (8) 職場復帰情報

(1) 介護保険内容（申請状況、認定、福祉用具、訪問看護、訪問診療、訪問リハビリ、通所系、小規模多機能、他）

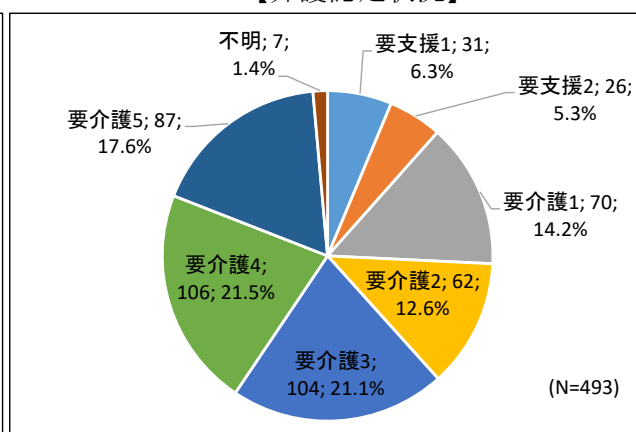
① 介護認定申請状況と認定

- 認定済が68.0%で最も多く、未申請は15.7%、申請中（新規、更新、区分変更の合計）は8.7%である。
- 認定状況（N=493）は、要支援1、2が11.6%で、要介護1が14.2%、要介護2が12.6%、要介護3が21.1%、要介護4が21.5%で最も多く、要介護5が17.6%であった。
- 要支援では、「40～64歳」が17.2%、「65歳以上」が10.7%であった。
- 年齢区分でみると、要介護3以上では、「40～64歳」が51.6%で、「65歳以上」が61.6%であった。特に、要介護5では、「40～64歳」が9.4%であったが、「65歳以上」が18.9%となっていた。

【介護認定申請状況】



【介護認定状況】



【年代3区分×介護認定】

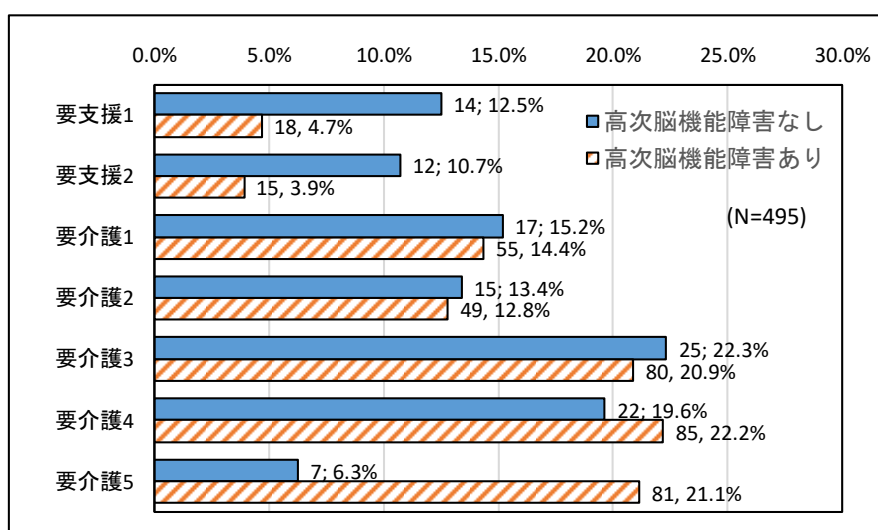
回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
要支援1	0	3	28	31	要支援1	—	4.7%	6.5%	6.3%
要支援2	0	8	18	26	要支援2	—	12.5%	4.2%	5.3%
要介護1	0	8	62	70	要介護1	—	12.5%	14.5%	14.2%
要介護2	0	11	51	62	要介護2	—	17.2%	11.9%	12.6%
要介護3	0	14	90	104	要介護3	—	21.9%	21.0%	21.1%
要介護4	0	13	93	106	要介護4	—	20.3%	21.7%	21.5%
要介護5	0	6	81	87	要介護5	—	9.4%	18.9%	17.6%
不明	0	1	6	7	不明	—	1.6%	1.4%	1.4%
合計	0	64	429	493	合計	—	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「介護認定」について、 χ^2 検定を行ったところ、有意確率5%では年代による有意差はみられなかった。

介護保険 認定

	64歳以下	65歳以上	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
要支援1	度数	3	28	31	Pearson χ^2 乗値	11.911	6
	期待度数	4.0	27.0	31.0			
	調整済み残差	-0.6	0.6		尤度比	10.619	6
要支援2	度数	8	18	26	線型と線型による連関	2.845	1
	期待度数	3.4	22.6	26.0			
	調整済み残差	2.8	-2.8		有効なケースの数	486	
要介護1	度数	8	62	70			
	期待度数	9.1	60.9	70.0			
	調整済み残差	-0.4	0.4				
要介護2	度数	11	51	62			
	期待度数	8.0	54.0	62.0			
	調整済み残差	1.2	-1.2				
要介護3	度数	14	90	104			
	期待度数	13.5	90.5	104.0			
	調整済み残差	0.2	-0.2				
要介護4	度数	13	93	106			
	期待度数	13.7	92.3	106.0			
	調整済み残差	-0.2	0.2				
要介護5	度数	6	81	87			
	期待度数	11.3	75.7	87.0			
	調整済み残差	-1.9	1.9				
合計	度数	63	423	486			
	期待度数	63.0	423.0	486.0			

- 「介護認定」と「高次脳機能障害」の関係をみると、要支援では「高次脳機能障害なし」の割合が大きく、要介護5では「高次脳機能障害あり」の割合が大きくなっている。

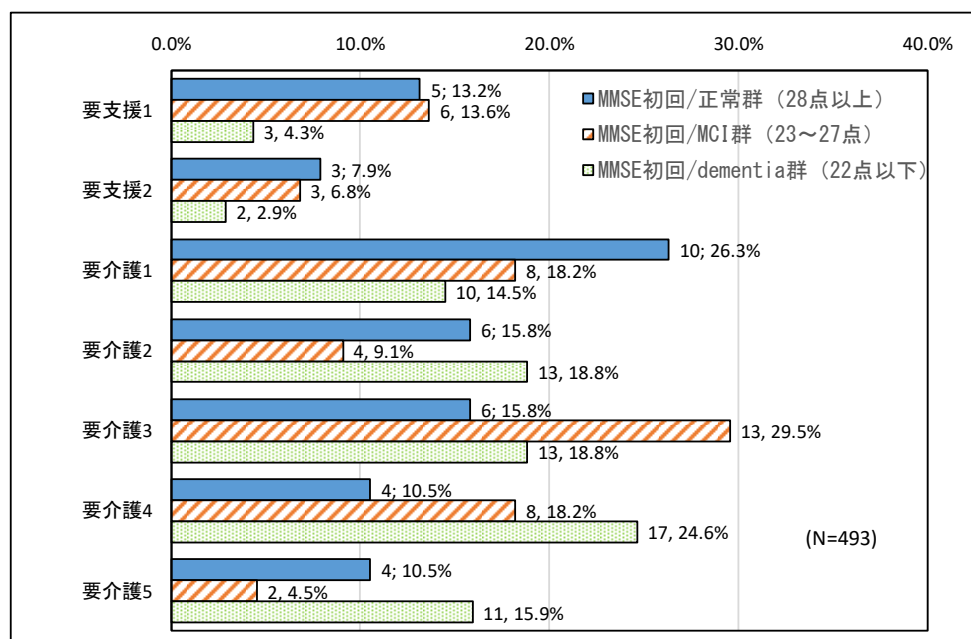


- 次に、高次脳機能障害の「あり・なし」による「介護認定」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意 ($\chi^2=26.727$, $df=6$, $p<0.01$) であった。この結果から、「要支援1・2」では、有意に「高次脳機能障害なし」が多いと解釈でき、「要介護5」では、有意に「高次脳機能障害あり」が多いと解釈できる。

介護保険 認定

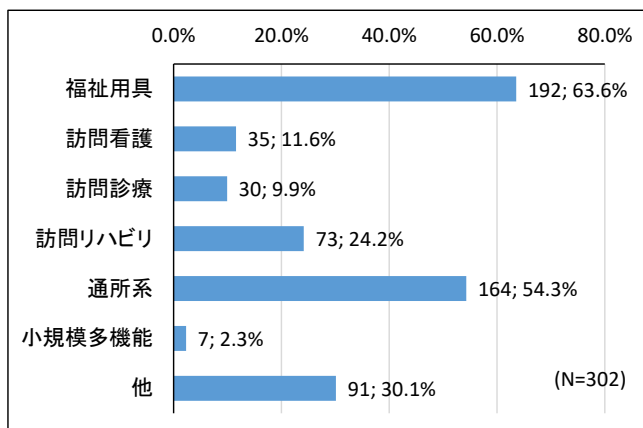
	高次脳機能 障害なし	高次脳機能 障害あり	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
要支援1	度数 14	18	32	Pearson χ^2 乗値	26.727	6	<0.001
	期待度数 7.2	24.8	32.0	尤度比	27.156	6	<0.001
	調整済み残差 3.0	-3.0		線型と線型による連関	20.784	1	<0.001
要支援2	度数 12	15	27	有効なケースの数	495		
	期待度数 6.1	20.9	27.0				
	調整済み残差 2.8	-2.8					
要介護1	度数 17	55	72				
	期待度数 16.3	55.7	72.0				
	調整済み残差 0.2	-0.2					
要介護2	度数 15	49	64				
	期待度数 14.5	49.5	64.0				
	調整済み残差 0.2	-0.2					
要介護3	度数 25	80	105				
	期待度数 23.8	81.2	105.0				
	調整済み残差 0.3	-0.3					
要介護4	度数 22	85	107				
	期待度数 24.2	82.8	107.0				
	調整済み残差 -0.6	0.6					
要介護5	度数 7	81	88				
	期待度数 19.9	68.1	88.0				
	調整済み残差 -3.6	3.6					
合計	度数 112	383	495				
	期待度数 112.0	383.0	495.0				

- 「介護認定」と「初回のMMSE」の関係をみると、MMSEの正常群は、要介護1から重度に進むに従い割合が小さくなっているが、MCI群、dementia群は、要介護の重度化との明確な傾向はみられない。
- 「初回のMMSE」による「介護認定」について、 χ^2 検定を行ったところ両者の関係性の有意差はみられなかった。



② 介護保険サービスの内容

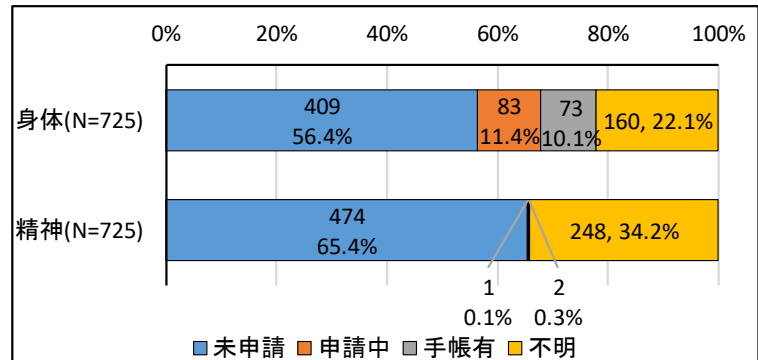
- 介護保険認定者493名の中では、福祉用具192名（38.9%）、通所系サービス73名（14.8%）、訪問リハビリテーション73名（14.8%）訪問看護35名（7.1%）などを利用していた。
- また、利用されたサービスの中では、福祉用具が63.6%で最も多く、次いで、通所系（54.3%）などとなっていた。訪問リハは24.2%に導入されていた。



(2) 障害認定（身体、視覚、聴覚、言語、肢体、内部、精神、療育）

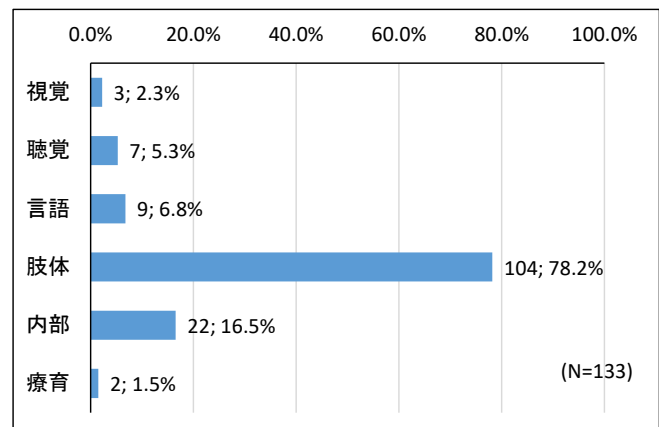
① 身体障害者手帳、精神保健福祉手帳

- 身体では、申請中は11.4%、手帳有は10.1%で、未申請が56.4%であった。
- 精神保健福祉手帳では、申請中が0.1%(1名), 手帳有りが0.3%(2名)で未申請が65.4%を占めていた。



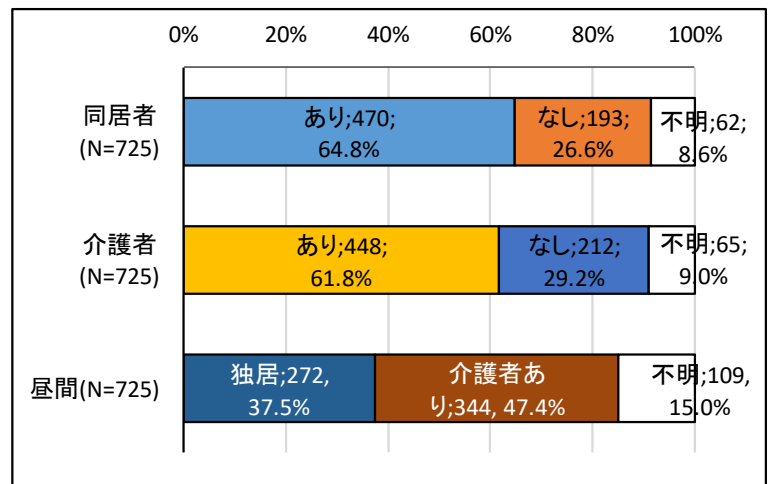
② 視覚、聴覚、言語、肢体、内部、療育

- 肢体が特に多く、78.2%である。その他は、内部が16.5%で、視覚、聴覚、言語、療育はいずれも10%未満であった。
- 失語症が関係する言語は9名、6.8%で、少なかった。



(3) 家族状況（同居者、介護者、昼間）

- 同居者の有無では、ありが64.8%であった。
- 介護者の有無では、ありが61.8%であった。
- しかし昼間では、介護者ありが47.4%となっており、昼間独居も37.5%となっていた。



【年代3区分×同居者】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	11	87	372	470
なし	1	33	159	193
不明	0	6	56	62
合計	12	126	587	725
比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	91.7%	69.0%	63.4%	64.8%
なし	8.3%	26.2%	27.1%	26.6%
不明	0.0%	4.8%	9.5%	8.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×介護者】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	10	78	360	448
なし	2	42	168	212
不明	0	6	59	65
合計	12	126	587	725
比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	83.3%	61.9%	61.3%	61.8%
なし	16.7%	33.3%	28.6%	29.2%
不明	0.0%	4.8%	10.1%	9.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

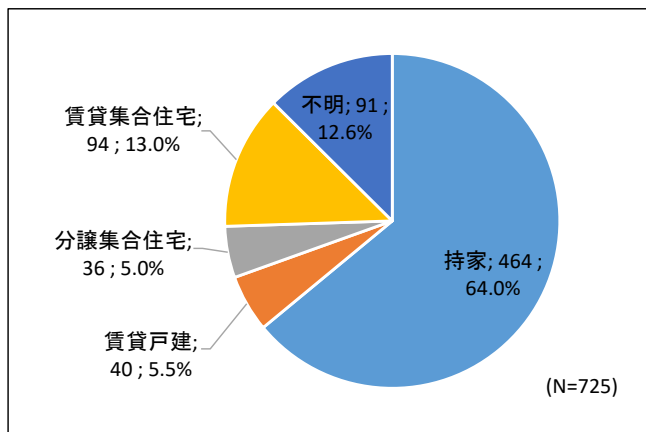
【年代3区分×昼間の状況】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
介護者あり	8	50	286	344
独居	3	58	211	272
不明	1	18	90	109
合計	12	126	587	725
比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
介護者あり	66.7%	39.7%	48.7%	47.4%
独居	25.0%	46.0%	35.9%	37.5%
不明	8.3%	14.3%	15.3%	15.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(4) 住環境内容（住宅状況、屋外階段、屋内階段、家への出入り、廊下、浴室、トイレ、他）

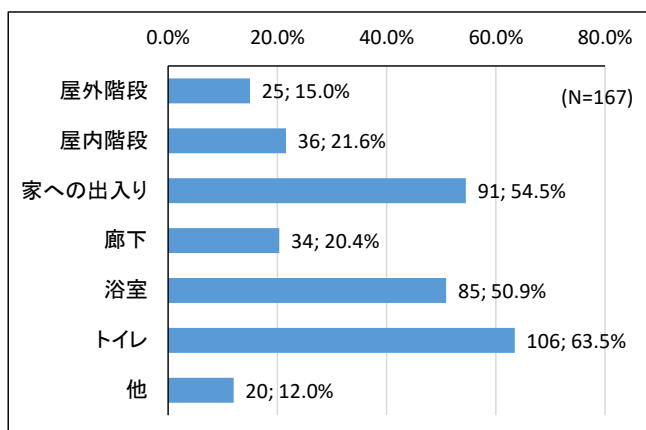
① 住宅の状況

- 持ち家が64.0%で最も多く、次いで、賃貸集合住宅（13.0%）となっていた。



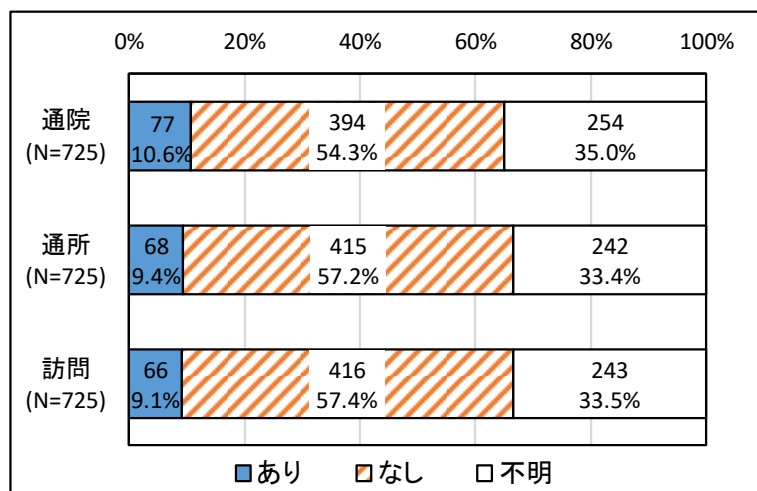
② 住環境の状況

- 住環境では、トイレ106件（63.5%）、家の出入り91件（54.5%）、浴室85件（50.9%）ではバリアフリー等の対応が取られているが、これら以外の箇所では対応は低くなっていた。



(5) 継続的なリハ（通院、通所、訪問）

- 継続的なリハでは、通院による外来リハビリテーションが77名（10.6%）、通所リハビリテーション68名（9.4%）、訪問リハビリテーション66名（9.1）に提供され、合計で211名（29.1%）に退院後もリハビリテーションが継続されていた。（N=725）



【年代3区分×継続的リハ（通院による外来リハビリテーション）】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	3	26	48	77
なし	5	59	330	394
不明	4	41	209	254
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	25.0%	20.6%	8.2%	10.6%
なし	41.7%	46.8%	56.2%	54.3%
不明	33.3%	32.5%	35.6%	35.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代3区分×継続的リハ（通所リハビリテーション）】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	0	12	56	68
なし	8	76	331	415
不明	4	38	200	242
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	0.0%	9.5%	9.5%	9.4%
なし	66.7%	60.3%	56.4%	57.2%
不明	33.3%	30.2%	34.1%	33.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

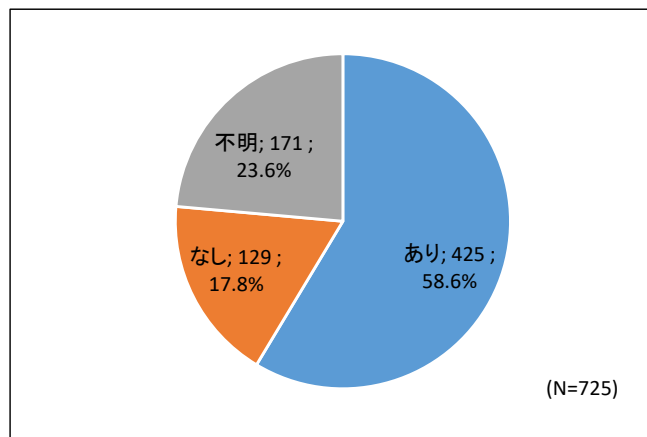
【年代3区分×継続的リハ（訪問リハビリテーション）】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	0	17	49	66
なし	8	70	338	416
不明	4	39	200	243
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	0.0%	13.5%	8.3%	9.1%
なし	66.7%	55.6%	57.6%	57.4%
不明	33.3%	31.0%	34.1%	33.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(6) 在宅主治医

- 在宅主治医は、「あり」が58.6%であるが、「なし」が17.8%あった。
- 「40～64歳」では、「あり」が67.5%であるのに、「65歳以上」では56.7%と少なかった。



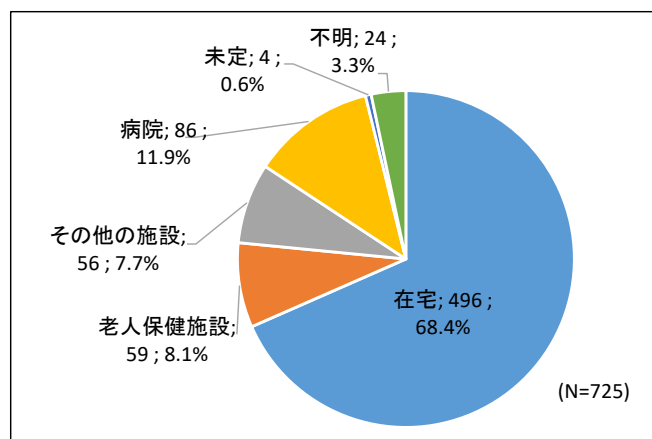
【年代3区分×在宅主治医の有無】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
あり	7	85	333	425	あり	58.3%	67.5%	56.7%	58.6%
なし	1	18	110	129	なし	8.3%	14.3%	18.7%	17.8%
不明	4	23	144	171	不明	33.3%	18.3%	24.5%	23.6%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「在宅主治医の有無」について、 χ^2 検定を行ったところ、有意確率5%では年代による有意差はみられなかった。

(7) 転帰カテゴリ

- 転帰カテゴリでは、在宅が68.4%で最も多く、次いで、病院（11.9%）、老人保健施設（8.1%）、その他の施設（7.7%）となっていた。
- 「40～64歳」では、在宅復帰が84.1%であったが、「65歳以上」では64.4%に低下していた。



【年代3区分×転帰カテゴリ】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計	比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
在宅	12	106	378	496	在宅	100.0%	84.1%	64.4%	68.4%
老人保健施設	0	2	57	59	老人保健施設	0.0%	1.6%	9.7%	8.1%
その他の施設	0	4	52	56	その他の施設	0.0%	3.2%	8.9%	7.7%
病院	0	12	74	86	病院	0.0%	9.5%	12.6%	11.9%
未定	0	1	3	4	未定	0.0%	0.8%	0.5%	0.6%
不明	0	1	23	24	不明	0.0%	0.8%	3.9%	3.3%
合計	12	126	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 次に、年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「転帰カテゴリ」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=26.763$, $df=5$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「64歳以下」では、「転帰カテゴリ」の「在宅」は有意に多く、「65歳以上」では、「老人保健施設」「その他の施設」は有意に多いと解釈できる。

【年代2区分×転帰カテゴリ】

回答数	65歳未満	65歳以上	合計	比率	65歳未満	65歳以上	合計
在宅	118	378	496	在宅	85.5%	64.4%	68.4%
老人保健施設	2	57	59	老人保健施設	1.4%	9.7%	8.1%
その他の施設	4	52	56	その他の施設	2.9%	8.9%	7.7%
病院	12	74	86	病院	8.7%	12.6%	11.9%
未定	1	3	4	未定	0.7%	0.5%	0.6%
不明	1	23	24	不明	0.7%	3.9%	3.3%
合計	138	587	725	合計	100.0%	100.0%	100.0%

転帰カテゴリ

		64歳以下	65歳以上	合計				
		度数	118	378	496	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
在宅	期待度数	94.4	401.6	496.0	Pearson χ^2 乗値	26.763	5	<0.001
	調整済み残差	4.8	-4.8		尤度比	32.876	5	<0.001
	度数	2	57	59	線型と線型による連関	4.336	1	0.037
老人保健施設	期待度数	11.2	47.8	59.0	有効なケースの数	725		
	調整済み残差	-3.2	3.2					
	度数	4	52	56				
その他の施設	期待度数	10.7	45.3	56.0				
	調整済み残差	-2.4	2.4					
	度数	12	74	86				
病院	期待度数	16.4	69.6	86.0				
	調整済み残差	-1.3	1.3					
	度数	1	3	4				
未定	期待度数	0.8	3.2	4.0				
	調整済み残差	0.3	-0.3					
	度数	1	23	24				
不明	期待度数	4.6	19.4	24.0				
	調整済み残差	-1.9	1.9					
	度数	138	587	725				
合計	期待度数	138.0	587.0	725.0				

- 高次脳機能障害の有無では、「なし」では81.0%が在宅復帰していたが、「あり」では64.0%に低下していた。しかし、「40～64歳」では、「あり」でも82.8%が在宅復帰し、大きな差異を認めず、在宅復帰率が高い傾向があった。
- また、「1種類」のみでは、82.2%が在宅復帰しており、「40～64歳」でも「65歳以上」でも差を認めなかった。しかし、2種類になると、「40～64歳」では83.9%と大きな変化を認めないが、「65歳以上」では58.9%と著明に低下していた。
- また、高次脳機能障害の発症数が少ないほど、在宅復帰率が高い傾向にある。

【年代3区分×高次脳機能障害の有無×在宅復帰率】

	39歳以下			40～64歳			65歳以上			合計		
	在宅 復帰	対象数	在宅 復帰率	在宅 復帰	対象数	在宅 復帰率	在宅 復帰	対象数	在宅 復帰率	在宅 復帰	対象数	在宅 復帰率
なし	6	6	100.0%	34	39	87.2%	113	144	78.5%	153	189	81.0%
あり	6	6	100.0%	72	87	82.8%	265	443	59.8%	343	536	64.0%
1種類	1	1	100.0%	21	26	80.8%	89	108	82.4%	111	135	82.2%
2種類	2	2	100.0%	26	31	83.9%	86	146	58.9%	114	179	63.7%
3種類	3	3	100.0%	13	14	92.9%	53	95	55.8%	69	112	61.6%
4種類	0	0	-	8	10	80.0%	24	53	45.3%	32	63	50.8%
5種類	0	0	-	1	1	100.0%	7	19	36.8%	8	20	40.0%
6種類以上	0	0	-	3	5	60.0%	6	22	27.3%	9	27	33.3%
合計	12	12	100.0%	106	126	84.1%	378	587	64.4%	496	725	68.4%

【年代2区分×高次脳機能障害の有無×在宅復帰率】

	64歳以下			65歳以上			合計		
	在宅 復帰	対象数	在宅 復帰率	在宅 復帰	対象数	在宅 復帰率	在宅 復帰	対象数	在宅 復帰率
なし	40	45	88.9%	113	144	78.5%	153	189	81.0%
あり	78	93	83.9%	265	443	59.8%	343	536	64.0%
1種類	22	27	81.5%	89	108	82.4%	111	135	82.2%
2種類	28	33	84.8%	86	146	58.9%	114	179	63.7%
3種類	16	17	94.1%	53	95	55.8%	69	112	61.6%
4種類	8	10	-	24	53	45.3%	32	63	50.8%
5種類	1	1	-	7	19	36.8%	8	20	40.0%
6種類以上	3	5	-	6	22	27.3%	9	27	33.3%
合計	118	138	85.5%	378	587	64.4%	496	725	68.4%

- 「在宅復帰」者について、年代2区分による「高次脳機能障害の有無」の関係をみると、「高次脳機能障害あり」は「65歳以上」の方が多くなっているが、 χ^2 検定を行ったところ両者の関係に有意差はみられなかった。

【年代2区分×高次脳機能障害の有無：在宅復帰の場合】

高次脳機能障害

	64歳以下 65歳以上 合計			値	自由度	漸近有意確率 (両側)
	度数	期待度数	調整済み残差			
なし	40	113	153	Pearson χ^2 乗値	1	0.411
	36.4	116.6	153.0			
	0.8	-0.8				
あり	78	265	343	尤度比	1	0.414
	81.6	261.4	343.0			
	-0.8	0.8				
合計	118	378	496	線型と線型による連関	496	0.411
	118.0	378.0	496.0			

- 「在宅復帰の有無」と「高次脳機能障害の有無」について、全対象データ、年代2区分で χ^2 検定を行ったところ、「全対象データ」と「65歳以上」では、有意確率1%で有意であった。
 （「全対象データ」では、 $\chi^2=22.914$, $df=2$, $p<0.01$ 、「65歳以上」では、 $\chi^2=19.889$, $df=2$, $p<0.01$ ）
 「全対象データ」と「65歳以上」では、「高次脳機能障害なし」が有意に在宅復帰していた。
- 一方、「64歳以下」では、両者の関係に有意差はみられなかった。

【高次脳機能障害の有無×在宅復帰の有無：全年代】

高次脳機能障害									
		在宅	在宅以外	不明	合計		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
なし	度数	153	28	8	189				
	期待度数	129.3	53.4	6.3	189.0	Pearson χ^2 乗値	22.914	2	<0.001
	調整済み残差	4.3	-4.8	0.8	0.0	尤度比	25.024	2	<0.001
あり	度数	343	177	16	536	線型と線型による連関	0.494	1	0.482
	期待度数	366.7	151.6	17.7	536.0	有効なケースの数	725		
	調整済み残差	-4.3	4.8	-0.8	0.0				
合計	度数	496	205	24	725				
	期待度数	496.0	205.0	24.0	725.0				

【高次脳機能障害の有無×在宅復帰の有無：64歳以下】

高次脳機能障害					
		在宅	在宅以外	不明	合計
なし	度数	40	4	1	45
	期待度数	38.5	6.2	0.3	45.0
	調整済み残差	0.8	-1.2	1.4	0.0
	度数	78	15	0	93
あり	期待度数	79.5	12.8	0.7	93.0
	調整済み残差	-0.8	1.2	-1.4	0.0
	度数	118	19	1	138
合計	期待度数	118.0	19.0	1.0	138.0

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson χ^2 乗値	3.311	2	0.191
尤度比	3.577	2	0.167
線型と線型による連関	1.934	1	0.164
有効なケースの数	138		

【高次脳機能障害の有無×在宅復帰の有無：65歳以上】

高次脳機能障害									
		在宅	在宅以外	不明	合計				
なし	度数	113	24	7	144	値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
	期待度数	92.7	45.6	5.6	144.0	Pearson χ^2 乗値	19.889	2	<0.001
	調整済み残差	4.1	-4.5	0.7	0.0	尤度比	21.619	2	<0.001
	線型と線型による連関					0.317	1	0.573	
あり	度数	265	162	16	443	有効なケースの数			
	期待度数	285.3	140.4	17.4	443.0	587			
	調整済み残差	-4.1	4.5	-0.7	0.0				
合計	度数	378	186	23	587				
	期待度数	378.0	186.0	23.0	587.0				

- また、初回MMSEにおいて、年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「在宅復帰」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=14.961$, $df=3$, $p<0.01$ ）であった。この結果から、「MCI群」では「64歳以下」で有意に多く、「dementia群」では「65歳以上」で有意に多いと解釈できる。

【年代2区分×初回MMSE：在宅復帰・在宅復帰率】

	64歳以下			65歳以上			合計		
	在宅復帰	対象数	在宅復帰率	在宅復帰	対象数	在宅復帰率	在宅復帰	対象数	在宅復帰率
正常群（28点以上）	21	23	91.3%	49	53	92.5%	70	76	92.1%
MCI群（23～27点）	8	8	100.0%	51	61	83.6%	59	69	85.5%
dementia群（22点以下）	5	8	62.5%	55	80	68.8%	60	88	68.2%
不明	84	99	84.8%	223	393	56.7%	307	492	62.4%
合計	118	138	85.5%	378	587	64.4%	496	725	68.4%

MMSE初回

64歳以下 65歳以上 合計				値	自由度	漸近有意確率 (両側)	
正常群	度数	21	49	70			
(28点以上)	期待度数	16.7	53.3	70.0	Pearson χ^2 乗値	14.961	3
	調整済み残差	1.3	-1.3		尤度比	17.180	3
MCI群	度数	8	51	59	線型と線型による連関	5.505	1
(23～27点)	期待度数	14.0	45.0	59.0	有効なケースの数	496	
	調整済み残差	-2.0	2.0				
dementia群	度数	5	55	60			
(22点以下)	期待度数	14.3	45.7	60.0			
	調整済み残差	-3.0	3.0				
不明	度数	84	223	307			
	期待度数	73.0	234.0	307.0			
	調整済み残差	2.4	-2.4				
合計	度数	118	378	496			
	期待度数	118.0	378.0	496.0			

- 「転帰カテゴリ」の「在宅」を対象に、「高次脳機能障害の種類」による影響を確認するため、「在宅」の有無を従属変数、「高次脳機能障害の種類」を独立変数として重回帰分析を行ったところ重回帰式については、有意確率5%で有意（ $F=1.968$, $df=9$, $p<0.05$ ）であった。この結果から「在宅」に対する「高次脳機能障害の種類」の影響をみると、「注意障害（係数0.108）」「記憶障害（係数0.045）」「未確定認知障害（係数0.030）」「失行（係数0.029）」「情動障害（係数0.027）」「失語（係数0.023）」（以上は、係数の大きい順）が、「在宅」の傾向に影響すると解釈できる。ただし、これは大まかな傾向であり、個々の種類に対して有意性が確認されていない。
- 有意確率5%で有意である種類についてみると、「注意障害（係数0.108）」（ $t=2.446$, $p<0.05$ ）は「在宅」の傾向に影響し、「前頭葉障害（係数-0.084）」（ $t=-2.013$, $p<0.05$ ）は、「在宅以外」の傾向に影響することが有意に示された。

【「在宅」と「高次脳機能障害の種類」による重回帰分析結果】

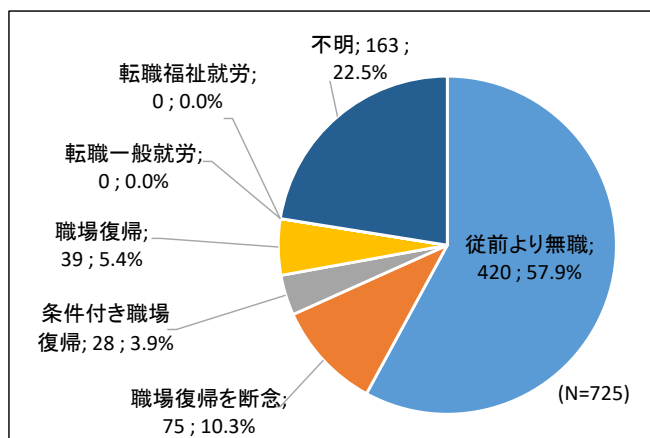
R	R2 乗	調整済み R2 乗	標準偏差推定 値の誤差
0.159	0.025	0.012	14.601

	平方和（分散 成分）	自由度	平均平方	F 値	有意確率
回帰	3774.944	9	419.438	1.968	.040
残差（分散分析）	145598.964	683	213.176		
合計（ピボットテーブル）	149373.908	692			

	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準偏差誤差	ベータ		
(定数)	1.106	0.955		1.158	0.247
高次脳機能障害 失語	0.772	1.363	0.023	0.567	0.571
高次脳機能障害 失行	1.425	2.151	0.029	0.663	0.508
高次脳機能障害 失認	-3.406	2.294	-0.063	-1.484	0.138
高次脳機能障害 半側空間無視	-0.183	1.554	-0.005	-0.118	0.906
高次脳機能障害 前頭葉障害	-3.990	1.982	-0.084	-2.013	0.045
高次脳機能障害 未確定認知障害	1.604	2.086	0.030	0.769	0.442
高次脳機能障害 注意障害	3.257	1.332	0.108	2.446	0.015
高次脳機能障害 記憶障害	1.340	1.276	0.045	1.050	0.294
高次脳機能障害 情動障害	1.457	2.197	0.027	0.663	0.507

(8) 職場復帰情報

- ・ 病前より無職が57.9%を占めていた。
- ・ 職場復帰は9.3%（条件付き職場復帰3.9%、職場復帰5.4%の合計）であった。
- ・ 職場復帰を断念した割合は、10.3%であった。
- ・ 年齢区分では、病前より無職が「40～64歳」では28.6%、「65歳以上」では65.2%あった。
- ・ 「40～64歳」では、職場復帰が15.1%（19名）で、条件付き職場復帰が12.7%（16名）で合計すると27.8%であったが、職場復帰断念が27.8%（35名）であった。
- ・ 「65歳以上」では、職場復帰が2.9%（17名）で、条件付き職場復帰が1.7%（10名）で合計すると4.6%であったが、職場復帰断念が6.6%（39名）であった。



【年代3区分×職場復帰情報】

回答数	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
従前より無職	1	36	383	420
職場復帰を断念	1	35	39	75
条件付き職場復帰	2	16	10	28
職場復帰	3	19	17	39
転職一般就労	0	0	0	0
転職福祉就労	0	0	0	0
不明	5	20	138	163
合計	12	126	587	725

比率	39歳以下	40～64歳	65歳以上	合計
従前より無職	8.3%	28.6%	65.2%	57.9%
職場復帰を断念	8.3%	27.8%	6.6%	10.3%
条件付き職場復帰	16.7%	12.7%	1.7%	3.9%
職場復帰	25.0%	15.1%	2.9%	5.4%
転職一般就労	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
転職福祉就労	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
不明	41.7%	15.9%	23.5%	22.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【年代2区分×職場復帰情報】

回答数	65歳未満	65歳以上	合計
従前より無職	37	383	420
職場復帰を断念	36	39	75
条件付き職場復帰	18	10	28
職場復帰	22	17	39
転職一般就労	0	0	0
転職福祉就労	0	0	0
不明	25	138	163
合計	138	587	725

比率	65歳未満	65歳以上	合計
従前より無職	26.8%	65.2%	57.9%
職場復帰を断念	26.1%	6.6%	10.3%
条件付き職場復帰	13.0%	1.7%	3.9%
職場復帰	15.9%	2.9%	5.4%
転職一般就労	0.0%	0.0%	0.0%
転職福祉就労	0.0%	0.0%	0.0%
不明	18.1%	23.5%	22.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

- 年代2区分（64歳以下、65歳以上）による「職場復帰情報」について、 χ^2 検定を行ったところ有意確率1%で有意（ $\chi^2=14.720$, $df=3$, $p<0.01$ ）であった。この結果から「職場復帰を断念」「条件付き職場復帰」「職場復帰」は「64歳以下」で有意であると解釈できる。

職場復帰情報

64歳以下				65歳以上	合計			
						値	自由度	漸近有意確率 (両側)
従前より 無職	度数	37	383	420				
	期待度数	79.9	340.1	420.0	Pearson χ^2 乗値	14.720	3	0.002
	調整済み残差	-8.2	8.2		尤度比	15.380	3	0.002
職場復帰 を断念	度数	36	39	75	線型と線型による連関	1.097	1	0.295
	期待度数	14.3	60.7	75.0	有効なケースの数	725		
	調整済み残差	6.7	-6.7					
条件付き 職場復帰	度数	18	10	28				
	期待度数	5.3	22.7	28.0				
	調整済み残差	6.2	-6.2					
職場復帰	度数	22	17	39				
	期待度数	7.4	31.6	39.0				
	調整済み残差	6.1	-6.1					
不明	度数	25	138	163				
	期待度数	31.0	132.0	163.0				
	調整済み残差	-1.4	1.4					
合計	度数	138	587	725				
	期待度数	138.0	587.0	725.0				

- 「職場復帰情報」の「職場復帰を断念」「条件付き職場復帰」「職場復帰」のそれぞれについて、「高次脳機能障害の有無」との χ^2 検定を行ったところ、「職場復帰」では有意確率1%で有意 ($\chi^2=33.473, df=1, p<0.01$) であった。
- 一方、「職場復帰を断念」「条件付き職場復帰」では、両者の関係に有意差はみられなかった。

【高次脳機能障害の有無×職場復帰を断念の有無】

高次脳機能障害

				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
職場復帰を断念 職場復帰を断念 以外 合計						
なし	度数	15	127	142	Pearson χ^2 乗値	1.271
	期待度数	19.0	123.0	142.0	尤度比	1.328
	調整済み残差	-1.1	1.1		線型と線型による連関	1.269
あり	度数	60	360	420	有効なケースの数	562
	期待度数	56.0	364.0	420.0		
	調整済み残差	1.1	-1.1			
合計	度数	75	487	562		
	期待度数	75.0	487.0	562.0		

【高次脳機能障害の有無×条件付職場復帰の有無】

高次脳機能障害

				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
条件付職場復帰 条件付職場復帰 以外 合計						
なし	度数	8	134	142	Pearson χ^2 乗値	0.170
	期待度数	7.1	134.9	142.0	尤度比	0.166
	調整済み残差	0.4	-0.4		線型と線型による連関	0.170
あり	度数	20	400	420	有効なケースの数	562
	期待度数	20.9	399.1	420.0		
	調整済み残差	-0.4	0.4			
合計	度数	28	534	562		
	期待度数	28.0	534.0	562.0		

【高次脳機能障害の有無×職場復帰の有無】

高次脳機能障害

				値	自由度	漸近有意確率 (両側)
職場復帰 職場復帰以外 合計						
なし	度数	25	117	142	Pearson χ^2 乗値	33.473
	期待度数	9.9	132.1	142.0	尤度比	28.404
	調整済み残差	5.8	-5.8		線型と線型による連関	33.414
あり	度数	14	406	420	有効なケースの数	562
	期待度数	29.1	390.9	420.0		
	調整済み残差	-5.8	5.8			
合計	度数	39	523	562		
	期待度数	39.0	523.0	562.0		

第3章 調査結果のまとめ

2-1 基本情報および急性期情報のまとめ

2014年7月1日から2015年6月30日の1年間の運用実績では、計画管理病院18施設への脳卒中入院患者数は、4,214人で在宅復帰率は61.2%であり、地域連携パスの利用者数は801人、利用率19.0%で、その在宅復帰率48.1%となっている。このデータは、急性期の計画管理病院に、連携病院である回復期リハ病院から報告されたものを集計した内容で、必ずしも、同期間に回復期リハ病院を退院した患者数と一致しない可能性があるが、今回の回収数725名は、801名に対して90.5%に相当する比率であった。

そして、統計学的検討は、特に明記しないかぎり、 χ^2 検定を用いて比較検討し、有意差を検定した。

725名の内訳は、平均年齢73.1±12.3歳で、男性が387名で平均年齢69.3±12.8歳で、女性が338名で平均年齢77.3±10.3歳であった。年齢区分では65歳以上の高齢者が81.0%を占め、「40～64歳」で17.4%、39歳以下で1.7%であった。年代区分では、「64歳以下」では男性が有意に多く、「65歳以上」では女性が有意に多かった。

病名では、725名のうち脳梗塞が61.4%で最も多く、次いで、脳出血が32.4%で、くも膜下出血が6.1%であった。年代2区分（64歳以下、65歳以上）の比較では、 χ^2 検定で有意に脳梗塞は65歳以上で多く、脳出血は64歳以下で多かった。

脳梗塞の内訳は、アテローム血栓性脳梗塞が31.7%で最も多く、次いで、心原性脳塞栓（27.6%）、ラクナ梗塞（18.7%）となっていた。また、年代2区分の比較では、 χ^2 検定で有意に、心原性脳梗塞は65歳以上で多く発症していた。

病変の部位については、血管系について回答があったのは306件で、この中では、中大脳動脈が64.1%と他に比べて特になくなっていった。「39歳以下」の若年者では、症例数が少ないが椎骨脳底動脈系の病変の比率が多かった。また、「40～64歳」の壮年者でも「65歳以上」に比べると椎骨脳底動脈系の比率が多かった。また、脳部位について回答があったのは431件で、この中では、被殻が24.4%で最も多く、次いで、前頭葉（21.6%）、頭頂葉、視床（各18.8%）、中脳・橋・延髄の脳幹（16.8%）などとなっていた。年代2区分の比較において、「64歳以下」では被核と延髄で有意に多く、「65歳以上」では前頭葉、頭頂葉、側頭葉、橋で有意に多かった。

急性期病院におけるリハビリ情報からみると、全体で入院時（リハ開始時）のFIM43.5±25.9より退院時FIM70.3±34.6に増加し、t検定（対応のあるデータ）で有意に改善していた。また、40～64歳、65歳以上でも運動項目、認知項目、合計で有意に改善していた。

FIM運動項目では、入院時25.4±18.2から退院時48.0±26.6に増加し、t検定（対応のあるデータ）で有意に改善し、FIM認知項目でも入院時18.0±10.9から退院時22.3±10.5に有意に改善していた。

2-2 回復期情報のまとめ

急性期mRS (modified Rankin Scale) と回復期mRSの比較では、回復期退院時には、重い障害 (3: 中等度の障害、4: 中等度から重度の障害、5: 重度の障害) の割合は75.3%から58.6%に減少し、軽い障害 (1: 症候はあっても明らかな障害はない、2: 軽度の障害) が24.6%から41.5%に増加していた。年代2区分 (64歳以下、65歳以上) では、急性期mRSの各重症度の割合に、 χ^2 検定で有意差を認めなかった。しかし、回復期mRSの各重症度の割合に、mRS 2は64歳以下に有意に多く、mRS 5は65歳以上に有意に多かった。

経過中の合併症では、全体の725名のうち134名 (18.5%) に認め、「39歳以下」にはみられなかったが、「40～64歳」では126名のうち18名 (14.3%)、「65歳以上」では587名のうち116名 (19.8%) に認めた。経過中の合併症の134名の内訳では、肺炎34名、尿路感染33名、DVT9名、痙攣発作8名、消化管出血8名で、その他が59名となっていた。年代2区分による比較では、肺炎と尿路感染で65歳以上で、 χ^2 検定にて有意に多く発症していた。

全体の725名のうち、333名に何らかのリスク因子をもっていたが、脳卒中既往が111名 (15.3%) と最も多く、次いで糖尿病102名 (14.1%)、心房細動90名 (12.4%)、認知症59名 (8.1%) などであった。そして、「39歳以下」では症例数が少ないが腎不全1名、糖尿病1名で、「40～64歳」では糖尿病15名、脳卒中既往10名、心房細動6名などで、「65歳以上」では脳卒中既往101名、糖尿病86名、心房細動84名などとなっていた。そして、悪性腫瘍が28名で全体の725名の3.9%にみられ、「40～64歳」では126名のうち5名 (4.0%)、「65歳以上」では587名のうち23名 (3.9%) にみられていた。また、年代2区分による比較では、骨折の既往、認知症、心房細動、脳卒中既往で、「65歳以上」で有意に多くみられていた。

そして、栄養管理については、経口自立が75.0%を占め、経口介助が11.4%であった。また、胃瘻 (2.9%) と経鼻胃管 (3.4%) がみられていた。経口自立について、「40～64歳」では84.9%であったが、「65歳以上」では72.4%と少なかった。年代2区分 (64歳以下、65歳以上) による比較では、 χ^2 検定にて、経口自立が64歳以下で有意に多く、経口介助が65歳以上で有意に多かった。

排便については、自立が57.4%で半数以上を占めていた。次いで、おむつ (17.0%)、トイレ誘導 (15.7%) 等であった。排便の自立については、「40～64歳」では73.8%であったが、「65歳以上」では53.5%と少なかった。そして、自立は、64歳以下で有意に多く、おむつは65歳以上で有意に多かった。

排尿については、自立が55.7%で半数以上を占めていた。次いで、おむつ (16.1%)、トイレ誘導 (14.3%) 等であった。排尿自立について、「40～64歳」では71.4%で、「65歳以上」では52.0%と少なかった。そして、自立は64歳以下で有意に多く、おむつは65歳以上で有意に多かったが、それ以外は有意差がなかった。

清潔については、シャワー浴28.3%、浴槽入浴24.6%、自立25.4%、機械浴14.6%等であった。そして、自立は64歳以下で有意に多く、機械浴は65歳以上で有意に多かったが、それ例外は有意差がなかった。

次に、行動障害について、行動障害なしが74.9%を占めていた。行動障害ありは、17.8%であった。そして、行動障害ありは、65歳以上で有意に多く、行動障害なしは64歳以下で有意に多かった。

行動障害ありについては、「40～64歳」では8.7%であったが、「65歳以上」では、20.1%に認めた。行動障害の種類は、全体の725名の内、転倒転落が73名 (10.1%)、不穏33名 (4.6%)、興奮24名 (3.3%)、不眠23名 (3.2%)、昼夜逆転21名 (2.9%) などとなっていた。そして、幻覚妄想4名、妄想4名、精神症状12名を合計すると、2.8%にみられていた。そして、不穏と不眠は、65歳以上で有意に多く、それ以外は有意差を認めなかった。

看護必要度については、看護必要度「0」の比率が、入院時9.1%から退院時42.7%に大きく改善

していた。そして、年3区分（39歳以下、40～64歳、65歳以上）での入院時と退院時の比較では、いずれの年代も、t検定（対応のあるデータ）にて有意に改善していた。

障害高齢者の日常生活自立度では、自立が17.1%と多く、次いで、A 1（16.7%）、B 1（14.6%）、B 2（14.6%）となっていた。また、生活自立が「寝たきり」とされるランク B（29.2%）とランク C（12.0）の合計では42.2%となった。生活自立が「寝たきり」のランク Bとランク Cの合計について、「40～74歳」が25.4%で、「65歳以上」が45.4%と多かった。そして、自立は、64歳以下で有意に多く、「B 2, C 1, C 2」は65歳以上で有意に多かった。

認知症高齢者の日常生活自立度では、自立が33.9%と多く、次いで、I（11.0%）、II a（10.5%）、II b（10.3%）、III a（9.7%）となっている。自立については、「40～64歳」が56.3%で、「65歳以上」では28.3%と少なかった。見守りもしくは介護が必要とされるII～Mの症例は、45.7%であった。「40～64歳」では23.1%であったが、「65歳以上」では51.1%と多かった。そして、年代2区分では、 χ^2 検定にて、「自立」は64歳以下で有意に多く、「II a, II b, III b」は65歳以上で有意に多かった。

リハビリ情報からは、Brunnstrom Stage上肢、手指、下肢ともほぼ同様の傾向にあり、Vが27.7%～29.5%、VIが27.6%～28.0と多い。Brunnstrom stage I～IIの重度例は、上肢で17.3%、手指で19.3%、下肢で11.0%であった。Brunnstrom stage IIIの中等度例は、上肢で8.7%、手指で6.2%、下肢で10.3%であった。

健側MMTは、上肢、手指、下肢ともにMMT 5が39.4%～44.6%で最も多く、次いで、MMT 4が36.7%～39.6%である。健側について、MMT 0～3については、上肢で9.9%、手指で9.9%、下肢で12.3%で、廃用症候群の関与が強く疑われる。また、健側MMT 4については、上肢36.7%、手指37.0%。下肢39.6%で廃用症候群の関与が否定できない。そして、年代2区分では、健側MMTの上肢では有意に、「3, 4」は「65歳以上」で多く、「5」は「64歳以下」で多かった。健側MMTの手指では、有意に、「4」は「65歳以上」で有意に多く、「5」は「64歳以下」で多かった。健側MMTの下肢では、有意に、「3, 4」は「65歳以上」で多く、「5」は「64歳以上」で多かった。「65歳以上」では、廃用症候群の関与が有意に強いと思われた。

片麻痺以外の障害について、協調運動障害が「あり」が30.5%で、「65歳以上」では30.8%と多かった。嚥下障害が「あり」が22.9%で、「65歳以上」で25.6%と多かった。構音障害が「あり」が34.9%で、「65歳以上」で36.6%と多かった。感覚障害が「あり」が47.6%で、「40～64歳」で55.6%と多かった。そして、年代2区分では、有意に、「嚥下障害あり」が65歳以上で多く、「感覚障害あり」が64歳以下で多かった。

下肢装具については、「なし」が70.8%を占めているが、短下肢装具が11.9%、長下肢装具が5.0%の割合でみられた。短下肢装具は、「40～64歳」で22.2%に使用されていたが、「65歳以上」では9.0%であった。長下肢装具は、「40～64歳」で5.6%に使用され、「65歳以上」で4.9%に使用されていた。「64歳以下」で有意に下肢装具を使用していた。そして、下肢のBrunnstrom stage I～IIの重度障害が80名（11.0%）いるが、長下肢装具の使用者は36名（5.0%）であった。下肢のBrunnstrom stage IIIの中等度障害が103名（14.2%）いるが、短下肢装具の使用者は86名（11.6%）であった。

そして、回復期におけるリハ効果について、回復期FIMの運動項目、認知項目、これらの合計の入院時と退院時の平均値に差がみられるかについてt検定（対応のあるデータ）を実施した結果、全年齢、39歳以下、40歳～64歳、65歳以上のいずれの区分でも1%水準の有意差がみられ（ $p<0.01$ ）、入院時より退院時の平均値が大きく、有意に改善していた。

いわゆるFIM利得（退院時FIM－入院時FIM）についてみると、全体では平均退院時FIM83.95点で、平均入院時FIM65.66点で、約18.3点のFIM利得がみられた。年区分によるFIM利得の相違は、「39歳以下」ではFIM利得約26.2（114.25－88.08）、「40～64歳」ではFIM効果約19.8（96.89－77.06）、

「65歳以上」ではFIM利得約17.8 (80.56-62.76) と、高齢ほど減少していた。

2-3 回復期情報の高次脳機能障害について

高次脳機能障害は、回答数725名中、「あり」は536名で、73.9%であった。高次脳機能障害「あり」の内訳を発症数でみると、2種類が33.4%で最も多く、次いで、1種類 (25.2%)、3種類 (20.9%)、4種類 (11.8%) となっていた。また、5種類以上を合併していた症例は、8.8%であった。

年齢区分では、症例数が少ないが「39歳以下」では3種類が50%と多く、「40～64歳」では2種類が35.6%と多く、「65歳以上」では2種類が33.0%と多かった。5種類以上を合併している症例は、「40～64歳」では6.8%で、「65歳以上」では9.3%と多かった。年代2区分では、高次脳機能障害「あり」が有意とは言えないが、65歳以上で多い傾向 ($p=0.052$) が見られた。また、高次脳機能障害の合併数では、t検定 (対応のないデータ) にて65歳以上が有意に多かった。

高次脳機能障害の内容について、全体の725名のうちでは、注意障害を422名 (58.2%)、記憶障害が308名 (42.3%)、失語183名 (25.2%)、半側空間無視132名 (18.2%) に認めた。高次脳機能障害の内容では、注意障害が78.7%で最も多く、次いで、記憶障害 (57.5%) となって、これらの割合が特に高かった。その他では、失語 (34.1%)、半側空間無視 (24.6%) などとなっていた。そして、各年代区分で、同じ順位であり、それぞれの内容を比較したが有意差は認めなかった。

失語症例が183名で、右片麻痺 (335名) に伴っていたとすると、54.6%に認めていた。また、半側視空間無視が132名で、左片麻痺 (239名) に伴っていたとすると、55.2%に認めることになった。

HDS-Rについて、初回、2回目とも実施されたデータを対象とした場合、対象数が少なくなる場合があるため、初回と2回目のいずれかで検査が実施されたデータを対象とした検定をおこなった。このため対象のデータは、初回と2回目では対応がない (独立した) として扱っている。HDS-Rの初回と2回目の平均値に差がみられるかについてt検定 (対応のないデータ) を実施した結果、日常生活自立度 (認知症高齢者) の正常群では、1%水準の有意差がみられ ($p<0.01$)、初回より2回目の平均値が大きく、改善していた。また、区分I群では初回と2回目との差は、 $P=0.050$ で有意な傾向を認めた。しかし、全体、区分II～Mのいずれ群も有意な結果は得られなかった。

対象数は少なくなったが、初回、2回目ともに検査が実施されたHDS-Rの初回と2回目の平均値に差がみられるかについてt検定 (対応のあるデータ) を実施した結果、認知症高齢者の日常生活自立度の全体、正常、区分I、区分II～Mのいずれの区分でも、1%水準の有意差がみられ ($p<0.01$)、初回より2回目の平均値が大きく有意に改善していた。

MMSEにつて、初回、2回目とも検査が実施されたデータを対象とした場合、対象数が少なくなる場合があるため、初回と2回目のいずれかで検査が実施されたデータを対象とした検定をおこなった。このため対象のデータは、初回と2回目では対応がない (独立した) として扱っている。初回のMMSE値の正常群 (28点以上)、MCI群 (23～27点)、dementia群 (22点以下) に3区分し、MMSEの初回と2回目の平均値に差がみられるかについてt検定 (対応のないデータ) を実施した結果、MCI群 (23～27点) では1%水準で有意差がみられた ($p<0.01$)。一方、全体、正常群 (28点以上)、dementia群 (22点以下) では、有意差はみられなかった。

初回、2回目ともMMSEが実施された群について、初回のMMSE値の正常群 (28点以上)、MCI群 (23～27点)、dementia群 (22点以下) で、MMSEの初回と2回目の平均値に差がみられるかについてt検定 (対応のあるデータ) を実施した結果、MCI群 (23～27点) では1%水準で有意差がみられ ($p<0.01$)、dementia群 (22点以下) においても1%水準で有意差がみられ、それぞれ初回より2回目の平均値が大きく、改善していた。一方、正常群 (28点以上) では、有意差はみられないためMMSEの初回と2回目の平均値に差があるとは言えなかった。

また、認知症高齢者の日常生活自立度の区分によるMMSEの初回と2回目の平均値に差がみられるか

について t 検定（対応のあるデータ）を実施した結果、日常生活自立度（認知症高齢者）の全体と区分Ⅰでは、5%水準の有意差がみられ（ $p < 0.05$ ）、初回より2回目の平均値が有意に大きく、改善していた。

一方、正常、区分Ⅱ～Ⅳでは、有意差はみられないためMMSEの初回と2回目の平均値に差があるとは言えなかった。

2-4 介護保険認定や在宅復帰などの転帰

介護保険の認定状況について、認定済が68.0%で最も多く、未申請は15.7%、申請中（新規、更新、区分変更の合計）は8.7%で、76.7%となった。認定済の介護保険認定状況（N=493）は、要支援1・2が11.6%で、要介護1が14.2%、要介護2が12.6%、要介護3が21.1%、要介護4が21.5%で最も多く、要介護5が17.6%であった。（要介護支援では、「40～64歳」が17.2%、「65歳以上」が10.7%であった。

年齢区分でみると、要介護3以上では、「40～64歳」が51.6%で、「65歳以上」が61.6%であった。特に、要介護5では、「40～64歳」が9.4%であったが、「65歳以上」が18.9%となっていた。そして、年代2区分では、介護保険認定について年代による有意差を認めなかった。

高次脳機能障害の「あり」、「なし」による介護認定については、「要支援1・2」では「なし」が有意に多く、「要介護5」では「あり」が有意に多かった。

介護保険認定者493名の中では、福祉用具192名（38.9%）、通所系サービス73名（14.8%）、訪問リハビリテーション73名（14.8%）訪問看護35名（7.1%）などを利用していた。

身体障害者福祉手帳では、申請中は11.4%、手帳有は10.1%で、未申請が56.4%であった。精神保健福祉手帳では、申請中が0.1%（1名）、手帳有りが0.3%（2名）で未申請が65.4%を占めていた。身体障害者手帳では、肢体が特に多く、78.2%である。その他は、内部が16.5%で、視覚、聴覚、言語、療育はいずれも10%未満であった。失語症が関係する言語は9名、6.9%で少なかった。

家族状況では、同居者の有無では、「あり」が64.8%であった。介護者の有無では、「あり」が61.8%であった。しかし昼間では、介護者「あり」が47.4%となって、昼間独居も37.5%となっていた。

住宅状況では、持ち家が64.0%で最も多く、次いで、賃貸集合住宅（13.0%）となっていた。住環境では、トイレ106件（63.5%）、家の出入り91件（54.5%）、浴室85件（50.9%）ではバリアフリー等の対応が取られているが、これら以外の箇所では対応は低くなっていた。

次に、継続的なリハでは、通院による外来リハビリテーションが77名（10.6%）、通所リハビリテーション68名（9.4%）、訪問リハビリテーション66名（9.1）に提供され、合計で211名（29.1%）に退院後もリハビリテーションが継続されていた。（N=729）

在宅主治医は、「あり」が58.6%であるが、「なし」が17.8%あった。「40～64歳」では、「あり」が67.5%であるのに、「65歳以上」では56.7%と少なかった。

転帰では、在宅が68.4%で最も多く、次いで、病院（11.9%）、老人保健施設（8.1%）、その他の施設（7.7%）となっていた。「40～64歳」では、在宅復帰が84.1%であったが、「65歳以上」では64.4%に低下していた。そして、64歳以下（40～64歳）では、在宅が有意に多く、65歳以上では、老人保健施設やその他の施設では有意に多かった。

高次脳機能障害の有無による転帰では、「なし」では81.0%が在宅復帰していたが、「あり」では64.0%に低下していた。しかし、「40～64歳」では、「あり」でも82.8%が在宅復帰し、大きな差異を認めなかった。そして、在宅復帰者率について、年代2区分と高次脳機能障害の有無との関係による比較では、年代区分による有意差を認めなかった。

また、「1種類」のみでは、82.2%が在宅復帰しており、「40～64歳」でも「65歳以上」でも差を認めなかった。しかし、2種類になると、「40～64歳」では83.9%と大きな変化を認めないが、「65歳以上」では58.9%と著明に低下していた。そして、高次脳機能障害の発症数が少ないほど、在宅復帰率が高いように思われた。

また、「転帰カテゴリ」の「在宅」を対象に、高次脳機能障害の種類による影響をみるために、重回帰分析を行ったところ、「前頭葉障害」が「在宅以外」に有意に関与していた。

職場復帰や就労の状況については、病前より無職が57.9%を占めていた。職場復帰は9.3%（条件付き職場復帰3.9%、職場復帰5.4%の合計）であった。職場復帰を断念した割合は、10.3%であった。

年代2区分みると、「64歳以下」では病前より無職が26.8%、職場復帰が15.9%（22名）で、条件付き職場復帰が13.0%（18名）で合計すると28.9%であったが、職場復帰断念が26.1%（36名）であった。「65歳以上」では、病前より無職が65.2%あり、職場復帰が2.9%（17名）で、条件付き職場復帰が1.7%（10名）で合計すると4.6%であったが、職場復帰断念が6.6%（39名）であった。「65歳以上」では、職場復帰率が低下していた。そして、年代2区分では、64歳以下では、職場復帰と条件付き職場復帰も有意に多かったが、また、職場復帰断念も有意に多かった。

参考資料

1. 調査依頼書

病院長 さま

<脳卒中地域連携パス調査へのご協力のお願い>

平成 28 年度厚生労働省労災疾病臨床研究事業費補助金
「高次脳機能障害の診断・リハビリ・社会復帰促進パスの策定」分担研究者
武 澤 信 夫
(京都府リハビリテーション支援センター・京都府立医大神経内科)

益々、ご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、大変ご多忙と思いますが、調査へのご協力をお願いいたします。

現在、京都府脳卒中地域連携パス会議は、大腿骨頸部骨折地域連携パス会議との合同会議で運営され、計画管理病院 18 施設と、回復期リハビリテーションの連携病院 45 施設、3 段階目の保健医療機関・施設等約 30 施設の参加により運営されています。

2009 年 7 月 1 日から 2010 年 6 月 30 日の調査では、患者総数が 2048 名のうち、パス利用者が 396 名で、パスを用いた詳細な検討を行いました。その後は実施できていません。

また、2014 年 7 月 1 日から 2015 年 6 月 30 日の 1 年間の運用実績では、計画管理病院 18 施設への脳卒中入院患者数は、4,214 人で在宅復帰率 61.2%、地域連携パスの利用者数は、801 人、利用率 19.0%で、その在宅復帰率 48.1%となっていました。

この貴重な地域連携パスのデータを用いて、治療、リハビリテーション、社会復帰、介護保険の利用、生活期への地域連携、高次脳機能障害への支援等について分析し、脳卒中地域連携パスの有用性を明確にし、介護保険の利用や社会復帰を促進する要因の研究を行う予定です。

京都府共通の地域連携パスは、ITを用いた厚生労働省の個人情報ガイドラインに準拠したシステムとして構築され、患者・家族の同意を得て、連結可能な匿名化された情報をオンライン上で共有しています。

そして、連携パス Excel シートとして、基本情報、オーバービュー、急性期の医師、薬剤、看護師、リハビリ、MSW、摂食嚥下のシート及び回復期の医師、薬剤、看護師、リハビリ、MSW、摂食嚥下のシート、生活期医師シート、スタッフ用パス、患者用パス、ADL、FIM、長谷川式簡易知能検査のシートにより構成されています。

今回の評価項目は、回復期リハビリテーション病院において、急性期医師シート及び回復期の各シートより必要な情報を取り出し、匿名化された二次資料の作成をお願いする予定です。記載内容は、すべて、シートからの転記ですので、基本的には誰にでも可能な作業ですが、お世話を掛けることになりますので、宜しくお願いします。

ご回答いただいた内容は、匿名化されたものとなりますが、個人が特定されないように十分配慮

し、調査報告書として取りまとめます。また、貴院にとっても貴重な資料となりますので、ご協力のほど宜しくお願いします

対象者は、2014年7月1日から2015年6月30日の期間に計画管理病院に入院し、その後、京都府共通の脳卒中地域連携パスにて、回復期リハビリテーション病院に入院し退院した患者です。

各シートの以下の項目より作成し、基本的に添付しましたCD-ROMに、項目をチェックしていただくことをお願いいたします。調査期間は、2016年11月20日より2016年12月25日までですので、同封のゆうパックにて返送をお願いいたします。

本研究は、1症例につき約15分程度の時間を要しますので、大変恐縮ですが1症例につき1000円相当の図書券の謝礼をさせて頂く予定です。

宜しく、ご協力をお願いいたします。

2016年11月14日

お問い合わせ・調査送付先

602-8566

京都市上京区河原町通り広小路上る梶井町 465

京都府立医科大学神経内科

武 澤 信 夫

(京都府リハビリテーション支援センター)

電話 075-251-5388

FAX075-251-5389

E-mail:n-takezawa50@pref.kyoto.lg.jp

調査項目の概略

(急性期医師シート)・性別・年齢・診断名、病名、病型、発症月日・損傷部位：左右、中央、両側。
大脳：皮質、皮質下、皮質＋皮質下。部位：内頸動脈、前交通動脈、中大脳動脈、椎骨脳底動脈。
前頭葉、側頭葉、後頭葉、被核、視床、小脳、中脳、橋、延髄・治療、

(回復期医師シート)・急性期施設入院年月日・退院年月日、回復期施設入院年月日・退職
年月日・転帰、転帰施設名、退院時mRS、経過中合併症：肺炎、痙攣発作、DVT、消
化管出血、尿路感染症、その他・リスク因子：骨粗鬆症、肝機能障害、呼吸器疾患、骨折
既往、神経筋疾患、腎不全、認知症、心房細動、糖尿病、脳卒中既往、心不全、悪性腫瘍

(回復期看護シート)・栄養管理：経口自立、経口介助、胃瘻、IVH、末梢輸液・排便：自立、ト
イレ誘導、ポータブルトイレ、便器、お糞褌・排尿：自立、トイレ誘導、ポータブルトイレ、尿器、
おむつ、間欠導尿、留置カテーテル・清潔：自立、浴槽入浴、機械浴、シャワー浴、ベッド上清拭・
日常生活機能：入院時、退院時・障害老人の日常生活自立度判定基準・認知症老人の日常生活自立
度判定基準(回復期リハビリテーションシート)・リハ：PT、OT、ST・麻痺：右、左。BrStage：
上肢、手指、下肢。強調運動障害(有無)、嚥下障害(有無)、構音障害(有無)、感覚障害(有無)・
高次脳機能障害：失語、失行、失認、注意障害、記憶障害、情動障害、半側空間無視、前頭葉障害、
未確定認知障害・HDS-R()、MMSE()・下肢装具：有無、長下肢装具、
短下肢装具・FIM：入院時(運動：、認知：、合計：)退院時(運動：、認知：、合計：)

(回復期MSWシート)・介護保険：申請(認定済み、未申請、申請中：新規・更新・区分変更)・
介護サービス。利用：有無・介護保険認定：要支援1，要支援2，要介護1，要介護2，要介護3，
要介護4，要介護5・ケアマネージャー：有無・調整内容：福祉用具貸与、訪問看護、訪問診療、
訪問リハビリ、通所系サービス、小規模多機能、その他・障害認定：身体：未申請、申請中、身体
障害者手帳有り(種 級)部位；視覚、聴覚、言語、肢体、内部。障害名()精神障害者保健
福祉手帳：なし、あり(級)療育手帳：なし、A1，A2，B1，B2・家族状況：同居者：な
し、配偶者、子ども()、父、母、兄弟姉妹()、その他。介護者：なし、配偶者、子ども()、
父、母、兄弟姉妹()、その他・住環境：持ち家、賃貸戸建て、分譲集合住宅、賃貸集合住宅、E
V有無・改修状況：屋外階段、屋内階段、家への出入り、廊下、浴室、トイレ、他()・転帰：在
宅、職場復帰、老人保健施設、その他の施設、病院、未定・継続的なリハ：通院リハ、通所リハ、
訪問リハ・在宅主治医：有無など

上記の項目を基本に調査表を作成しています。

地域連携パス担当者さま

<脳卒中地域連携パス調査へのご協力のお願ひ>

平成 28 年度厚生労働省労災疾病臨床研究事業費補助金
「高次脳機能障害の診断・リハビリ・社会復帰促進パスの策定」分担研究者
武 澤 信 夫
(京都府リハビリテーション支援センター・京都府立医大神経内科)

益々、ご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、大変ご多忙と思いますが、調査へのご協力をお願いいたします。

現在、京都府脳卒中地域連携パス会議は、大腿骨頸部骨折地域連携パス会議との合同会議で運営され、計画管理病院 18 施設と、回復期リハビリテーションの連携病院 45 施設、3 段階目の保健医療機関・施設等約 30 施設の参加により運営されています。

2009 年 7 月 1 日から 2010 年 6 月 30 日の調査では、患者総数が 2048 名のうち、パス利用者が 396 名で、パスを用いた詳細な検討を行いました。その後は実施できていません。

また、2014 年 7 月 1 日から 2015 年 6 月 30 日の 1 年間の運用実績では、計画管理病院 18 施設への脳卒中入院患者数は、4,214 人で在宅復帰率 61.2%、地域連携パスの利用者数は、801 人、利用率 19.0%で、その在宅復帰率 48.1%となっていました。

この貴重な地域連携パスのデータを用いて、治療、リハビリテーション、社会復帰、介護保険の利用、生活期への地域連携、高次脳機能障害への支援等について分析し、脳卒中地域連携パスの有用性を明確にし、介護保険の利用や社会復帰を促進する要因の研究を行う予定です。

京都府共通の地域連携パスは、I Tを用いた厚生労働省の個人情報ガイドラインに準拠したシステムとして構築され、患者・家族の同意を得て、連結可能な匿名化された情報をオンライン上で共有しています。

そして、連携パス Excel シートとして、基本情報、オーバービュー、急性期の医師、薬剤、看護師、リハビリ、MSW、摂食嚥下のシート及び回復期の医師、薬剤、看護師、リハビリ、MSW、摂食嚥下のシート、生活期医師シート、スタッフ用パス、患者用パス、ADL, FIM, 長谷川式簡易知能検査のシートにより構成されています。

今回の評価項目は、回復期リハビリテーション病院において、急性期医師シート及び回復期の各シートより必要な情報を取り出し、匿名化された二次資料の作成をお願いする予定です。記載内容は、すべて、シートからの転記ですので、基本的には誰にでも可能な作業ですが、お世話を掛けることになりますので、宜しくお願いします。

ご回答いただいた内容は、匿名化されたものとなりますが、個人が特定されないように十分配慮し、調査報告書として取りまとめます。また、貴院にとっても貴重な資料となりますので、ご協力のほど宜しくお願いします

対象者は、2014 年 7 月 1 日から 2015 年 6 月 30 日の期間に計画管理病院に入院し、その後、京都

府共通の脳卒中地域連携パスにて、回復期リハビリテーション病院に入院し退院した患者です。

各シートの以下の項目より作成し、基本的に添付しましたCD-ROMに、項目をチェックしていただくをお願いいたします。調査期間は、2016年11月20日より2016年12月25日までに、返送をお願いいたします。

本研究は、1症例につき約15分程度の時間を要しますので、大変恐縮ですが1症例につき1000円相当の図書券の謝礼をさせて頂く予定です。

宜しく、ご協力をお願いいたします。

また、ご協力に当たり、別紙の連絡票に記入の上、返送してください。

2016年11月14日

お問い合わせ・調査送付先

602-8566

京都市上京区河原町通り広小路上る梶井町465

京都府立医科大学神経内科

武 澤 信 夫

(京都府リハビリテーション支援センター)

電話 075-251-5388

FAX075-251-5389

E-mail:n-takezawa50@pref.kyoto.lg.jp

調査項目の概略

(急性期医師シート)・性別・年齢・診断名、病名、病型、発症月日・損傷部位：左右、中央、両側。
大脳：皮質、皮質下、皮質＋皮質下。部位：内頸動脈、前交通動脈、中大脳動脈、椎骨脳底動脈。
前頭葉、側頭葉、後頭葉、被核、視床、小脳、中脳、橋、延髄・治療、

(回復期医師シート)・急性期施設入院年月日・退院年月日、回復期施設入院年月日・退職
年月日・転帰、転帰施設名、退院時mRS、経過中合併症：肺炎、痙攣発作、DVT、消
化管出血、尿路感染症、その他・リスク因子：骨粗鬆症、肝機能障害、呼吸器疾患、骨折
既往、神経筋疾患、腎不全、認知症、心房細動、糖尿病、脳卒中既往、心不全、悪性腫瘍

(回復期看護シート)・栄養管理：経口自立、経口介助、胃瘻、IVH、末梢輸液・排便：自立、ト
イレ誘導、ポータブルトイレ、便器、お糞褌・排尿：自立、トイレ誘導、ポータブルトイレ、尿器、
おむつ、間欠導尿、留置カテーテル・清潔：自立、浴槽入浴、機械浴、シャワー浴、ベッド上清拭・
日常生活機能：入院時、退院時・障害老人の日常生活自立度判定基準・認知症老人の日常生活自立
度判定基準

(回復期リハビリテーションシート)・リハ：PT、OT、ST・麻痺：右、左。BrStage：上肢、
手指、下肢。強調運動障害(有無)、嚥下障害(有無)、構音障害(有無)、感覚障害(有無)・高次
脳機能障害：失語、失行、失認、注意障害、記憶障害、情動障害、半側空間無視、前頭葉障害、未
確定認知障害・HDS-R()、MMSE()・下肢装具：有無、長下肢装具、
短下肢装具・FIM：入院時(運動：、認知：、合計：)退院時(運動：、認知：、合計：)

(回復期MSWシート)・介護保険：申請(認定済み、未申請、申請中：新規・更新・区分変更)・
介護サービス。利用：有無・介護保険認定：要支援1，要支援2，要介護1，要介護2，要介護3，
要介護4，要介護5・ケアマネージャー：有無・調整内容：福祉用具貸与、訪問看護、訪問診療、
訪問リハビリ、通所系サービス、小規模多機能、その他・障害認定：身体：未申請、申請中、身体
障害者手帳有り(種 級)部位：視覚、聴覚、言語、肢体、内部。障害名()精神障害者保健
福祉手帳：なし、あり(級)療育手帳：なし、A1，A2，B1，B2・家族状況：同居者：な
し、配偶者、子ども()、父、母、兄弟姉妹()、その他。介護者：なし、配偶者、子ども()、
父、母、兄弟姉妹()、その他・住環境：持ち家、賃貸戸建て、分譲集合住宅、賃貸集合住宅、E
V有無・改修状況：屋外階段、屋内階段、家への出入り、廊下、浴室、トイレ、他()・転帰：在
宅、職場復帰、老人保健施設、その他の施設、病院、未定・継続的なリハ：通院リハ、通所リハ、
訪問リハ・在宅主治医：有無など

上記の内容を基本に、調査表を作成しています。

2. 調査表

脳卒中地域連携クリティカルパス

病院名:						担当者名:			
基本情報						急性期情報(医師シート)			
番号	年齢	性別	病名	病型	発症日	急性期入院日	急性期退院日	左右	大脳につき
A-00	80	女	脳出血	その他	2016年1月1日	2016年3月1日	2016年4月4日	右	その他
A-00	60	女	脳梗塞	アテローム	2016年1月17日	2016年1月18日	2016年2月12日	右	皮質

部位														
内頸動脈	前交通動脈	前大脳動脈	中大脳動脈	椎骨脳底動脈	前頭葉	頭頂葉	側頭葉	後頭葉	被殻	視床	小脳	中脳	橋	延髄
0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

急性期情報(リハビリシート)								回復期情報(医師シート)						
急性期FIM								急性期 mRS	回復期 入院日	発症～回 復期入院	回復期 退院日	回復期 在院日数	退院時 mRS	mRS 改善度
入院時 (運動)	入院時 (認知)	入院時 (合計)	退院時 (運動)	退院時 (認知)	退院時 (合計)	改善度								
40	25	65	54	27	81	16	4	2016年4月4日	94	2016年8月12日	130	2	2	
40	20	60	50	24	74	14	5	2016年2月12日	26	2016年7月27日	166	4	1	
		0			0	0							0	

経過中合併症										リスク因子							
肺炎	痙攣発作	DVT	消化管出血	尿路感染	その他	骨粗鬆症	肝機能障害	呼吸器疾患	骨折の既往	神経筋疾患	腎不全	認知症	心房細動	糖尿病	脳卒中既往	心不全	悪性腫瘍
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

回復期情報(看護師シート)																	
栄養管理	排便	排尿	清潔	行動障害	行動障害内容(ありの方のみ)												
					幻覚幻聴	不穏	昼夜逆転	暴力	徘徊	不潔行為	興奮	妄想	介護への抵抗	不眠	転倒転落	精神症状	
経口自立	自立	自立	シャワー浴	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
経口自立	トイレ誘導	トイレ誘導	シャワー浴	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

					回復期情報(リハビリシート)											
看護必要度			日常生活自立度		利き手	麻痺	BrStage			健側MMT			協調運動障害	嚥下障害	構音障害	感覚障害
入院時	退院時	改善度	障害老人	認知症老人			上肢	手指	下肢	上肢	手指	下肢				
8	0	8	A1	自立	右	右	Ⅲ	Ⅱ	Ⅵ	5	5	4	0	0	0	0
9	6	3	B1	Ⅱa	右	左	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	5	5	5	0	0	0	0
		0														

高次脳機能障害									HDSR		MMSE		下肢装具
失語	失行	失認	半側空間無視	前頭葉障害	未確定認知障害	注意障害	記憶障害	情動障害	初回	2回目	初回	2回目	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	25	20	25	短下肢
0	0	1	0	1	0	1	1	1	18	22	24	25	短下肢

回復期FIM							回復期情報(MSWシート)									
入院時 (運動)	入院時 (認知)	入院時 (合計)	退院時 (運動)	退院時 (認知)	退院時 (合計)	改善度	介護保険									
申請状況	認定	福祉用具	訪問看護	訪問診療	訪問リハ ビリ	通所系	小規模多 機能	他								
54	27	81	81	29	110	29	認定済	要介護3	1	0	0	1	1	0	0	
29	16	45	50	21	71	26	認定済	要介護5	0	0	0	0	0	0	0	
		0			0	0										

障害認定										家族状況			住環境							
身体	視覚	聴覚	言語	肢体	内部	精神	療育	同居者	介護者	昼間	住宅状況	屋外階段	屋内階段	家への出 入り	廊下	浴室	トイレ	他		
未申請	0	0	0	0	0	未申請	0	1	1	独居	分譲集 合住宅	0	0	1	0	1	1	0		
手帳有	0	0	0	0	0	未申請	0	0	0	独居	賃貸集 合住宅	0	0	0	0	0	0	0		

継続的なリハ			在宅主 治医	転帰カテゴリ	職場復帰情報	備考
通院	通所	訪問				
0	1	1	1	在宅	従前より無職	
0	0	0	0	老人保健施設	従前より無職	老健後に特養入所予定

平成 29 年度労災疾病臨床研究事業費補助金
「高次脳機能障害者の診断・リハビリ・社会復帰促進パスの策定」分担研究

京都府共通の脳卒中地域連携パス利用者と
高次脳機能障害の実態調査報告書

平成 30 年（2018 年）1 月

発行者 京都府立医科大学大学院医学研究科神経内科学
京都府リハビリテーション支援センター
武澤信夫
〒602-8566 京都市上京区河原町通り広小路上る梶井町 465
Tel 075-251-5388
e-mail n-takezawa50@pref.kyoto.lg.jp

集計・印刷 株式会社 地域社会研究所